

博 士 論 文

球技の個人戦術における実践知の構造に関する研究  
— ハンドボールの事例を中心にして —

平成 23 年度

會 田 宏

筑 波 大 学

## 目 次

第1章 序章 .....	1
1. 研究の背景 .....	1
(1) 球技における戦術と戦術力の区別 .....	1
(2) 個人戦術における技術の役割 .....	2
(3) 卓越した個人戦術に関する実践知を研究する意義 .....	3
(4) 個人戦術に関する先行研究を実践の場に活用する際の問題点 .....	4
①戦術的思考力にアプローチした研究の問題点 .....	4
②技術力にアプローチした研究の問題点 .....	6
③対応動作に関する研究の問題点 .....	7
④ゲームパフォーマンスの記述分析の問題点 .....	7
⑤まとめ .....	8
(5) 個人戦術に関する実践知を研究する際に必要な前提 .....	8
①個人戦術に関する実践知の理解の仕方についての検討 .....	8
②個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発 .....	10
2. 研究の目的 .....	10
3. 論文の構成 .....	11
第2章 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方 .....	15
1. 個人戦術と個人戦術に関連する用語の概念規定 .....	15
(1) 個人戦術 .....	15
(2) 個人戦術力 .....	15
(3) 個人戦術に関する達成力 .....	15
(4) 戦術的思考力と技術力 .....	15
(5) 技術 .....	16
2. 実践知と身体知に関する概念規定 .....	16
(1) 実践知 .....	16
(2) 身体知 .....	17
(3) スポーツにおける運動実践知と創発身体知との関係 .....	17

(4) <カン>身体知と<コツ>身体知 .....	18
3. 個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念 .....	19
(1) 間主観性・間主観的把握 .....	19
(2) 間動感性 .....	19
(3) 志向 .....	19
4. 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方 .....	20
(1) 戦術的思考力と技術力のゲシュタルトクライスの関係 .....	20
(2) 個人戦術における<コツ>身体知と<カン>身体知 .....	21
(3) チーム・グループ戦術と個人戦術との関係 .....	22
5. まとめ .....	23
 第3章 個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発とその有効性の検証 .....	25
1. 個人戦術に関する実践知への質的研究によるアプローチ .....	25
(1) 実践知の特性と自然科学的アプローチの限界 .....	25
(2) 質的研究の有効性 .....	26
(3) 質的研究の科学性 .....	27
2. 個人戦術に関する実践知を提示するための具体的方法の開発 .....	28
(1) 対象者の選択 .....	28
(2) 協力依頼および個人情報への配慮 .....	28
(3) 内省による実践知へのアプローチ .....	28
(4) 内省の手がかりとしての「動きのコツ」 .....	29
(5) 語りによる内省の外化 .....	29
(6) 内省を活性化させる手段としての事前アンケート調査 .....	30
(7) 対話による語りの共同産出 .....	38
(8) 聞き手の現場感覚および生成的視点 .....	38
(9) インタビュー調査の内容と方法 .....	39
(10) インタビュー調査の記録 .....	39
(11) 語りの作成 .....	39
(12) まとめ .....	42

3. 開発した方法を用いて個人戦術に関する実践知を提示した調査事例 .....	44
(1) 事例1：松井幸嗣氏 .....	44
①競技種目 .....	44
②主な戦績 .....	44
③競技歴 .....	44
④語りの内容 .....	44
⑤語りにおいて注目すべき内容の考察 .....	49
(2) 事例2：首藤信一氏 .....	50
①競技種目 .....	50
②主な戦績 .....	50
③競技歴 .....	50
④語りの内容 .....	50
⑤語りにおいて注目すべき内容の考察 .....	55
(3) 事例3：酒巻清治氏 .....	56
①競技種目 .....	56
②主な戦績 .....	56
③競技歴 .....	56
④語りの内容 .....	57
⑤語りにおいて注目すべき内容の考察 .....	64
(4) 事例4：藤井孝志氏 .....	65
①競技種目 .....	65
②主な戦績 .....	65
③競技歴 .....	65
④語りの内容 .....	65
⑤語りにおいて注目すべき内容の考察 .....	71
(5) 事例5：富本栄次氏 .....	71
①競技種目 .....	71
②主な戦績 .....	71
③競技歴 .....	72
④語りの内容 .....	72

⑤語りにおいて注目すべき内容の考察 .....	80
4. 個人戦術に関する実践知を提示するために開発した方法の有効性 .....	81
5. まとめ .....	83
 第4章 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造 .....	85
1. 目的 .....	85
2. 方法 .....	85
(1) 対象者 .....	85
①対象者1：橋本行弘 氏 .....	86
②対象者2：ワン・タオ 氏 .....	86
③対象者3：玉村健次 氏 .....	87
④対象者4：西山 清 氏 .....	87
⑤対象者5：堀田敬章 氏 .....	88
(2) インタビュー調査の内容と方法 .....	89
(3) 語りの作成とテキストの作成 .....	90
(4) テキストの分析 .....	91
3. 結果 .....	91
(1) 橋本行弘 氏（ゴールキーパー） .....	91
(2) ワン・タオ 氏（ゴールキーパー） .....	92
(3) 玉村健次 氏（右バックプレーヤー，左利き） .....	93
(4) 西山 清 氏（左バックプレーヤー，右利き） .....	94
(5) 堀田敬章 氏（右サイドプレーヤー，左利き） .....	95
4. 考察 .....	96
(1) 個人戦術を検討する最小単位 .....	96
(2) 個人戦術における志向 .....	98
①シュートの最終局面における志向の対峙 .....	98
②ゴールキーパーの志向 .....	99
③シューターの志向 .....	99
(3) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造 .....	100
5. 要約 .....	102

第5章 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程	
に関する事例研究 .....	104
1. 目的 .....	104
2. 本研究の限界と適用範囲 .....	105
3. 方法 .....	106
(1) 対象者 .....	106
(2) インタビュー調査の内容と方法 .....	107
(3) 分析方法 .....	107
4. 結果 .....	107
(1) 獲得した動きのコツ .....	108
(2) 動きのコツの獲得過程 .....	108
5. 考察 .....	112
(1) 実践知の獲得における4つの段階 .....	112
①「動きのコツとの出会い」の段階 .....	112
②「動きのコツの理解」の段階 .....	113
③「動きのコツの消失」の段階 .....	113
④「動きのコツの獲得」の段階 .....	114
(2) 実践知の獲得過程の特徴 .....	115
6. 要約 .....	115
第6章 終章 .....	117
1. 結論 .....	117
(1) 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方（第2章） .....	118
(2) 個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発とその有効性の検証 （第3章） .....	119
(3) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造 （第4章） .....	119
(4) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程に 関する事例研究（第5章） .....	120
(5) 論文全体の結論 .....	120

①卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造 .....	120
②個人戦術力の向上への寄与 .....	122
2. 今後の課題 .....	124
注 .....	126
文献 .....	128
謝辞 .....	137

## 第 1 章 序章

### 1. 研究の背景

#### (1) 球技における戦術と戦術力の区別

知または知識は両義性を持っている。ポラニー（1980, p.19）は、それを「知的に知る」（*wissen*）と「実践的に知る」（*können*）に区別し、前者を「理論的な知識」、後者を「実践的な知識」と呼んでいる。また、ライル（1987）は、「何であるかを知る」（*knowing what*）と「いかにするかを知る」（*knowing how*）に区別している。さらに、中村（1992, pp.6-7）は、普遍性、論理性、客観性という 3 つの性質を持つ「科学の知」と固有世界、事物の多義性、身体をそなえた行為の 3 つの性質を持つ「臨床の知」に区別している。ポラニーの「理論的な知識」、ライルの「何であるかを知る」、中村の「科学の知」は、いずれも自然の因果的な関係の把握に基づく（村上, 1981, p.14）、客体として対象化された知または知識であり、一般に理論知と呼ばれる。また、「実践的な知識」「いかにするかを知る」「臨床の知」は、身体的訓練において初めて習得される行為の中に示される知的な働きとその能力（村上, 1981, p.15）、すなわち人間の知るという能力であり、一般に実践知と呼ばれる。

球技（注 1）の戦術に関する知または知識も両義性を持って使われている。客体として対象化された理論知としての戦術は、戦術理論とも呼ばれ、競争の指揮の形態、可能性、手段ならびに仕方に関する理論（瀧井, 1990）、行動の結果を考慮して最も合理的に目的を達成する方法（朝岡, 1990）、最適の仕方ですら相手プレーヤー（たち）をうち負かすことができるような行動計画や二者択一的決定システム（金子, 1993a）、個々のゲームを展開していくための事前計画（會田, 2006a）を意味する。一方、行為の中に示される知的な働きとその能力、すなわち実践知としての戦術は、戦術行為とも呼ばれ、合目的なあるいはその時どきのゲーム状況（注 2）において可能かつ必要なプレーヤーの個人的行動と集団行動の総体（瀧井, 1990）、試合中に起こりうる具体的な行動を可能にしている知もしくは知的作用（朝岡, 1990）を意味する。

具体的には、ディフェンスの裏に通すサッカーのスルーパス、バレーボールでのスピード豊かなコンビネーションプレー、ノーマークシュートを作り出すハンドボールのフォーメーションプレーなど、相手の隙をついたり、裏をかいたりする、球技に特徴的なこれらのプレーが戦術行為にあたる（會田, 1999）。戦術理論は、戦術行為を論理的に説明するも



のであり、コーチングの実践現場で応用されていく。例えば、個人の戦術行為を「選手は、変化する状況に応じてプレーを選択し、味方と協力して、そのプレーを実行していく」と理論化した場合、コーチングの実践現場では、「状況に応じてプレーを選択する」「プレーを味方とあわせる」「高いレベルで動作を遂行する」の3つの条件を整えることが、指導者と選手に要求されることになる。

一般に、戦術理論と戦術行為は明確に区別して用いられず、一般的な知または知識と同様、球技の戦術も両義性を持って用いられている。しかし、本論では、知識や情報としての戦術に関する知識と達成力や行動能力としての戦術行為を可能にする実践的知識を区別し、後者の意味の戦術力を研究の対象とする。

## (2) 個人戦術における技術の役割

戦術は、ゲーム状況の解決に携わる選手の数によって、チーム戦術、グループ戦術、個人戦術に分けられる (Stieler et al, 1988, S.77-85)。さまざまな球技種目における、近年の選手育成システムを概観すると、国内外を問わず、個人の能力の向上が強調されている。このことは、個人戦術力の養成および指導がコーチングの実践現場において重要性を増してきていることを示している。

球技における個人戦術はゲーム状況の合目的的な解決、すなわち味方に有利で相手に不利な状況を作り出すことに方向づけられる。そのため、1つのゲーム状況を解決できる個人の運動はいくつも存在する (中川, 1991)。また、1つのゲーム状況を常に効果的に解決するには、いくつもの習熟した動作が必要とされる。ある1つの状況において、プレーヤーの行為が1つのステレオタイプとして鋳型化されている場合には、相手プレーヤーに容易に状況判断を許してしまう。その結果、自己のプレーは相手に簡単に予測され (読まれ)、それを阻止するのに最適なプレーが行われてしまう。一方、プレーヤーがゲーム状況を解決するための選択肢をいくつも持っている場合には、逆に自己のプレーは相手に予測され (読まれ) にくくなる。

例えば、バレーボールにおいてストレートにスパイクするとみせてクロスに打つことや、スパイクを強打するとみせて指の腹でプッシュし、ブロックの裏へふわりとボールを落とす「フェイント」などは、ブロックをはずしてポイントするために有効な個人戦術である。この場合、ストレートにスパイクする技術に習熟すること、クロスにスパイクする技術に習熟すること、および「フェイント」する技術に習熟することが要求され、これらに優れ

ることによって、自己と相手との関係の中で見られるゲーム状況を効果的に解決することができる。このように、「選択肢として必要十分な数の習熟したテクニックを持っていなければ、必然的にプレーの選択の幅が狭くなり効果的にプレーに関する決定を下せなくなる」(中川, 1986)。したがって、球技では、できるだけ多くの、できるだけ高いレベルでの技術の習熟が、1つのゲーム状況を効果的に解決するために重要な前提条件になり、自己の身体的・心理的特性にあう1つの技術を完成させることが重要である陸上競技などのスポーツ種目とは、多様な技術の習熟の必要性という点においても異なるとらえ方が必要である。

### (3) 卓越した個人戦術に関する実践知を研究する意義

球技ではゲーム状況がめまぐるしく変化し続ける。また、それぞれのゲーム状況を解決できるプレーがいくつもある。そのため、戦術は、技術の習熟度、体力のレベル、心理的状态など、競技力を規定する他の構成要因よりも注目される。一般には、状況を解決できる技術の選択肢、共同してプレーする味方の人数、相手の防御または攻撃のレパートリー、ゲームに影響する外的条件などが多ければ多いほど、戦術はより大きな意味を持つ。

球技における戦術は、ある1つの攻撃戦術を守る適切な防御戦術が展開され、その防御戦術を攻める効果的な攻撃戦術が生まれていく中で発達する。このような戦術の発達を観察するのに、世界選手権やオリンピックは最高の舞台である(Döbler, 1989, S.67-68)。ここでは、既成の戦術がより洗練されると同時に、それまでに見られなかった新たな戦術が現れる。トップレベルの大会が連続していく中で形づくられる戦術の発達過程は、それぞれの球技における戦術の系統発生そのものであり、トップレベルにおける戦術の発達の歴史が、その後のそれぞれの球技種目における個体発生の見本になることを示唆している(Döbler, 1989, S.90; 瀧井, 1988)。球技における戦術は、競技力を決定する最も重要な要因の1つである(Döbler, 1989, S.190; Roth, 1989)。したがって、トップレベルにおける戦術の発達の要因や過程を理論的・実践的に明らかにすることは、個人およびチームの習熟段階や発達の方向を理解するのに役立ち(Döbler, 1989, S.67-68)、コーチングおよびトレーニングの場に有用な知見を提供できると考えられる。

卓越した技量を持った選手が創造した個人戦術は、何年か遅れて、各国内のシニアチーム、ジュニアチーム、さらに中程度の競技レベルのチームでも現れるようになる(Späte und Wilke, 1989)。そのため、新しい個人戦術の習得が、その後の選手養成の課題になる。例

例えば、ハンドボールにおいて 1980 年代に大きな成果を収めた旧ユーゴスラビア代表チームの M.イサコビッチ選手が創造した「逆スピッシュシュート」(注 3) は、当時としては画期的なプレーであったが、現在では、国際レベルのサイドプレイヤーにおける基本的なシュートの個人戦術の 1 つとして位置づけられるようになっている (Thiel et al., 1991). また、1990 年代に大きな成果を収めたフランス代表チームの J.リシャールソン選手の、状況に応じて創造される防御プレーは、さまざまな競技レベルにおいてトレーニング目標となっている (Späte, 1992 ; Costantini, 1995 ; Feddern, 1995).

清水 (2007) は、自らへの深い洞察とともに、他者をからだ (の感覚) から理解するようなコミュニケーションの回路が開かれていくアスリートに関して、「これまで蓄えられた多くの実践と著作をふまえ、体育やスポーツに関わる人々がからだの感覚を振り所にしたコミュニケーションや実践知のプロセスについて議論を深め、広げていくことが重要」であると指摘している。

また、コーチングの実践現場では、競技者の主観的経験は重要であり、それを研究すべきという指摘 (Dale, 1996)、技術の改善には動きの感じと呼ばれているような専門家の直感的な知の内容と構造を明らかにする必要があるという指摘 (ヘベル・リッペンズ, 2001)、技術の改善には主観的な情報を選手に伝えることが効果的であるという指摘 (阿江, 1999) も挙げられている。

これらの指摘は、卓越した選手の経験に基づいた実践知を明らかにすることが、長期的な視点を持って選手を指導するために役立つこと (Ehret und Späte, 1994) を支持している。

#### (4) 個人戦術に関する先行研究を実践の場に活用する際の問題点

個人戦術力は、「ゲーム状況の分析」「プレーの選択」といった戦術的思考力 (知覚・認知的要素) と「動作の遂行」といった技術力 (技術的要素) に規定される (會田, 1992). 個人戦術に関する先行研究では、主に自然科学の方法を用いて、戦術的思考力と技術力のそれぞれが個別に研究対象とされたり、実際のゲーム中に観察、測定および検証可能な現象がとりあげられている。しかし、研究結果を実践現場に活用しようとする、さまざまな問題点が浮かび上がる。

##### ①戦術的思考力にアプローチした研究の問題点

認知科学の領域では、スポーツなどの高度な課題をこなすことができるスムーズな体の動かし方は身体スキルと呼ばれている (植野, 2009). 従来の身体スキルの研究では、情報

処理的アプローチ（関矢，2000）が隆盛であった（加藤，2009，p.145）．この場合には，人間の内部では，（1）刺激同定，（2）反応選択，（3）反応プログラミングという3つの段階の情報処理を行っているというモデルを想定することによって（Schmidt and Lee, 2005），人間の運動制御について検討してきた．このような情報処理的アプローチは，処理として中枢の存在を仮定し，人間の内的処理に注目している（加藤，2009，p.149）．それにしたがえば，バスケットボールにおいて味方にパスをする場面では，まず，刺激同定の段階で味方選手と相手選手の位置が検出され，反応選択の段階ではどの方向にパスを出すべきかが選択され，反応プログラミングの段階では実際にパスという運動を実行するための運動システムが組織される．この前半の内的処理が個人戦術力を構成している戦術的思考力（知覚・認知的要素）に相当し，後半の運動の実行が技術力（技術的要素）に相当する．

中川（1984）は，このモデルを球技選手の状況判断能力の理解に応用し，さまざまな研究を行っている．そこでは，プレー実施に先立つ知覚・認知的な働きを状況判断ととらえ，状況判断には，外的ゲーム状況に対する選択的注意，ゲームの状況の認知，ゲーム状況の予測，プレーに関する決定の4つの過程があると仮定している．また，個人戦術の遂行に対して仮定したモデルの論理的整合性を検証し，実践現場における状況判断トレーニングの有効性について検討している．その結果，実験室レベルではその有効性が実証できたが，実際のフィールドレベルではその有効性を示す実証的証拠は得られなかった（中川，2000）．このことは，情報処理的アプローチを手がかりにして検討された球技選手の状況判断モデルが，ゲーム場面における個人戦術の戦術的思考力を説明しきれないことを示していると考えられる．

また，戦術的思考力にアプローチした研究の多くは，それぞれの競技において典型的に現れるゲーム状況を実際のコートやピッチ上に設定したり，映像として示したりして，被験者に実行すべきプレーを回答させ，専門家によって検討された「選択すべき有効なプレー」との一致度によって，状況判断能力，すなわち戦術的思考力を評価している（中川，1982；中川，1991；鬼澤ほか，2004）．これらの研究では，個々の被験者が持つ選手としての技術力の高低が考慮されないために，プレー場面における状況判断の的確さを評価することができない．例えば，ハンドボールにおいて爆発的な動作でスピードボールを投げる技術力を持つプレーヤーは，シュートに対するゴールキーパーの準備が整っていても，自らの技術力が発揮できる体勢であれば，ゴールできる「実行可能性」（池田，1986）を予期し，シュートを選択できる．一方，スピードボールを投げる技術力を持たないプレーヤー

は、自らの技術力が発揮できる体勢であっても、ゴールキーパーの準備が整っていれば、ゴールできる実行可能性を予測できず、シュートはゴールキーパーに止められると判断し、シュート以外のプレーを選択する。戦術的思考力には、対戦相手の競技力の見積もり、相手の行為の予測、攻防に関する戦術原則の理解などもその前提となる（Döbler, 1989, S.190-191）。そのため、客観的に見て同じようなゲーム状況であっても、ゲーム状況を解決するための「正解」はプレーヤーごとに、また対戦相手によって異なる。

## ②技術力にアプローチした研究の問題点

個人戦術力を構成している技術力にアプローチした研究には、バレーボールにおいてスパイクされたボール速度を大きくするための動作に関するバイオメカニクスの研究（和田ほか, 2003）、テニスの試合中におけるスタンスの異なるフォアハンド・ストローク動作に関するキネマティクスの分析（道上・阿江, 1998；道上・阿江, 2002）などがある。これらの研究では、戦術的思考力の前提となる対戦相手の競技力の見積もりおよび相手の行為の予測（Döbler, 1989, S.190-191）、実行される行為が対戦相手に対して持っている意味、行為に込めた当事者の意図などが考慮されていないために、やはり個人戦術に関する実践知を一面的にしか理解することができない。すなわち、スパイク動作やストローク動作を詳細に分析しても、そのことが対戦相手との関係で発揮され、「駆け引き」という言葉で表現される個人戦術力の構造を明らかにすることにはつながらないのである。このような研究から導き出された理論に基づいて動きを習得した場合、即興的に動くことはできても、目的にあった行為ができない危険性が残されてしまう（金子, 2002, p.468）。

また、球技で広く行われているスキルテスト（Brace, 1966；Krüger and Niedlich, 1985；松田, 1970）では、ある一定の時間内にショットが何投成功するか、ある一定距離のスラロームドリブルを何秒でできるかというテストを用いて、ショットおよびドリブルにおける個人戦術力を評価している（Brace, 1966）。これは、ゲームを構成する技術的要素を、ゲーム状況から絶縁的に取り出して測定・評価するという立場である。これらのテストでは、動きのスピード、正確性、持続性などを測定することが可能である。しかし、球技の技術はゲーム状況の課題を合目的的に解決する個人戦術に活かされてはじめて意味を持つ（會田, 1992）ために、フェイント（注 4）をとまなう突破の技術力は、方向変換走やジグザグ走を用いてもスキルテストでは評価できない。このような対応動作では動作そのもののスピードや持続性はそれほど大きな問題にならないし、ゲームでは無数のゲーム状況

が存在するために、ある1つの正確な動作を評価することは非常に難しいのである。このようにスキルテストでは、テストの条件を実際のゲーム状況にどんなに近づけても、個人戦術に用いられる特定の動作の習熟レベルを時間的・空間的な側面から測定・評価できるにすぎず、その合理性や経済性を評価することはできても、合目的性を評価することはできない。したがって、スキルテストは動作の習熟レベルの客観的な評価には役立っても、テストの条件が実際のゲーム場面と異なるために、テスト結果が個人戦術力を評価しているかどうかの妥当性に問題がある（Kuhn, 1978）。

### ③対応動作に関する研究の問題点

球技の個人戦術の特徴の1つに、それが相手に対応する動作として現れることが挙げられる。対峙する相手との対応動作に着目した研究には、対応動作が求められる状況を実験的に設定し、被験者にその状況に応じたプレーを行わせ、動作開始の時機や動作方法などについて検討した研究（笠井ほか, 1970；大西, 1973）、相手の動作を撮影した映像を再生し、相手の最終動作を予測する時機や正確な予測のための着眼点について検討した研究（平岡, 1980；大西ほか, 1983, pp.70-75）などがある。これらの研究はいずれも、対峙する相手の動作の中に注目すべき情報を探し、最終プレーを予測し、それに対して適切に対応するという状況判断モデルを前提に、球技の対応動作へのアプローチを試みている。また、筋収縮時間や光刺激に対する全身反応時間を手がかりにして、動作開始の時機から逆算して意思決定の時機を考察している。しかし、卓越した選手の場合、相手の動作を早い時期に予測でき、それにふさわしい動作で対応できても、相手を誘い込むためにあえて対応しない（動かない）ことや、相手の判断を誤らせたり、意図を探るためにあえて早めに動作を開始することもある。相手の動作を「読む」と同時に、相手に自らの動作を「読ませる」こと（大西ほか, 1989）も対応動作では重視されているのである。このように考えると、映像分析や床反力分析といった自然科学的手法を用いて対応動作の開始時機や対応動作の方法を正確に同定できても、「読む」「読ませる」という相手との関係の中で実現されていく個人戦術に関する実践知に近づくことは困難である。

### ④ゲームパフォーマンスの記述分析の問題点

ゲームパフォーマンスの記述分析では、例えば、実際のゲーム場面で現れたパスやシュートなどの成功プレーと失敗プレーの記録をとることなどによって個人戦術力を評価しよ

うとしている（長野ほか，2010；Yamada et al., 2011）．これは，ゲームでみられる個人戦術を，その達成結果に着目して観察する立場である．この方法では，統計的な方法を使って，客観的な観察データを得ることが可能である．しかし，球技の競技力は相手との対立的・相対的な関係の中で発揮されるという特徴を持つ（Stieler et al, 1988, S.94-95）ために，この種のデータの評価は単純には行えない（Lutter, 1982）．例えば，シュート場面における課題を達成するための個人戦術の習熟レベルが上がっても，相手ゴールキーパーの個人戦術力が高いために，達成力に向上が認められなかったり，逆に習熟レベルが向上していなくても，相手ゴールキーパーの個人戦術力が低いために，達成力が高く評価されてしまう可能性が生じてしまうのである．

## ⑤まとめ

個人戦術に関する先行研究では，自然科学の方法を用いて，戦術的思考力と技術力のそれぞれが個別に研究対象とされたり，実際のゲーム中に観察，測定および検証可能な現象がとりあげられてきた．自然科学的方法は，構築された理論や抽象化した概念をさまざまな特定の状況に適用することを強みとする（ベナー，2004，p.158）．しかし，一方で，複雑な要因が絡み合う中で発揮される行為を総体として理解したり，行為の意味や意図を理解することはできない．そのため先行研究では，個人戦術力を規定する戦術的思考力と技術力のそれぞれに個別に論理的整合性を与えることはできても，個人戦術力そのものは検討されないままであった．

個人戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討するには，個人戦術を客観化して対象としてとらえるのではなく，「体験者の内的視点」（西條，2007，p.10）や「渦中の視点」（浜田，2007）から，行為者の世界の内部に入り，行為者の立場から世界を眺める必要がある（Nicholls et al., 2005）．また，「戦術力は，単なる机上の構想としての戦術とは区別されて，動感身体知に支えられている」（金子，2005a，pp.257-258）ことを考え合わせれば，「人間の運動感覚能力による形態発生とその伝承の営為を主体原理に基づいて解明しようとする現象学的，形態学的運動分析」（金子，2002，p.139）が行えるように，個人戦術力をとらえ直す必要がある．

## （5）個人戦術に関する実践知を研究する際に必要な前提

### ①個人戦術に関する実践知の理解の仕方についての検討

大西ほか（1983, pp.67-88）は、ハンドボールのシュートで、ゴールキーパーをはずして得点するための条件として、（1）スピードボールを投げること、（2）ゴールキーパーから遠い位置、動作の困難な位置へシュートすること、（3）ゴールキーパーの予測、タイミングをずらすことなどを挙げている。実際のゲーム場面においては、ゴールキーパーにコースは読まれるがボールスピードが速いためにゴールインする場合、ボールスピードは遅いがコースやタイミングをずらすのがうまいためにゴールインする場合などさまざまである。このことは、シュートの個人戦術においては、シュート技術の習熟および知覚・認知的能力としての状況判断能力（中川，1984）など、個人戦術力を決定づける要因が前提条件として必要なこと、いずれの要因に優れるかによって、個人戦術が技術の習熟に優れるタイプ、状況判断能力に優れるタイプなどに分けられることを意味している。

特に、チームで行われる球技では、技術の可能性、味方の数、相手チームの攻撃および防御の可能性などが大きくなり、個人戦術に影響する要因は錯綜する（Döbler, 1989, S.190）。したがって、個人戦術に関する実践知を研究する際には、その能力を決定づけている要因の複合的な関係について十分に検討する必要がある。

しかもわが国においては、体系的な球技運動学研究の基盤が脆弱であり、球技の領域では、技術をはじめとして、技能や戦術など、ゲームにおいて中心的な役割を持つ用語のとらえ方が、種目ごとに、指導者ごとに、研究者ごとに異なる。

例えば、テニスやラグビーでは、ゲーム状況との関連を持たない動作遂行能力をテクニック、ゲームにおけるプレーヤーの総体的なプレー能力の水準をスキルという用語でとらえている（中川，1984）。バスケットボールでは、個人の技術をファンダメンタル、ゲームにおける個人の達成力を個人攻撃および個人防御という用語でとらえている（吉井，1985）。また、ハンドボールでは、シュートやパスなどの個々の技術を基礎技術、ゲームや攻防場面の中での個々の技術の使いこなしを個人戦術という用語でとらえている（大西ほか，1983, p.40）。

そのため、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方を検討しないまま議論を展開して、それを実践に応用させようと試みれば、用語の理解が異なるという研究上の混乱のみならず、個人およびチームの技術的・戦術的達成力の向上を抑えてしまう危険性が生まれてしまうと考えられる。

これらのことは、本論の目的を達成する前に、まず、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について十分検討しなければならないことを意味している。



## ②個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発

卓越した選手の持っている個人戦術に関する実践知は、個人的、経験的な知、柔軟で不定形な知である。実践的世界は理論モデルで把握されるよりも常に複雑であり（ベナー，2004，p.163），自然科学的方法がなじみにくい（中村，1992，pp.132-133）。そのため，競技者の主観的経験や情報，直感的な知，動きの感じを研究するべきという指摘（Dale, 1996；阿江，1999；ヘベル・リップンス，2001）がコーチングの現場において数多く見られるにもかかわらず，卓越した選手の実践知が選手の達成力の向上に活かされるように提示された研究はほとんどない。

実践知を対象とした研究に質的研究がある（無藤，2004）。質的研究はさまざまな学問領域において行われており（小田，1999），実践知を語りとして事例的に記述することが実践的能力の改善に有用な知見になりうることが指摘されている（斎藤・岸本，2003；ベナー，2004；秋田ほか，2005）。このことは，コーチング学において，卓越した選手の実践知を提示するために，質的研究が有用であることを示唆している。

質的研究では，インタビュー，エスノメソドロジー，参与観察，フィールドワークなど，多様な方法が研究目的に応じて用いられており（フリック，2002），個人戦術に関する実践知を質的に明らかにしていく唯一の研究方法が確立されているわけではない。それゆえ，個人戦術に関する実践知について検討する際には，実践知を選手の達成力の向上に活かせるように提示するにはどのような方法を用いるべきかについてあらためて検討し直さなければならない。

## 2. 研究の目的

本研究では，以下の4つの課題を解決することによって，卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造を明らかにし，個人戦術力の向上に寄与できる知見を導くことを目的とする。

課題 1 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討すること

課題 2 球技における個人戦術に関する実践知を提示する方法を開発し，その有効性を検証すること

課題 3 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造について  
明らかにすること

課題 4 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程につ  
いて事例的に明らかにすること

### 3. 論文の構成

第1章においては、研究の背景として、はじめに、球技における戦術および個人戦術について概観し、球技における戦術と戦術力を区別した。次に、卓越した選手の実践知を明らかにすることが、長期的な視点を持って選手を指導するために役立つことを示した。さらに、個人戦術に関する先行研究を概観し、自然科学的方法を用いて個人戦術を検討することは、複雑な要因が絡み合う中で発揮される行為を総体として理解したり、行為の意味や意図を理解することができないため、実践現場における選手の達成力の向上への寄与を視野に入れた場合、解決できないさまざまな問題を抱え込んでしまうことを明らかにした。最後に、個人戦術に関する実践知を研究する際には、その理解の仕方について検討しなければならないこと、個人戦術に関する実践知を選手の達成力の向上に活かせるように提示するための方法を開発しなければならないことを示した。

なお、第1章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏 (1992) ボールゲームにおける技術の特性および技術トレーニングのあり方：球技運動学的視点からの一考察．スポーツ運動学研究．5：17-25.

會田 宏 (1994) ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究．スポーツ運動学研究．7：25-32.

會田 宏 (1999) ボールゲームにおける技術と戦術のとらえ方．武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集，和泉書院：大阪，pp.293-301.

會田 宏 (1999) 球技の監督にとって戦術とは？．バイオメカニクス研究．3：68-73.

第2章においては、はじめに、個人戦術とそれに関連する用語の概念について規定する。次に、実践知と身体知に関する概念および個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念について規定する。最後に、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕

方について検討する。この章では、行為主体の立場から個人戦術力をとらえ直せば、スポーツにおける運動実践知と金子（2007, p.50）の言う創発身体知は同義であること、個人戦術に関する実践知は、戦術的思考力が身体化された＜カン＞身体知と技術力が身体化された＜コツ＞身体知の統一的な行為能力であり、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知はゲシュタルトクライス的關係を形成していること、個人戦術力はチームおよびグループ戦術に規定されると同時に、それらの計画に影響を及ぼすことを提示する。（課題 1）

なお、第 2 章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏（1992） ボールゲームにおける技術の特性および技術トレーニングのあり方：球技運動学的視点からの一考察．スポーツ運動学研究．5：17-25.

會田 宏（1999） ボールゲームにおける技術と戦術のとらえ方．武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集，和泉書院：大阪，pp.293-301.

第 3 章においては、はじめに、個人戦術に関する実践知の構造について検討するためには質的研究によるアプローチが有効であることを述べる。次に、個人戦術に関する実践知を選手の達成力の向上に活かせるように提示するための方法を開発する。さらに、この方法を用いて、国際レベルで活躍した元ハンドボール競技選手 5 名を対象に、個人戦術に関する実践知の提示を試みる。最後に、開発した方法の有効性について検討する。個人戦術に関する実践知を実践現場のリアリティが反映されるように提示するには、動感身体知に支えられている個人戦術力を対象にしなければならない。このために、この章では、動きのコツを手がかりにした内省、語りによる＜コツ＞身体知と＜カン＞身体知の外化・対象化、調査者と対象者による語りの共同産出、語りの内容に関するメンバー・チェックといった手続きが有効であること、これによって、実践の説明と解釈の精度の向上、反証可能性の保証、語りの内容の妥当性および信頼性の保証といった、質的研究における科学性（杉村，2004）を保持しつつ、個人戦術における＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知を行為者の視点から提示できることを示す。（課題 2）

なお、第 3 章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏（2008） ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに．体育学研究，53：61-74.

會田 宏・船木浩斗（2011） ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する

質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに、  
コーチング学研究, 24 : 107-118.

第4章においては、個人戦術に関する実践知を個別事例に基づいて提示し、個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例共通の構図、他の現場にも通じる普遍の構図、すなわち事例を全体的にとらえた時の姿や形の共通性を明示的に描き出すことを通して、ハンドボールにおける個人戦術に関する実践知の構造について検討する。この章では、個人戦術の最小単位は対峙する選手間の関係にあること、卓越した選手の個人戦術力では、相手の行為に対するリアクションの行為が志向されていること、対峙する選手と相互主体的関係、間主観的关系を築くことが重要であることを示す。(課題3)

なお、第4章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに、  
体育学研究, 53 : 61-74.

第5章においては、国際レベルで活躍したハンドボール選手1名を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、動きのコツの獲得過程に関する語りを質的に検討し、実践知の獲得過程に関して事例的に検討する。この章では、実践知の獲得には、「動きのコツとの出会い」「動きのコツの理解」「動きのコツの消失」「動きのコツの獲得」の4つの段階が存在する可能性を示しながら、実践知の獲得過程が、紆余曲折に満ちた、弁証法的ともいうべき形成の過程であることを示す。(課題4)

なお、第5章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏・坂井和明 (2009) 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 56 : 69-76.

第6章においては、本論の結論と今後の課題について述べる。結論では、まず本論の目的を概説し、設定した4つの課題(第2章から第5章)ごとに得られた知見をまとめた後、本論全体の結論として、卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造と個人戦術力の向上に寄与できる知見について述べる。今後の課題では、さまざまな球技種目および習熟レベルの選手における個人戦術に関する実践知について検討を加えることで、個

人戦術に関する実践知をより体系的・包括的にとらえられることを述べる。

なお、第 6 章の内容は以下に示した既発表論文に基づいてまとめられた。

會田 宏 (1992) ボールゲームにおける技術の特性および技術トレーニングのあり

方：球技運動学的視点からの一考察．スポーツ運動学研究．5：17-25.

會田 宏 (2007) 国際レベルで活躍したゴールキーパーの動きのコツに関する事例研

究．(財) 日本ハンドボール協会 ハンドボール研究，9：69-74.

## 第2章 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方

本章では、行為主体の立場から個人戦術をとらえ、個人戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討するために、はじめに、個人戦術とそれに関連する用語、すなわち個人戦術力、個人戦術に関する達成力、戦術的思考力、技術力、技術といった用語の概念について規定する。次に、実践知と身体知に関する概念を規定し、スポーツにおける運動実践知と創発身体知の関係、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知について論じる。さらに、個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念について規定する。最後に、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討する。

### 1. 個人戦術と個人戦術に関連する用語の概念規定

#### (1) 個人戦術

本論では、個人戦術を客体として対象化された理論知と理解し、ゲーム状況を合目的的に解決するために個々の選手が行う手段、方法または行動をとらえる。

#### (2) 個人戦術力

本論では、個人戦術力を行為の中に示される知的な働きとその能力、すなわち実践知と理解し、ゲーム状況を合目的的に解決するために個々の選手が行う具体的・実践的な行為（會田，2006b）をとらえる。

#### (3) 個人戦術に関する達成力

本論では、個人戦術に関する達成力を、ゲーム状況を合目的的に解決するために個々の選手が全力を出し切って行った行為の中に示される知的な働きとその能力（金子，1993b）と理解し、個人戦術力と同義をとらえる。

#### (4) 戦術的思考力と技術力

個人戦術力は一般に戦術的思考力と技術力に規定される（會田，1992）。本論では、戦術的思考力を、個人戦術力を規定する1つの要因であり、「ゲーム状況の分析」「プレーの選

択」といった知覚・認知に関わる能力ととらえる（會田，1992）。また，技術力を，個人戦術力を規定するもう1つの要因であり，「動作の遂行」に関わる能力，「選手自身が技術課題を達成できる能力」（ケルン，1998，p.18）ととらえる。

## （5）技術

本論では，スポーツ運動学の一般理論における技術の概念規定にならい，技術を「一定の運動解決のために発達してきた合理的運動形態」（金子，1985），「合目的的，経済的な運動の実施法，運動課題の合理的な解決法」（Weineck，1990）ととらえ，技術の概念を運動経過に関する事柄に限定して用いる（金子，1984）。

バレーボールやテニスなどのネットを挟む競技，ホッケーやハンドボールのシュートでは，左または右に打つフォームから逆方向に打ったり，強打すると見せてゆるく打つフェイントが見られる。その際のねらいは，相手に判断を迷わせたり，まちがった動作を行わせることによってポイントを得ることにある。このようなフェイントの動作では，教科書的な運動遂行に見られる経済的な運動の実施法や自然科学的な合法則性があえて受け入れられないことがあり，スピードのある正確なストロークやシュートを打つことは難しくなる。しかしこれは，合目的的なゲーム状況の解決に方向づけられるかぎりは最適な運動経過とみなされる（Beyer，1987）。このことは，合目的的，合理的，経済的な運動課題の解決法（Weineck，1990）と理解されるスポーツの技術が，球技においては，ゲーム状況の解決に方向づけられるために，特に運動経過の合目的性が合理性，経済性に優先するという特徴を持つことを意味している。

## 2. 実践知と身体知に関する概念規定

### （1）実践知

本論では，実践知を，実践の場で求められていることが熟慮された，行為とともにある知ととらえる。金子（2002，pp.385-387）は，実践知を＜段取り実践知＞と＜運動実践知＞に分けている。＜段取り実践知＞とは，どのように行動するか of 投企の工夫であり，何をどんな順序で行うのかといった道しるべを指す。＜運動実践知＞とは，自らどのように動くかの動きかたの工夫であり，どのように手足を動かせばよいのか，力の入れ具合はど

の程度にすればよいのかといった運動感覚能力に関わる。実践知は、その個人に身体化されており、本人にとっても、＜段取り実践知＞と＜運動実践知＞の分節化は明確な意識に上ってこない（金子，2002，p.389）。このために、詳細な定義は困難であるが、本論では、実践知の中の、個人の運動感覚能力に関わるコツやカンとしての＜運動実践知＞を対象にする。

## （2）身体知

身体知に関して、加藤（1993）は、運動する主体としての身体が、ある時間や空間の流れの中で体得している知であると述べている。古川ほか（2005）は、言語知とともに、ヒトが有する高度な知的能力であり、訓練によって身体が覚えた高度な技であると述べている。諏訪（2009）は、身体が憶え込んだ技やコツという知識であり、言語化しにくい（もしくはできない）知識であると述べている。金子（2005a，p.2）は、新しい出来事に対して適切に判断し解決できる身体知であると述べている。本論では、これらの身体知のとらえ方にならい、身体知を、身体活動を通して何かを成し遂げようとした場合に、非言語的に、暗黙的に獲得される知的達成力ととらえる。

コーチングの場における身体知には、自らの運動を習得していく中で選手が獲得する創発身体知と学習者に運動図式の発生を促す中で指導者が獲得する促発身体知の2つがある（金子，2007，p.50）。本論では、動く感じ、コツ、カンを覚える選手の創発身体知に着目する。なお、創発身体知は、3つの領域に区別されている（金子，2005a，pp.336-342）。1つ目は、創発身体知の基底をなす始原身体知であり、「今ここの身体知」（王，2010）である。2つ目は、創発身体知の発生に深く関わる形態化身体知であり、「形づくりの身体知」（王，2010）である。3つ目は、創発身体知を仕上げていくための洗練と修正に関わる洗練化身体知であり、「形仕上げの身体知」（王，2010）である。

## （3）スポーツにおける運動実践知と創発身体知との関係

スポーツにおける実践知は、デスクワークにおける実践知とは異なり、自らの身体を動かして工夫したり、身体的訓練において初めて習得される。それは、どのように筋肉を動かしたら（動かさなかったら）泳げるか（溺れるか）という知であり、大脳への中枢回路の働きだけでは獲得できないし（村上，1981，p.15）、体験することなしに言語的活動だけで理解できるものでもない（加藤，1993）。実践知はその個人に身体化されている（金子，



2002, p.389) ために, スポーツにおける運動実践知は身体知であると解釈できる.

スポーツ運動は,「具体的な運動課題を解決して,一定の目的,つまりあらかじめ設定された目標を実現していく限りにおいては,ひとつの運動行為」(マイネル, 1983, p.98) ととらえられる. したがって, スポーツにおける身体知は, 思考上ではなく, 実践の場で発揮される行為とともにある知であると解釈でき, スポーツにおける創発身体知は, 実践知であるとも解釈できる.

柴田・遠山 (2003) は, わざの取得メカニズムを解明するには, 身体全体で五感すべてを挙げて体得する実践知を身体知の別名として受け止めることが有用であると指摘している. 本論では, この意味のスポーツ実践の場における運動実践知と創発身体知は同義であるととらえる (図 1).

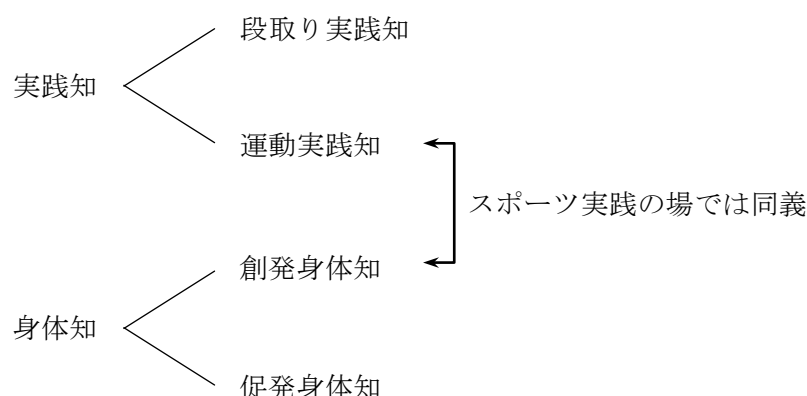


図 1 本論における実践知と身体知のとらえ方

#### (4) <カン>身体知と<コツ>身体知

本論では, 金子 (2002, p.229 ; 2005b, p.25) にしたがって, 場の状況 (注 5) を先読みし, 動きかたを選び, 決断して実行に移せる身体知を<カン>身体知, 対私的な身体それ自体に居合わせている身体知を<コツ>身体知ととらえる.

金子 (2005a, p.2) は, 自ら体系化した詳細な身体知を, 「身近な表現を使えば」と前置きして, 「今ここに居合わせている私の身体がわかり, 私が動く時のコツをつかみ, カンを働かせることができるという働き全体」と表現している. また, 運動感覚能力の創発における中核的位置を占めるのは<コツ>身体知である (金子, 2002, p.469) とも述べている. これらのことは, 創発身体知を理解するためには, <カン>身体知と<コツ>身体知が手

がかりになることを示唆しており、本論では、球技における個人戦術に関する実践知に対して、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知を手がかりにしてアプローチしていく。

### 3. 個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念

#### (1) 間主観性・間主観的把握

本論では、間主観性を「ある事物についての複数の人の主観が一致すること、あるいは、ある事物についての主観が複数の人の間で共有されること」（渡邊，2004）、「相手の主観的な状態と関わり手の主観的な状態とのあいだが何らかのかたちで繋がると言う意味」（鯨岡，2005，p.100）をとらえる。したがって、間主観的把握とは、「他者の主観（心）の中の動きをこの『私』の主観（心）においてつかむこと」（鯨岡，2005，p.16）を意味する。質的研究では、これまでの客観主義的研究では扱えなかったが、実践の場で確かに感じ取られる相手の「思い」や情動の動きを対象にする（鯨岡，2005，pp.18-19）。しかし、間主観的把握においては、「思い込み」「勝手な解釈」と批判されないように、観察主体が「本当にこう掴んでいいのか」と厳しく吟味する態度を持ち合わせ、それを記述しておくことが重要である（鯨岡，2005，pp.103-104）。

#### (2) 間動感性

本論では、動感を「私の身体性の中に息づいている動いている感じ」（金子，2005a，p.24）をとらえ、間動感性を、動感を他人と共有できること（金子，2005a，p.51）、または、伝え手と受け手の動感が交信できる世界が共有されること（金子，2005b，p.105）をとらえる。

#### (3) 志向

意識は必ず何ものかについての意識であるという特性を持つ（竹田，1989）。本論では、志向を、意識が一定の対象に向かうこと、考えや気持ちがある方向を目指すことととらえる。

#### 4. 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方

##### (1) 戦術的思考力と技術力のゲシュタルトクライスの関係

ヴァイツゼッカーはその著『ゲシュタルトクライス』（1975, p.31）の中で、「生命あるものの運動」について考察し、「知覚するということと運動するということは、運動が何かを知覚の中に現出させ、知覚の中には運動も現出する、という仕方からみ合っている」ことを示している。また、知覚と運動は、「知覚しながらそれを可能ならしめている運動を知覚することはできず、運動しながらその条件になっている知覚をなすことはできない」という相互隠蔽の関係にあることを示している（ヴァイツゼッカー, 1975, p.305）。さらに、このような相互隠蔽性が理解されず、古典的物理学の自然科学の諸原理から区別されていなかった間は、生物学における方法的思考の展開が極度に妨害されていたと述べている。

木村（1988, pp.46-47）は、このゲシュタルトクライス理論において重要な点は、知覚と運動を一元論的にとらえ、これを生き物が環境世界と絶えず出会い続けているという単一の現実の両面に他ならないものとして理解しようということにあると述べている。また、われわれの生命的現実に関与した世界との関わりは、「知覚的・運動的であり、行為的・直感的」であり、どちらが原因でも結果でもない（木村, 1988, pp.46-47）こと、運動と知覚の相互限定からなるゲシュタルトクライス的な関係は、「構成する作用」と「構成された対象」という意味に還元することはできない（木村, 1988, p.53）ことを指摘している。

近年の身体スキルに関する研究では、身体知は内的・主観的解釈の表現であり、科学的正当性を武器にした状況の外的・客観的解釈では理解できない（諏訪, 2004）という主張が現れるようになってきた。人間が行為するための意味や価値は、脳といった中枢によって推論された結果から導かれるものではなく、環境から直接知覚される（加藤, 2009, p.143）と考えられるようになってきたのである。その結果、環境との接触における人間の知覚システムに注目した生態学的アプローチが広く用いられるようになってきた。そこでは、人間は「知覚するために行為を行い、行為するためにまた知覚する」（Gibson, 1966）のであり、行為とは、情報を入力する側面である知覚と連携した出力としての意味を持つととらえられている。このような行為と知覚の関係は特に「知覚-行為循環」（知覚と行為のカップリング）と呼ばれている。

湯浅（1990）は、「自己（意識）が世界に見出されるさまざまな存在者に対して行為的に

かかわる関係の構造について考察している。そこでは、「心の動きと身体のごきの間には寸分の隙もなく」、例えば優れた技能を持つ体操選手が会心の技を無心で演じている時は、知覚によって受動した情報にもとづいて、外界へ能動的に行為するのではなく、むしろその逆で、「直感があらかじめ行為の目標を潜在的に先取りしており、身体的行為はただそこに見えてきた軌道を、直感にみちびかれてたどってゆくだけに過ぎない」と述べている。

金子（2005a, pp.257-258）は、戦術力は＜そう動ける＞という身体知に裏打ちされていなければ、それは絵に描いた餅であり、＜そう動ける＞という動感身体知は、自我中心化作用と情況投射化作用との差異化現象を持つ運動として現れてくると述べ、「こう動こうとする時には、その情況を読んでそれに適応した動きが同時に発生するのでなければならず、その情況に合わせて動こうとする時には、そう動ける動感運動が同時に発生するのでなければほんとうの競技力に構造化されているとは言えない」（金子、2005a, p.259）と述べている。

これらの知覚と運動に関する現象学的考察は、個人戦術力における戦術的思考力と技術力は個々に独立して機能するのでなく、両者の関係は知覚した内容が運動に影響を与えるというような情報处理的因果関係ではなく、この2つは同時に発生し、同時に消えていく関係にあり、一方を志向すると他方が隠れるコインの表裏のような関係にあることを示している。選手に要求される個人戦術に関する実践知とは、ゲーム状況の解決において、知覚・認知的要素と技術的要素が個人内で統合して形成された知であり、きわめて個人的、状況的、対峙する場に限定的な知であると考えられる。選手の戦術的思考力が技術力を導くと同時に、その時に発揮できる選手の技術力が戦術的思考力を限定するのである。

このように考えると、情報处理的アプローチによって説明できなかった個人戦術力における戦術的思考力を理解することができる。例えば、バスケットボールのゲームにおいては、スリーポイントシュートに習熟した選手がスリーポイントシュートを選択・実行するゲーム状況であっても、習熟が低い選手にとってはパスやペネトレイトといったスリーポイントシュート以外のプレーを選択・実行することが正しい状況判断となりうること、客観的に見て同じようなゲーム状況であっても、それを解決する「正解」は選手の技術力によって異なることが理解できる。

## （2）個人戦術における＜コツ＞身体知と＜カン＞身体知

金子（2005a, p.258）は、競技力は、技術力と戦術力に分節化された意味構造をもちな

がらも、動感身体知として私に身体化されていなければならないと指摘し、技術力と戦術力を要素主義的に理解して、それぞれを絶縁的に別々にトレーニングし、あとで機械的に加算すれば、総合的な競技力を獲得できるという考え方を、因果的機械論に基づいたロボット工学的な運動構築の方法論であると批判している。また、金子（2002, p.229 ; 2005b, p.25）は、場の状況を先読みし、動きかたを選び、決断して実行に移せる身体知を<カン>身体知、対私的な身体それ自体に居合わせている身体知を<コツ>身体知ととらえている。さらに、神業のようなボールさばきのできる選手が、状況の意味を読めず、カンを働かせることができなかつたら、そのコツとしての身体知はまったくの宝の持ち腐れ（金子, 2005a, p.327）であり、適正な先読み作用を機能させても、その<カン>身体知が自我身体の動きかたを保証する<コツ>身体知に支えられていなければ、野次馬の状況判断である（金子, 2005b, pp.29-30）と述べている。

これらのことは、実践知としての個人戦術は、身体化された戦術的思考力としての<カン>身体知と身体化された技術力としての<コツ>身体知の統一的な行為であり、<カン>身体知と<コツ>身体知はゲシュタルトクライス的關係を形成していると理解できる。

### （3）チーム・グループ戦術と個人戦術との関係

チーム戦術とは、チームの戦術的課題を解決するために、相手の行動やゲーム状況に応じて組織化されたチームの具体的・実践的な行為またはその理論ととらえられる（Stieler et al, 1988, S.94-108）。また、グループ戦術とは、ゲーム状況を合目的に解決するために、数人の選手で形成されるグループによって組織化された具体的・実践的な行為またはその理論ととらえられる（Stieler et al, 1988, S.94-108）。Döbler（1989, S.190-191）は、個人戦術とはグループおよびチーム戦術の基礎単位であるとしている。これらのことは、チーム戦術およびグループ戦術は、個々の選手の行為を規定する上位の約束事であり、それぞれの選手が発揮する個人戦術力を方向づけることを示している。つまり、チーム戦術およびグループ戦術は、複雑で多様なゲーム状況においても、選手の役割を明確にしたり、味方に有利で相手に不利な状況を計画的、意図的に作り出すのに貢献するのである。

例えば、ハンドボールの攻撃において、残り1分で2点リードしていたり、退場者が出ているゲーム場面では、得点することよりも長い時間ボールを持っている方がゲームに勝つために有利なことが多い。しかし、そのような状況で、ボールをキープするというチーム共通の構想と具体的なチーム戦術を持っていなければ、ゴールをねらう選手とボールを

キープする選手が混在してしまう。これでは、いくら優秀な選手がそろっていても、この状況をうまく解決することはできない。

チーム戦術は、攻撃と防御の2つの局面において、自分たちの長所を効果的に発揮し、短所を広く補償するように立案・計画される。そこでは、チームを構成する選手の体力、技術・戦術的な特徴などが考慮される。例えば、ハンドボールにおいて、フットワークに優れ、プレーの先読みができる選手がそろったチームでは、機動力を活かした積極的な防御を行うという構想を持ち、3-2-1などの防御隊形でプレー局面を有効に解決するためのチーム戦術を立案・計画することになる。つまり、それぞれの選手の個人戦術力は、チーム戦術やグループ戦術の立案・計画に影響を及ぼすのである。

これらのことは、個人戦術力は、その上位の課題となるチーム戦術およびグループ戦術に方向づけられると同時に、チーム戦術およびグループ戦術の広がり制限することを示している。球技では、優勝をめざしたトーナメント戦またはリーグ戦におけるゲーム課題、勝利をめざしたゲームにおけるゲーム状況の課題、合目的な解決をめざしたゲーム状況における運動課題というように、課題の重層性が認められる（會田，1992）ことを考慮すれば、個人戦術力は、「戦略－チーム・グループ戦術－個人戦術」という階層概念（佐藤，1990）の中で位置づけられてはじめて意味を持つと考えられる。

## 5. まとめ

本章では、行為主体の立場から個人戦術をとらえ、個人戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討するために、まず、個人戦術とそれに関連する用語の概念を規定した。次に、実践知と身体知に関する概念を規定し、スポーツにおける運動実践知と創発身体知の関係、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知について論じた。続いて、個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念について規定した。最後に、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討した。その結果、以下の4点が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知は、ゲーム状況を合目的的に解決するために、個々の選手が行う具体的・実践的な行為であり、その達成力は戦術的思考力と技術力に規定される。
- 2) スポーツにおける運動実践知は、身体的訓練において初めて習得され、その個人に身

体化されていること，スポーツにおける創発身体知は，実践の場で発揮される行為とともにある知と解釈できることから，スポーツにおける運動実践知と創発身体知は同義であるにとらえられる．

- 3) 個人戦術に関する実践知は，戦術的思考力が身体化された＜カン＞身体知と技術力が身体化された＜コツ＞身体知の統一的な行為であり，＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知はゲシュタルトクライスの関係を形成している．
- 4) 球技における個人戦術力は，チームおよびグループ戦術に規定されると同時に，それらの計画に影響を及ぼす．それゆえ，個人戦術は，戦略－チーム・グループ戦術－個人戦術の階層概念の中で位置づけられてはじめて意味を持つ．

### 第3章 個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発とその有効性の検証

経験を通して獲得し身体に記憶された身体的熟練，すなわち実践知を，言語によって提示するには限界がある．なぜならば，実践知は，非言語的に，公共性をもたずに存在しており（村上，1981，p.13），「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」（ポラニー，1980，p.15），「言葉を用いたとしても，我々には語ることをできないなにものかがあとにのこされてしまう」（ポラニー，1980，p.17）からである．しかし，たとえ限界を持っていたとしても，実践知を，言語などを用いて提示することによって，コーチング場面において，実践知の伝達・伝承の可能性は大きく高まる．

本章では，第一に，個人戦術に関する実践知の構造について検討するためにはどのように質的研究を適用したらよいのか検討する．第二に，卓越した選手の個人戦術に関する実践知を提示するための具体的方法を開発する．第三に，開発した方法を用いた調査事例を示す．第四に，開発した方法の有効性について検討する．

#### 1. 個人戦術に関する実践知への質的研究によるアプローチ

##### (1) 実践知の特性と自然科学的アプローチの限界

第1章で詳解したように，個人戦術に関する先行研究では，自然科学的方法を用いて，個人戦術を規定する2つの要素，すなわち戦術的思考力と技術力のそれぞれが個別に研究対象としてとりあげられ，測定および検証可能な現象だけがとりあげられ，このことを通して個人戦術の戦術的思考力と技術力に論理的整合性が与えられてきた．

しかし，選手の持つ個人戦術に関する実践知は，地域的，文化的，歴史的な特殊性を持ち（中村，1992，pp.129-130），個人的，経験的な知，柔軟で不定形な知（ベナー，2004，p.178）である．また，コーチングの実践現場において直面する問題の多くは，個別的で，複合的で，再現性に乏しい（村木，1991）．したがって，普遍性，論理性，客観性という3つの原理を武器とした自然科学の方法（中村，1992，pp.8-10）は，経験がものをいうこの領域を正当に扱えない（中村，1992，pp.132-133）．さらに，現場の問題には，必ず個別の歴史的，文化的，生活的な脈絡がからみついているため，実験的あるいは調査的にニュー



トラルな場を設定できないこと（浜田，2010），現場は複雑な相互関係が網の目のように入り組んでいる場であるため，細分化して数量化すると，生の実相の持つ豊かなアクチュアリティーを「厳密性」と引きかえに断片化してしまうこと（鯨岡，2005，p.21），実践の世界は理論モデルで把握されるよりも常に複雑であること（ベナー，2004，p.163），これらのことは個人戦術に関する実践知を研究する方法として自然科学的な方法がなじまないことを示している．

したがって，個人戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討し直すには，個人戦術を客観化して対象としてとらえるのではなく，「体験者の内的視点」「渦中の視点」「行為者の視点」からとらえ直し，動感身体知に支えられている個人戦術力を単なる机上の構想としての戦術と区別する必要がある．

## （2）質的研究の有効性

実践知のような，量的な指標が存在しないものを対象とした研究に，質的研究がある（無藤，2004）．質的研究の目的は，「生きた人間がどのように身体を使い，ものを作り出し，また自らのそして他の人々の身体について考え，感じ，どのような人間関係を築いているかについて，明らかにすること」（波平・道信，2005）である．その利点は，調査された人々の考えや体験，またその行動の背後にある論理を全体的に「理解」し，データに根ざしたかたちで新しい概念や理論を「発見」できるという点にあり，質的分析で生成された概念や理論は日常生活や現場などの「現実」に密着している」という特徴を持っている（小田，1999）．質的研究はさまざまな学問領域において行われている（小田，1999）．なかでも，医学，看護学，教育学においては，実践に従事する医師，看護師，教師の語りや対話を手がかりに，実践的能力の改善に有用な知見がもたらされている（斎藤・岸本，2003；ベナー，2004；秋田ほか，2005）．それゆえ，体育・スポーツ科学の領域においても，有効な研究方法として採用されるようになってきている（會田，2008；青山ほか，2009；村山ほか，2009）．

経験的学習において臨床の知は語りを通して理解すると身につきやすい（ベナーほか，2005）．また，事象への密着性，情景の表象化可能性，意味構造への接近性という基準から見ると，事例的な研究は価値が高い（鯨岡，2005，p.40）．さらに，個別の事例研究から帰納的な推論を経て導き出される運動理論の果たす役割は極めて大きい（村木，1991）．これらの指摘は，個人戦術に関する実践知の構造について明らかにするには，まず語りとして個別事例を提示し，次にその個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら，事例に共通

の構図，他の現場にも通じる普遍の構図を明示的に描き出すこと（浜田，2010），すなわち事例を全体的にとらえた時の姿や形の共通性を提示することが重要であることを示している．

### （3）質的研究の科学性

質的研究の科学性を保つための考え方は，量的研究とは異なる．その理由は，「ひと」を対象とする学問は，「もの」を対象とする学問とは異なって，対象と主体とのあいだのはっきりとした截断を前提とするわけにはいかないために，学問の主体はけっして対象から独立的に超越した普遍的な主体というポジションをとることはできない（小林，1994，p.6）からであり，そこでは，主体に応じていくつも真理があり，いくつもの異なった記述の体系がある（小林，1994，p.11）からである．

研究が妥当性や信頼性を持っていることは，リアリティを正確にとらえられる方法で，リアリティを正しく反映している結果が得られることを意味する（渡邊，2004）．質的研究における科学性の評価では，量的研究でも使われてきた妥当性と信頼性という基準を応用したり，質的研究に合うように変更したりする方法が用いられることが多い（フリック，2002，pp.272-273）ことから，本論においても，質的研究の科学性を保証する基準に，妥当性と信頼性を用いる．

妥当性は，「見ようとしているものを実際に見ているかどうか」という点に要約される．科学的研究では，データの妥当性，すなわちデータが研究の対象である現象を正確に代表し，把握しているかどうか重要な問題となる（Hycner，1985）．質的研究では，データの妥当性は，事例に関する多面的な情報や状況の詳細な提示によって，主張の妥当性は，データから主張を練り上げる過程を具体的に説明することで高められる（杉村，2004）．具体的には，研究結果が実証的なデータに基づいているかどうか，研究対象の特性に照らして，方法が適切に選ばれたかどうかの2点から評価できる（フリック，2002，p.9）．

信頼性に関しては，何度測定や分析を繰り返しても同じ結果になるかどうかという意味の信頼性は，質的研究では採用されない（フリック，2002，p.275）．一貫性と安定性を持っていることが信頼性の基準になるのではなく，研究方法の確実性や正当性が研究の信頼性と位置づけられる（渡邊，2004）．具体的には，どれが調査者の行ったことで，どこから研究者の解釈が始まるのかがチェックできるような形でデータの成立過程を明らかにしておくこと，インタビューデータの解釈の方法を明らかにしておくことの2点が，信頼性を

高めるために重要となる（フリック，2002，p.275）。

## 2. 個人戦術に関する実践知を提示するための具体的方法の開発

質的研究では、インタビュー、エスノメソドロジー、参与観察、フィールドワークなど、多様な方法が研究目的に応じて用いられており（フリック，2002），単一の研究方法が確立されているわけではない。それゆえ，個人戦術に関する実践知について検討する際には，まず質的研究の科学性が保持でき，行為者の視点から個人戦術に関する実践知を提示できる方法についてあらためて検討し直さなければならない。ここでは，先行研究を概観しながら，個人戦術に関する実践知を提示する具体的方法について検討する。

### （1）対象者の選択

本研究では，国際レベルで活躍し，現在は現役を引退している球技選手の中から，さまざまなゲーム状況を克服し，個人戦術力を国際レベルにまで高めていった過程の中で組織化された経験を持ち，行為の意味を語りによって提示できると本研究者が判断した元一流競技選手を対象者に選択する。

### （2）協力依頼および個人情報への配慮

いずれの対象者にも，本研究の趣旨を事前に電話および文書にて十分に説明し，調査への協力を依頼し，承諾を得る。また，インタビュー調査に先立ち，いずれの質問に対しても回答を拒否できることを伝え，調査内容の音声およびVTR記録，研究成果の実名での公開に関して了解を得る。調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に，ラポール（桜井・小林，2005，pp.83-84）の形成，すなわち調査者と対象者とが相互を信頼し合い，安心して自由に対話ができる関係の形成に努める。

### （3）内省による実践知へのアプローチ

近年，コーチングの実践現場でも，実践知をとりあげた研究が行われるようになってきている。そこでは，特に，指導者のコーチング活動そのものを対象にした研究が多い。これらの研究は，多くの場合，自然科学的な研究方法論に限定しない形で行われている。例

えば、指導者が自らのコーチング活動を振り返って内省し、記述・報告している研究（吉田，1993；箕輪，2007；濱田，2009；井上・杉山，2009），指導者および選手の内省と数量化したゲーム分析結果を総合して考察している研究（吉田，1996；水上ほか，1999；三浦ほか，2009），チームの活動に直接参加していない第三者の視点からコーチング活動を考察している研究（藤林，1997；吉井，2010）などを挙げることができる。

この種の研究に関連して、西條（2007，p.10）は、体験者の「内的視点」からの記述は、読者がそのやり取りを追体験する形で少しずつ理解を深めていけると述べている。また、浜田（2007）は、「＜生きるかたち＞を渦中の視点から記述し、たぶんに錯覚をかかえた日常の見かけをそこからとらえ直すことができるのなら、それもまた十分に意味のある学の営み」となると述べている。さらに Nicholls et al.（2005）は、意味を把握するには、行為者の世界の内部に入り、行為者の立場から世界を眺める必要があることを指摘している。これらのことは、実践者の内省を手がかりに実践知を明らかにするという研究方法の有効性を支持するものである。

#### （4）内省の手がかりとしての「動きのコツ」

選手が持っている主観的な情報は、コーチングの実践現場では動きのコツと呼ばれている（阿江，1999）。動きのコツは、「運動ができるようになる勘どころを表現したもの」（阿江，1999）であり、「運動感覚に支えられた身体の知恵」（金子，2002，pp.262-263）である。しかし、球技においては、動きのコツの対象は、個々の選手の身体の動きだけでなく、状況判断も含めた個人の戦術行為となる。この場合には、場の状況を先読みできる能力としての＜カン＞身体知と対私的な身体知としての＜コツ＞身体知を明確に区別することはできない（金子，2002，pp.229-230）。したがって、実践現場で指導者や選手が用いている動きのコツとは、戦術的思考力が身体化された＜カン＞身体知と技術力が身体化された＜コツ＞身体知が統一された身体知であるにとらえることができる。本論では、球技における個人戦術に関する実践知に、この意味の動きのコツという言葉を手がかりにアプローチする。

#### （5）語りによる内省の外化

内省を用いた先行研究（吉田，1993；吉田，1996；藤林，1997；水上ほか，1999；箕輪，2007；三浦ほか，2009；濱田，2009；井上・杉山，2009；吉井，2010）では、実践したコ

ーチング活動を分析する前段階において、それを外化（山崎・三輪，2001）する手続き，すなわち自分の思考を可視化でき，客観的に思考を見つめ直せるように文章や図表に表す手続きが行われていない．西村（2001，p.209）は，経験しているが，意識や自覚ができずにいる前意識的な層の営みは，語りを手がかりに分け入ることができることを指摘している．野口（2005）は，語ることによって，さまざまな出来事や経験や意味が整理され配列し直されて，ひとつのまとまりを持つようになると述べている．長岡（2007）は，スポーツ場面で生じる現象を，本人が認識できる水準以外の異なる水準でとらえることは，スポーツを対象として事例を用いることの独自性になりうることを指摘している．これらの指摘は，コーチングの実践現場における実践知を分析する前段階の手続きとして，それを語りによって外化しておくことによって，実践の説明と解釈の精度を高められると同時に，他の研究者や実践者の反証可能性を担保し，開かれた省察への手がかりになることを示唆していると考えられる．したがって，本論では，実践知の内省を語りによって外化する．

## （6）内省を活性化させる手段としての事前アンケート調査

語りの内容は，対象者へのインタビュー調査によって収集する．限られたインタビュー調査の時間内で，球技に特有の動きのコツを一流選手から聞き出すためには，インタビュー調査に先立ち，対象者の内省を活性化させておくことが重要である．本研究では，インタビュー調査の1-2週間前に，調査内容に対して自由記述形式で回答を求めるアンケート調査票（阿江，2002）を対象者に郵送し，現役時代を振りかえって記述して，返信してもらう．インタビュー調査時には，それを補助資料として用いる．これらの手続きを通して，インタビュー調査時の対象者の負担は少なくなり，動きのコツの同定は容易になると考えられる．

資料1に，実際に使用したアンケート調査票を示す．その内容は，以下の7項目である．

### （1）属性

氏名，年齢，過去の競技成績

### （2）競技成績の変化

急激な伸びを示した時期，スランプや低迷期，およびそれらの原因

### （3）得意な技，優れていると言われる技や動き

### （4）得意な技や動きのコツまたはイメージ・感じ

ここを押さえるとうまくできるというポイント，または動き方の意識

資料 1-1 アンケート調査票

スポーツにおけるコツ・動き方の意識に関する調査

科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号 18500500

ジュニア期における球技スポーツ選手の効果的指導法に関する基礎的研究

研究代表者 會田 宏（武庫川女子大学）

スポーツを指導する場合には、運動に関する客観的な情報だけでなく、「どのようにするとできるのか」、「どのような感じで動くよいか」といった主観的な情報を伝えることが効果的です。このことは、高度な能力を有する成人競技者より、むしろジュニア期の競技者にとって重要です。しかし、選手や指導者のもつ主観的な情報（コツ、動き方の意識、イメージ）に関する調査研究は、必要性が指摘されているにもかかわらず、ほとんどありません。そこで、高い競技力・指導力を持っている方々に、これまでに獲得されたコツや動き方の意識についてお聞きし、今後のジュニア期の指導に役立てようというのが本調査の趣旨です。

質問項目の中には、過去にさかのぼって、イメージを思い出していただくものが含まれています。記憶違いを心配されたり、面倒臭く思われるかもしれませんが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。なお、生育史などに関わる質問で、答えたくないと思われた質問にはお答えいただかなくても結構です。その場合には質問番号に×印をつけてください。

回答年月日： 年 月 日

氏名（ ） 性別（男・女） 年齢（ ）歳

連絡先：

電話： FAX： e-mail：

あなたのベスト3の競技成績をあげてください。

	種目名	大会名	年	成績や記録	年齢
ベスト1					
ベスト2					
ベスト3					

資料 1-2 アンケート調査票

1. 競技生活全般について

- (1) 身長伸びが最も大きかったのは何歳くらいでしたか ( ) 歳頃  
 (2) 身長伸びが止まったのは何歳くらいでしたか ( ) 歳頃  
 (3) 最もきつい練習をしたのは何歳くらいでしたか ( ) 歳頃  
 どんな練習でしたか：

- (4) スポーツが最も楽しかったのは何歳くらいでしたか ( ) 歳頃  
 楽しかった理由は：

- (5) スポーツをするのが最も苦しかったのは何歳くらいでしたか ( ) 歳頃  
 苦しかった理由は：

2. あなたの取り組んできたスポーツ種目を、年齢区分ごとに記入してください。なお、大分類には、陸上競技、バレーボールのようにスポーツ種目を、小分類には、大分類の専門種目、ポジション、階級などを記入してください。特にスポーツ活動を行っていなかった時期については、×印を記入してください。

	～12 歳	12～15 歳	15～18 歳	18～22 歳	23 歳以上
スポーツ種目 (1)					
大分類					
小分類					
スポーツ種目 (2)					
大分類					
小分類					

3. あなたは主に、どこでスポーツ活動を行っていましたか。主なスポーツ活動の場を下記から選んで、その番号を年齢区分ごとに記入してください。

	～12 歳	12～15 歳	15～18 歳	18～22 歳	23 歳以上
活動の場					

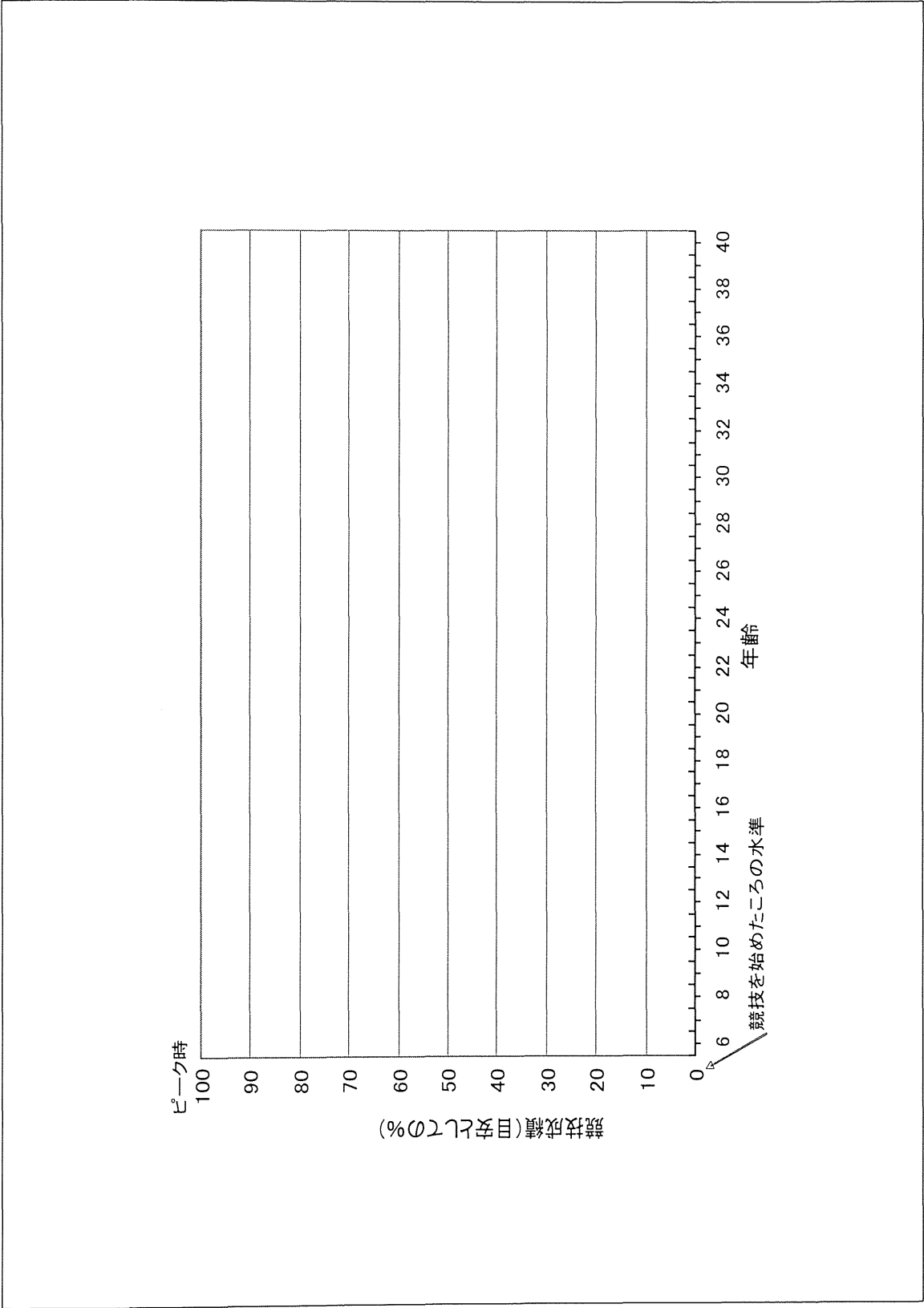
スポーツ活動の場

1. 家庭    2. 地域のスポーツ少年団    3. 学校（大学を含む）の運動部  
 4. 出身校の運動部    5. 公共組織（体育館、公民館など）のスポーツクラブ  
 6. 民間のスポーツクラブ    7. 勤務先の運動部・スポーツクラブ  
 8. その他の運動部・スポーツクラブ    9. その他





資料 1-4 アンケート調査票



資料 1-5 アンケート調査票

6. 質問5でマークした、急激な伸びを示した時期、伸びは急激ではないが競技の成功につながるような変化があった時期において、上達の手がかりになったと思われるものがあれば、下記から選んで、その番号を図に書き入れてください（複数回答可）。

手がかり

1. 指導者の言葉    2. 自分の感覚    3. 自分の写真、ビデオ    4. 一流選手の動き・プレー  
5. チームメイトや友人の動き・プレー    6. 書籍や雑誌    7. 動物の動き    8. その他
7. 現役時代を振りかえり、競技生活を支えた技や動き、最も印象に残っている技や動き、または最も得意であった技や動きを1つ思い浮かべてください。その技や動きがどのようなものだったか、できるだけ詳しく書いてください。

8. その技や動きは、どのような感じやイメージで行っていましたか。たとえば、比喩、擬音語のような表現でも結構です。（例 ボールが当たる瞬間に手をぱっと握る感じ、相手の下に潜るような感じ、スッ・スーッ・サッというイメージ、など）

9. その技や動きについて、どのようなコツ（ここを押さえるとうまくできるというツボ、意識するポイントや内容など）を持っていましたか。

資料 1-6 アンケート調査票

10. そのコツはいつ頃（何年頃あるいは何歳頃）つかまりましたか。

11. そのコツをつかむキッカケはどのようなものでしたか。なるべく具体的に書いてください。  
（例 〇〇〇選手に注目して試合を見ていたとき、コーチの〇〇〇という言葉など）

12. 上記の質問7～11で答えていただいた技や動きは、どのような状況や場面で有効でしたか。  
（例 相手ディフェンスがボールの動きに集中していたとき、など）

13. そのコツをつかんだころ、競技的にはどんなこと（体力面、技術面、精神面など）に悩んでいましたか。差し支えない範囲で具体的に答えてください。

資料 1-7 アンケート調査票

14. そのコツをつかんだ時期の前後のことについてお聞きます。

(1) 技や動きの感じやイメージはどのように変わりましたか。

前：

後：

(2) 競技に対する意欲、考え方、取り組み方などはどのように変化しましたか。

前：

後：

15. 本調査は、ジュニア期における効果的な指導法を探るためのものです。あなたの経験からジュニア期に習得しておくべきであると思われる基本的な技や動きをいくつかあげてください。また、その基本的な技や動きをうまく行うためのコツはどのようなものとお考えでしょうか。ジュニア選手に教えるつもりで表現してください。

	基本的な動きや技	そのコツ
1		
2		
3		
4		
5		

16. ジュニア期において上記の技や動き以外に、身につけておくべきであると思われるものはどのようなものでしょうか。(例 学業、人間性、精神力など)

---

時間と労力をさいていただき、また、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

- (5) 動きのコツ獲得の時期ときっかけ
- (6) 動きのコツをつかむ前と後における技や動きの感じの変化
- (7) ジュニア期に習得しておくべきであると思われる基本的な動きや技

## (7) 対話による語りの共同産出

メルロ＝ポンティ（1974）は、研究方法としての対話について、「私の言葉も相手の言葉も討議の状態によって引き出されるのであって、それらの言葉はわれわれのどちらかが創始者であるというわけでもない共同作業」と記している。また、やまだ（2000, p.19）は、対話によって「語りが語りをよび、循環的に共同生成される」と述べている。さらに、西村（2001, p.209）は、対話では、持っているけれどもしまわれているもの、知っているけれども言葉にできないもの、経験しているけれども自ら想起できないものを引き出すことが可能になると述べている。これらのことは、個人の経験を対象とした研究においては、対象者が自らの経験を語り、調査者はそれを記述するという方法よりは、両者の対話を介することではるかに深く広範な体験が得られることを示しており、研究方法としての対話の有効性を支持している。

本研究では、インタビューという活動を通して調査者と対象者が共同的に語りを産み出す。そこでは、調査者は、語りを単に聞いてまとめるという受動的立場をとらずに、むしろ、対象者の持っている動きのコツをより具体的な言葉で表現できるように積極的に関わるという立場をとる（桜井・小林, 2005, p.185）。また、言葉で表現しにくい場合は、身体を使ってデモンストレーションしてもらう。

## (8) 聞き手の現場感覚および生成的視点

語り手と聞き手が対話的關係として、ともに物語の生成に関わる場合、語られる内容は聞き手の影響を受ける（やまだ, 2000, p.23）。特に、対象の詳しい記述が必要である質的研究のインタビューでは、聞き手の現場感覚および生成的視点が重要である（無藤, 2004）。実践知を聞き取る先行研究においては、聞き手が語り手と同様の経験をつんでいることが役立つと報告されている（桜井・小林, 2005, p.264；西村, 2001, p.218）。本研究における聞き手は、調査者本人であり、ハンドボールを専門とし、選手として全日本学生選手権大会4位（同大会優秀選手）、監督として全日本学生選手権準優勝の実績を持っている。対象者の語りを深く理解し、語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持って

いると考えられる。

なお、インタビューが聞き手と語り手の「相互行為的な解釈活動の過程」（桜井・小林，2005，p.185）であるために、聞き手が異なれば、また違った聞き方をすれば、語りには別の意味構造が生み出される（桜井・小林，2005，p.38）。質的研究では、「他の研究者がその調査研究を行ったとしても、同じような結果が得られる」（桜井・小林，2005，p.48）という意味での信頼性は問題にされない。むしろ、調査者の技法の違いを積極的に認めて、その違いや特質が明確な形で伝えられ理解されることが重要である（桜井・小林，2005，p.50）。本研究においては、他の質的研究方法と同様に、調査者と調査過程を記述することによって手続きの透明性を高め、研究の信頼性を保証する。

## （9）インタビュー調査の内容と方法

インタビューの内容は、現役時代に得意であった技や動きのコツ、動きのコツを獲得するまでのプロセス、動きのコツ獲得後の変化、動きのコツの伝達など（中込，2003）とし、アンケート調査票で回答を求めた内容にしたがう。

インタビューの方法は、半構造化面接を用いる。インタビューの標準的な流れについては、さまざまなスポーツ種目を専門とする複数の研究者間で検討し、インタビューガイド（マニュアル）（資料 2）を作成しておく（中込，2003）。また、面接状況を想定した意見交換を行い、インタビュー調査の習熟をはかっておく。

インタビューの場所は、対象者と調査者が 1 対 1 で対話できる静かな場所であり、主に、対象者の勤務先の応接室などとする。

インタビューの場では、調査者は、対象者の語りに敬意と好奇心を持って臨むこと、語りに対して先入観を持たずに共感する態度を持ち合わせることを心がける（徳田，2004）。

## （10）インタビュー調査の記録

すべての発言は MD レコーダを用いて録音し、デモンストレーションはビデオカメラを用いて撮影する。

## （11）語りの作成

まず、対象者ごとに、すべての発言内容を逐語録として文章におこす。次に、語りの意味内容を全体として十分理解できるまで逐語録を熟読する。続いて、語りの意味内容をく

## 資料 2-1 インタビューガイドの内容

### 「動きのコツ」面接マニュアル

面接実施年月日                      年              月              日

面接者

被面接者    (種目:    )

調査時点での仕事、競技との関わり状況:

面接に関わる全般的状況 (要した時間、面接での被面接者の雰囲気、他):

#### 1. 調査者側の「コツ」の理解 (定義)

「ここを押さえると、うまくできる、成功するというポイント、または意識やその内容、動きの意識」

#### 2. 面接調査の目的

「コツ」をつかむ (つかませる) 方略を明らかにする。そのために、面接では以下のような側面 (観点) についての具体的情報を得る。

- ・「コツ獲得」となった動きの具体例を収集する (被面接者固有の表現を大切にする)
- ・「コツ」を獲得するまでのプロセス  
(いつごろ、どのような状況で、そしてなぜ獲得に至ったのか等について)
- ・「コツ」の定着への工夫
- ・「コツ」の獲得による自身の競技ないしは競技生活への影響 (変化)
- ・「コツ」の伝達方法
- ・ジュニア期の指導について

#### 3. 事前の準備

1) 被面接者 (対象者) の抽出および調査用紙への回答内容の確認、理解

2) 面接調査のアポイントメントを交わす

調査目的、面接時間 (約 1 時間 +  $\alpha$ )、場所、テープ録音、謝礼 (定額: 1 万円)、双方の連絡方法等について先方と話し合う。(事前に協力いただいた調査用紙への「コツ」に関わる回答内容を引きあいに出し、面接を方向づけても良い)

調査用紙への回答を行っていない方の場合、以後の面接への方向づけを兼ねて、郵送し、回答、そして返送していただく。

#### 4. 面接手順および面接内容

1) 再度、調査目的を伝える。テープ録音ならびに資料の公表等について了承を得る (後日、面接者側が文章化したものに目を通していただく予定)

## 資料 2-2 インタビューガイドの内容

※以下、予想される面接の流れに沿って、問い掛け（面接内容）ないしは収集すべき情報の観点ごとに記す。「 」内は、面接者側からの問い掛けの例。余白はメモに利用する。

2) 被面接者が「コツ」をどのように定義しているのかを確かめる：「難しいとは思いますが、あなたご自身としては、“コツ”をどのように定義いたしますか」

3) 「コツ」の同定（具体例の収集）：「競技生活の中で“コツをつかまれたと感じられた”経験について教えていただけますか」

（被面接者が自身の競技ヒストリーの中から「コツ」を特定できない場合は、事前に行われた調査用紙への回答を手がかりにしたり、「課題やスランプの克服」「急激な変化」などから問い掛け、以後の面接内容への焦点付けをはかる。動きのコツ（あくまでも「動き・技術」に絞り、競技やレースはこび等に拡げたり、精神的な側面—例えば、モチベーション、価値観—などでないことに注意）を獲得していった（できなかった）状況に焦点づける。）

4) 「コツ」を獲得するまでのプロセス：「そのような（被面接者の説明した動きの表現を利用する）「コツ」をつかむまでのプロセスについて説明願います。例えば、それ以前にどのような課題をもっていたのか、どのような状況であったのか、そのために何か工夫したのか、他者からのアドバイスがあったのか、なぜできたのか、等についてお聞かせ下さい」。一度にこのように述べても完全には伝わらないと思うので、面接者側の観点としても留めておく。

5) 「コツ」の定着：「つかまれた“コツ”をご自身の中に定着させるために、どのような事を行ったか、あるいは意識されたか、その辺りのことについてお聞かせ下さい」

6) 「コツ」獲得後の変化：「“コツ”をつかまれた後の変化について聞きます。動きそのものの、あるいはその考え方・感じ、競技に対する取り組み、等について振り返っていただけますか」

7) 「コツ」の指導：「ご自分がつかまれた“コツ”を他の選手に指導するとしたらどのように伝え、教えますか」

8) ジュニア期の指導について：「ご自分の専門種目をジュニア期にある選手に指導する場合、どのようなところにポイントを置きますか」



ずさないように、文脈を尊重しながらまとめる。なお、語りの内容については、意味を取りやすくするために、対象者ごとに、適宜見出しをつけて示す。また、動きを伴うデモンストレーションに関してはイラストにする。

語りの妥当性および信頼性を保証するためにメンバー・チェック（フリック, 2002, p.285）を行う。すなわち、調査内容のまとめとイラストを対象者に郵送し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認する。これらの作業を終えたものを語りの内容として示す。資料3は、実際に行われたメンバーチェックの内容の一例である。

## （12）まとめ

これまでに検討してきた個人戦術に関する実践知を提示するための具体的方法は、図2のようにまとめられる。すなわち、まず、「動きのコツ」についての回答を求めるアンケート調査によって、対象者の持っている個人戦術に関する実践知を深く内省させておき、次に、現場感覚および生成的視点を持っている調査者が、インタビューという対話活動において、戦術的思考力が身体化された<カン>身体知と技術力が身体化された<コツ>身体知に関する語りを、対象者と共同的に産み出す。さらに、個人戦術に関する実践知が外化・対象化された語りを、その意味内容がくずれないようにまとめ、語りの内容に関してメンバー・チェックを行うというものである。この方法は、新聞や雑誌などのインタビュー記事とは異なり、学術的に価値のある言説が得られる方法であると考えられる。

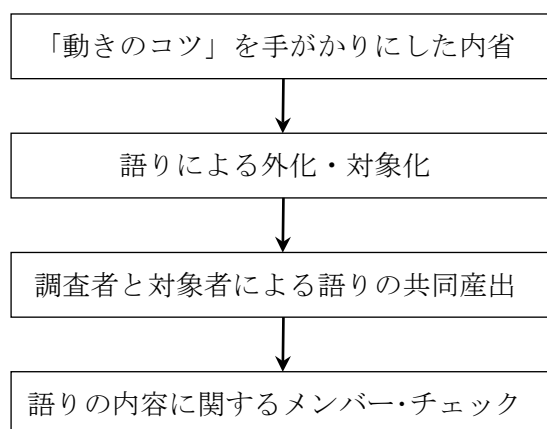


図2 個人戦術に関する実践知を提示するための方法

資料3 メンバーチェックの例

(なお今回の調査では、加筆や訂正が求められた事例はなかった)

會田 宏 先生

早速ですが、返信させていただきます。  
特別に修正、削除、加筆する箇所  
ありません。  
よろしくお願いいたします。

日本体育大学

松井 幸嗣

### 3. 開発した方法を用いて個人戦術に関する実践知を提示した調査事例

ここでは、個人戦術に関する実践知を提示するために開発した方法を用いた調査事例を示す。対象者は、国際レベルで活躍し、現在は現役を引退している元ハンドボール競技選手5名である。

#### (1) 事例1：松井幸嗣氏

##### ①競技種目

ハンドボール、左バックプレーヤー、左サイドプレーヤー

##### ②主な戦績

1982年アジア大会準優勝

1984年ロサンゼルスオリンピック出場

##### ③競技歴

松井氏は中学1年からハンドボールを始める。高校時代は全国大会出場の実績はなかったが、日本体育大学に入学後、切れ味鋭いシュートやスピードプレーを武器に頭角を現し、大学3年次に全日本代表に選ばれる。全日本代表の合宿において、1:1を突破するフェイントのステップワークを習得する。日本体育大学卒業後、高等学校の教員を務めながら、全日本代表としてアジア大会準優勝、ロサンゼルス五輪10位の成績を収める。

##### ④語りの内容

###### a. 競技生活を支えたプレー

攻撃側から見て左側に抜く1:1の「決めつけフェイント」

###### b. 獲得した動きのコツ

このプレーでは、まず、ディフェンスの正面に向かうか、若干、右側に入るように進んでいきます。右からボールをもらったとしても、左からボールをもらったとしても、ボールを空中でもらって、左脚で着地します。次に、右脚を右に踏み出して相手をゆさぶり、左脚を左に出して抜いていきます。そこで、ドリブルをしてゴールに向かい、右脚を出し、そして左脚を出して行ってジャンプし、シュートします。

ここで大事なことは、ディフェンスと接触しないようにすることです。感覚的には、ディフェンスを円の中心に置いて、その円周上を走るという感じです。右脚で方向変換して、円周上を逃げていくイメージです（図3）。普通は、方向変換の後、直線的に入っていくので、ディフェンスにホールディングで止められることが多いんです。

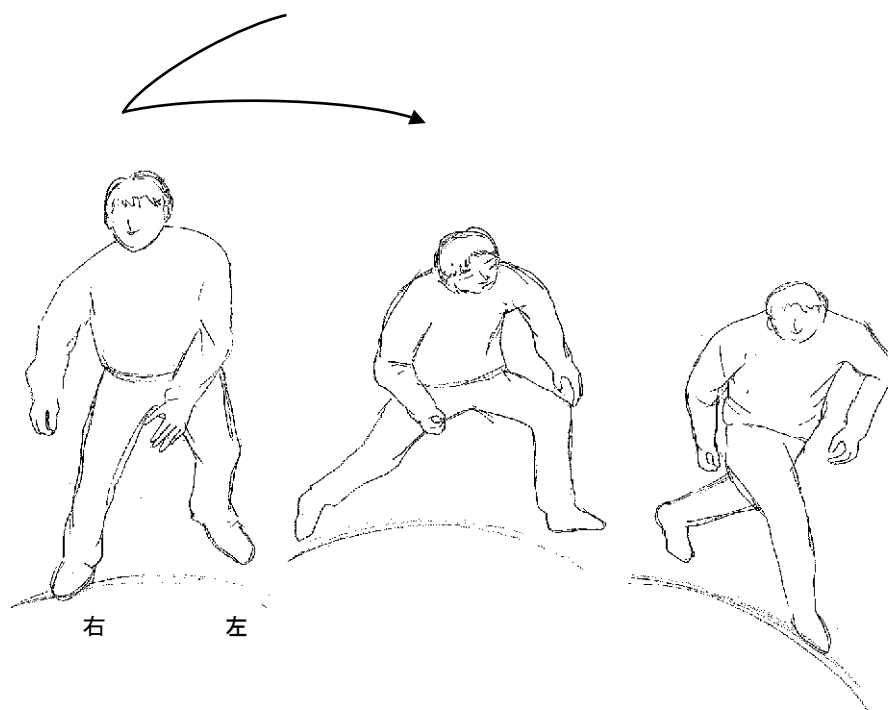


図3 ディフェンスに触れないステップワーク

右脚を踏み出す時のポイントは、右脚に思いきり体重をかけて、ディフェンスを右側に寄せることです。ボールをもらう前から右側に流れていって切り返すのではなく、ボールをもらって右脚の踏み出しの変化だけで相手を抜く感じです。ディフェンスの前に入っていくスピードは全然いりません。逆にスピードを持って入っていくと、ディフェンスは警戒して、構えてしまいます。走りの緩急が必要です。ゆっくりと入っていったら、右脚の1歩だけで、ディフェンスをゆするような感じです。その1歩は、真横に向かう感じで、低くいくと、次の左脚が出しやすいです。

右脚で止まった後、左脚は円周上じゃなくて、その外に踏み出します（図4）。そうして、重心を脚の下からはずして、前に持っていくんです。重心を前に持っていくと、上体が前に倒れて、その倒れた勢いで、次の右脚が円周上に出て来るんですね。脚が後からついて

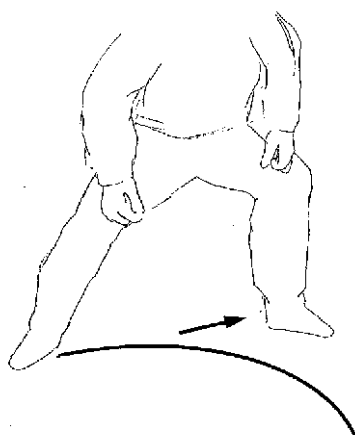


図4 方向変換の後の左脚の出し方

来るような感じで、円周上を回っていくイメージです。感覚的に言うと、横にずれて縦にいく感じです。

肩の使い方とか、腰の使い方とかを、特別に考えたことはないです。動きのなかで注意していたのは、右脚でフェイントをかけた後に、速く脚を動かすことです。

#### c. 競技場面でのプレーの実際

バックコートでプレーする時に、下がった状態のディフェンスもありましたし、前につめて来るディフェンスもありました。

ディフェンスが下がって守っている場合は、ディフェンスの前でジャンプシュートをねらいます。でも、ジャンプしても、そこでは撃たないんです。ジャンプシュートしようとする、(ディフェンスは)1歩前に出て来たり、手を上げたりしますから、そこで撃たないで、着地する前にドリブルして、左側に切り返します(図5)。着地してからの足の運び方では、右脚ジャンプでのシュートになります。方向変換する時と同じようにステップすると、1歩多くなって、オーバーステップになってしまいます。

前につめて来るディフェンスに対しては、少し下がっておいて、ディフェンスとの距離を測っておきます。フェイントをかける時の間合いは、2メートルくらいでしょうか、ディフェンスが手を伸ばしても、触られないくらいです。ディフェンスの身長が高ければちょっと遠めで、ディフェンスが小さければちょっと近めです。

フェイントをかけにいった、相手ディフェンスにパッと対応されたこともありました。その時には、無理に突っ込まないです。このフェイントは、はじめから決めつけているプレーなので、ダメだったらすぐパスして次のプレーに入ります。でも、反応されると、次

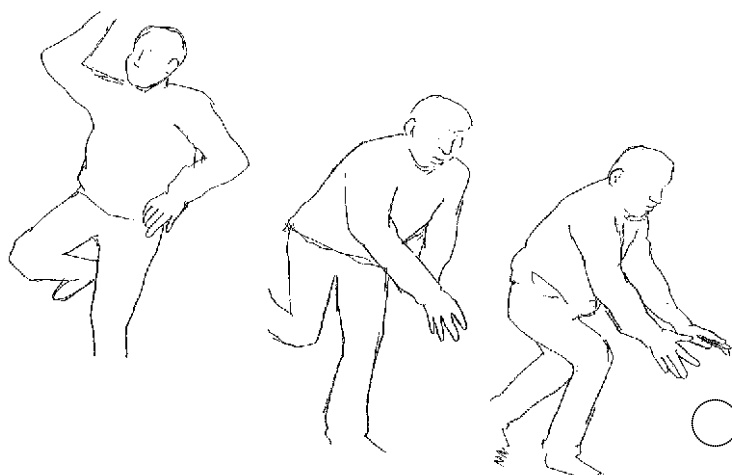


図5 ジャンプシュートフェイント

がまた面白くなるんですよ。次にフェイントに入っていったら、ディフェンスはどうするのかあ考えるんです。ディフェンスの予測をはずして、次はこっちにいくふりをして反対にいかうとか、相手の裏をつくような駆け引きが面白かったです。それは、プレーしている最中に決めるというよりも、プレーする前に「次はこうやるぞ」というように、あらかじめ決めておく感じです。

ロサンゼルスオリンピックの時には、全日本でのポジションは左サイドでしたが、このフェイントは、左サイドでも使えました。ただ、いきなりやるのではなくて、何回かサイドでパスをもらって、ラテラルパスで左バックプレーヤーに返す時に、ディフェンスを視野に入れておくんです。ディフェンスがちょっと内側に入っていれば、パスするふりをしておいて、止まって、すぐ左脚を出して、次の右脚でジャンプします。ドリブルしないでゴールエリアに飛び込んで、サイドシュートを撃ちます。

でも、そのステップで中に飛び込むのはきついですね。サイドラインとエンドラインの交点から7メートルラインに向かって飛び込むサイドシュートとは違って、余裕はありません。ゴールキーパーに向かってか、それよりちょっと内側に飛び込んで、着地ぎりぎりの落ち際にシュートを撃つんです。落ちながらバーンと、遠目（ファーポスト）の上を撃っていました。その体勢から上に撃てたのは、背筋力があつたからだと思います。現役の時は300kgありましたから。シュートを撃つところは、遠目の上と決めていました。体が落ちていきますから、キーパーも下に下がるが多かったんです。下に撃つとか、股下に撃つとかの駆け引きはないです。それはできなかったです。

#### d. 動きのコツをつかむきっかけ

大学3年ぐらいから、全日本の合宿に呼ばれるようになったんです。当時の監督は竹野さん、コーチは東先生でした。東先生は、フェイントのかけ方というか、フェイントをかけた後の脚のさばき方について細かく教えてくれました。それは、「ディフェンスの右側に入って行って、右脚でフェイントをかけたら、左脚を出して抜きなさい」というような感じでした。全体の練習が終わった後に、個人的に教わりました。それまでのプレーは、走り込んでロングシュートがほとんどで、ディフェンスの状態を見ながらフェイントをかけるプレーはありませんでした。

教わってみると、「あっ、いい感じだな」と思いました。結構すぐにできて、全日本の練習でも、思いきって右にフェイントかけて、バッと左にディフェンスを抜くことができました。このプレーを身につけたことで、22歳くらいまで急成長しました。ただ、私は高校時代から左足首のねんざが慢性化していて、ひどくなると、ポコッとはずれちゃうことがあったんです。また、大学2年生の時に左膝の内側靱帯も伸ばしていて、左脚に重心かけて右側に抜く、反対のプレーはできませんでした。

#### e. 動きのコツを定着させるための練習

体育館に引いてあるバスケットボールコートサークルを使って練習していました。サークルの円周上を走りながら、笛がピッと鳴ったら止まって、反対の脚を円周の外側に出して、重心を前にかけてながら円周上を走っていくという練習です。止まった後、逆の脚を円周の外に出す練習でした。ディフェンスが円の真ん中で守っていると想定してやっていました。意識のポイントとしては、右脚で強くフェイントをかけて、その反動で左側に跳ぶような感じです。全日本の合宿が終わって大学に帰って来ても、この練習は、チームの練習が終わった後に、個人的に毎日繰り返していました。試合前も個人で、下級生をディフェンスに置いてやっていました。動きを反復することで覚えていった感じです。

#### f. 個人戦術の基本的な考え方

私の場合には「決めつけのプレー」が多いんです。右側にフェイントかけてから左に抜こうとした時に、ディフェンスがフェイントに対応して左に寄って来たから逆にいくというプレーはできませんでした。そういうプレーが下手だったので、最初から決めていないとうまくいかなかったんです。特に、全日本では、ディフェンスの状態を見ながらプレーするのがなかなか難しく、フェイントで左側に抜くためには、右側に思いきり体重をかけて、ディフェンスをどれだけ右に寄らせるかがポイントでした。シュートも同じです。

外国人は大きいですから、結構、ディフェンスの脇の下とかが空いているんです。脇の下から撃つために、いかにディフェンスの手を上げさせるかがポイントで、上から撃つふりをしておいて、手を上げさせておいて、瞬間的にパッとサイドハンドで横から撃つとか、ディフェンスの顔の横くらいから撃ちたい時には、アンダーハンドで下から撃つふりをするようなプレーをしていました。そんな練習を一生懸命しました。そうやって「決めつけのプレー」が広がっていきました。相手が対応してきたら、そのプレーをやめて、うまくごまかしてパスするんです。

シュートコースも、「遠目の上を撃ってやろう」と思ったら、キーパーを近目に寄せる動きをシュートモーションの中に入れます。サイドシュートでは、シュートを撃つ最後の瞬間に、パッと下を見たらキーパーの手が下がることが多いので、キーパーの頭の上を通すために、それを利用して、プツと上を撃ったりしていました。でも、予想もしないような動きをするキーパーには、結構、シュートを当てちゃいますね。だいたいは、強いとは言えないチームのキーパーでした。逆に、全日本で活躍できるようなキーパーは、簡単に引っかかるんです。国際大会では、チームメイトのシュートに対する相手キーパーの反応を見て、「このキーパーは撃つ瞬間には手が下がる」とか(のくせ)を頭の中に入れておいて、なるべく、頭が真っ白な状態でプレーしないようにはしていました。

## ⑤語りにおいて注目すべき内容の考察

「ディフェンスの前に入っていくスピードは全然いりません。逆にスピードを持って入っていくと、ディフェンスは警戒して、構えてしまいます。走りの緩急が必要です。ゆっくりと入って行って、右脚の1歩だけで、ディフェンスをゆするような感じ」という発言からは、相手に自らの意図を読ませないように、言い換えれば、相手の＜カン＞身体知を働かせないように志向していることが分かる。

「左脚は円周上じゃなくて、その外に踏み出します。そうして、重心を脚の下からはずして…前に持っていくと、上体が前に倒れて、その倒れた勢いで、次の右脚が円周上に出て来るんです」という表現は、＜コツ＞身体知が論理性を持って表現されたものと考えられる。

「ディフェンスの予測をはずして、次はこっちにいくふりをして反対にいこうとか、相手の裏をつくような駆け引きが面白かったです。それは、プレーしている最中に決めるというよりも、プレーする前に『次はこうやるぞ』というように、あらかじめ決めておく感



じです」「フェイントで左側に抜くためには、右側に思いきり体重をかけて、ディフェンスをどれだけ右に寄らせるかがポイント」という語りには、防御選手が動いたら…、動かなかったら…という志向ではなく、防御選手を動かして…、動けなくして…という志向が見られる。つまり、行為中に相手の反応や対応によって自らの行為を変化させていくのではなく、相手の反応を予測し、それに対して効果的な行為を事前に計画し、実行していたことがうかがえる。

さらに、動きのコツを定着させるための練習において、「ディフェンスが円の真ん中で守っていると想定してやっていました。意識のポイントとしては、右脚で強くフェイントをかけて、その反動で左側に跳ぶような感じです」という語りからは、技術力の向上を目指した練習であっても、行為の意味を理解したり、意識していたことが分かる。

## (2) 事例 2：首藤信一氏

### ①競技種目

ハンドボール、左バックプレーヤー、オールラウンドプレーヤー

### ②主な戦績

1988 年ソウルオリンピック出場

1990 年世界選手権大会出場

### ③競技歴

首藤氏は中学 1 年からハンドボールを始める。高校卒業後、実業団チーム・大崎電気に入社。全日本と全日本ジュニアの 2 つの代表に同時に選ばれ、左バックプレーヤーとして国際舞台で活躍する。プレーの器用さからさまざまなポジションをこなし、ソウル五輪以降（23 歳）、全日本になくてはならないオールラウンドプレーヤーに成長。28 歳の時に左膝の内側靱帯を損傷する大けがを負うが、プレーを先読みする力を武器に、攻撃・防御の両面で活躍する。日本リーグでは歴代通算得点ランキング 3 位。

### ④語りの内容

#### a. 競技生活を支えたプレー

ディフェンスでのドリブルカットとシュート

## b. 相手攻撃プレイヤーのドリブルカット

マークする攻撃プレイヤーが、ボールを持って1:1のフェイントに来そうな場面で、まず、サササッと前につめていきます。そして、すぐ下がり、高い位置で間合い（フェイントできるスペース）を空けてあげます。そうすると、特に、1:1で前を攻めるのが得意な選手は、フェイントをかけて来ます。高い位置で守っているのに、相手はフェイントで突破しても、ゴールまで距離があり、ドリブルをついて来ます。そのドリブルをカットするんです（図6）。相手に近づきすぎるとドリブルをついてくれないし、遠いとドリブルカットにいきません。相手がドリブルをつく距離感をつかむのが難しいです。でも、このプレーは成功したら面白いんですよ。

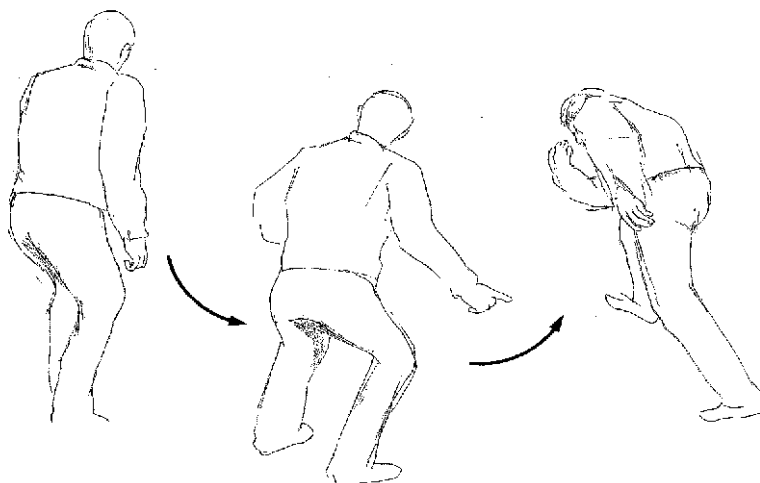


図6 ドリブルカットのイメージ

（左から順に、つめて、間合いを空けて、カットする）

ディフェンスとして一番いいプレーは、ボールを持っているプレイヤーが攻めようとボールをキャッチした時に、パンとつぶして、フリースローにする（攻撃を中断させる）ことです。そうすると相手はフェイントをかける余裕がなくなりますから、でも、相手がボールをキャッチした瞬間に、間合いが空いてしまった時には、相手は「いける」とフェイントをしかけて来ます。この、相手の「抜ける」という心理を利用するんです。「よし、いける」と思うと、その前までにあった、1:1、パス、シュートといったプレーの選択肢が、一気に1つになってしまいます。ディフェンスからすると、選択肢が減った状態というの

は守りやすいんです。相手の攻撃展開がいい時には、わざと 1:1 をしかけられるようにして、プレーの流れを止めることも考えていました。

#### c. ドリブルカットの動きのコツ

前につめてから、下がる時に、腰が引けている状態は絶対にだめです。逆に、フェイントにかかってしまいます。

下がってからカットに行く時に、伸ばす脚の膝や股関節が柔らかくないと、手が（カットする）ポイントに、スッと入っていきません。ドリブルに合わせますから、脚はかなり伸ばします。カットに行く時に、相手とボールの間に、体ごと入れるというイメージではありません。それは、ドリブルカットに失敗した時に使います。失敗した時には、カットするポイントに体あたりするような感じで、そのまま体を入れて、肩か背中から相手の進路を止めたり、はじいたりして、次（のディフェンス）にお願いするか、もう 1 回（自分が守れる位置に）戻れるかを考えます。

カットする瞬間の動きのイメージとしては、かみそりのように、スパツというイメージです。ドリブルしたボールが床にはずんでから上がった瞬間を「切る」みたいな感じです。それが一番失敗しない方法です。相手が左に抜きに来るならば、右脚と右腕を思いきり伸ばしてカットします。右に来るならば、左脚と左腕を伸ばします。

#### d. ドリブルカットが有効なプレー場面

このプレーは、どちらかというと 3-2-1 や 1-5 のように、積極的に、攻撃的に（高い位置で）守る時に使います。6-0 でもできますけど、9 メートル（フリースローライン）の中ではちょっと無理です。失敗したら、すぐシュートを撃たれ、リスクが大き過ぎるので。あと、点数を入れられてはいけない時はしないです。その時は、やっぱり（確実に）フリースローで止めることを選択します。ここ 1 点ほしい時とか、ここではミスしても（リスクを負っても）しょうがないという時に使います。ハンドボールの攻撃成功率は 50% くらいですから、ドリブルカットしてマイボールになれば、0.5 点とったのと同じですよ。ディフェンスは受け身だけでなく、ボールを奪う部分が必要で、（ディフェンスが）攻めるというイメージを（オフェンスに）持たせないといけないと思います。

日本リーグでも一試合に何回かいけました。僕がいるから「カットが怖い」と相手と思うと、攻めて来られなくなります。ドリブルを使うフェイントができなくなって、プレーの選択肢が少なくなって、また守りやすくなります。試合の最後まで（普通にフェイントを）やらせておいて、ドリブルカットのプレーを取っておくこともしました。60 分間のゲ

ームを考えて、戦略的にです。後半の勝負どころでやると、相手のダメージが倍になる感じがします。

#### e. ドリブルカットの動きのコツをつかむきっかけと定着させるための練習

動きのコツをつかんだのは、28 歳ごろだったと思います。左膝をけがした時期と重なります。

ドリブルカットのプレー自体は、その前からできていたんです。以前からディフェンスは好きで、どうやって相手をいい状態から、逆に悪い状態に追い込んでいくかというのは面白いなと思っていました。膝をけがして、(動きが)制限された状態になって、その中で相手をどうだますかということを考えなければならなくなって、カットの瞬間が「今」で、試合の流れからすると「今」が一番相手にダメージを与えられるというようなことを読めるようになりました。ディフェンスをトータルのなものとして考えられるようになったんです。

実業団に入った 19 歳か 20 歳ぐらいころは、1:1 さえもうまく守れなかったんです。全日本の選手なんかは、とても守れなかったです。自分がマークするプレーヤーを全部守り切らなきゃいけない、フリースローで完全に(相手の動きを)止めなければ自分の仕事は終わらないと思っていました。そういう気持ちが強かったから、どんどん後手に回って、逆に抜かれやすかったですね。でも、全日本の合宿で(コーチの)東先生に、「自分が守るエリアから相手を出せばいい」というアドバイスをもらって、楽になりました。そうしたら余裕が出てきて、相手がボールを持って動きだす前に止めること以外も、考えられるようになったんです。所属していた大崎電気では、前につめて、下がって、カットというドリブルカットの練習があったんで、それを実際に試してみて、自分のものにしていきました。できるようになるまでは、ただ無我夢中でやっていたんですけど、できた時に、「何でできるんだろう」と考えてみるようになったんです。「こうなったからできたんだ」というのが分かるようになって、次もできるようになりました。できてしまった後に考えないでいると、次、できないんです。それで、「やっぱりできないんだ」と終わってしまうので、できた時に考えることを積み重ねていくことが(動きのコツの習得には)大事だと思います。

大崎電気の練習で東江さん(チームの先輩)を 1:1 でどう守るかも、かなり練習になりました。東江さんは、フェイントも切れるし、手が下がっていればステップシュートも撃てるし、いろいろなプレーができる人だったので、フェイントは守れるけどステップシュ

ートを撃たれる間合い, ステップシュートは守れるけど抜かれる間合いを雰囲気を感じて, ここではどうやって守るのがベストかを考えられるようになりました.

#### f. シュートにおける動きのコツ

実業団に入った当初, シュートフォームでコースが分かると, 先輩キーパーから怒られました. 多分, スイング中の肩の開き具合で引っぱりと流しのコースが分かったんでしょう. これは, すぐには直りませんでした. だから, とりあえずは(ゴールキーパーに読まれる)そのフォームで, 最後に手首を返して, 逆に撃つようにしたんです.

キーパーの逆をつくために, キーパーをよく見ました. キーパーに対して, 大きいフォームを作ってシュートしてみて, そのスイングしている最中の, どこでキーパーが反応するかという部分を見るんです. フォワードスイングの始まりでキーパーが反応するのか, 途中で反応するのか, リリースの直前で反応するのかを. スイングの前半でキーパーが引っぱりに動くんだったら, すぐにボールを(流しのコースに)放してもいいんです. キーパーがよく見ていて, 反応しないんだったら, ボールを(流しのコースに)押し出すように, 撃つコースを見せておいて, すっと(引っぱりに)変えたりします(図7). それでも動かなくて心配だったら, キーパーが引っぱりに動いてもゴールできるように, スピンをかけてバウンドシュートを撃ちます.

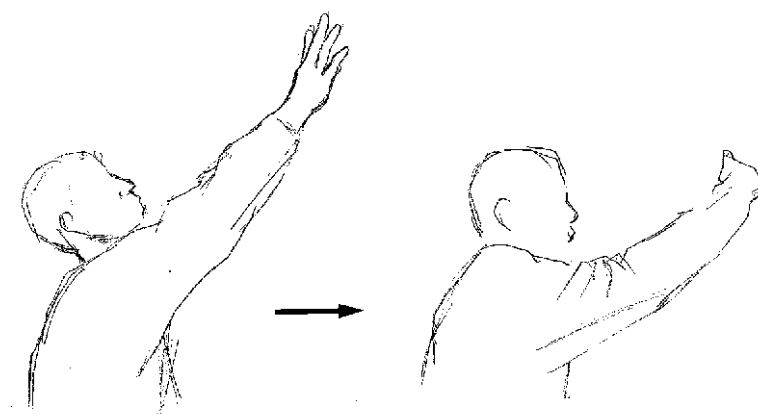


図7 流しのコースを見せて引っぱるシュート

カットインシュートで, キーパーの動きがないと思ったら, スイング中に肩をロックさせます. これは, スイングの最中に後ろから腕を引っぱられて, 肩が残って, 体だけが前にいくような状態です(図8). そうして, ちょっと時間を作って, キーパーの動きを見

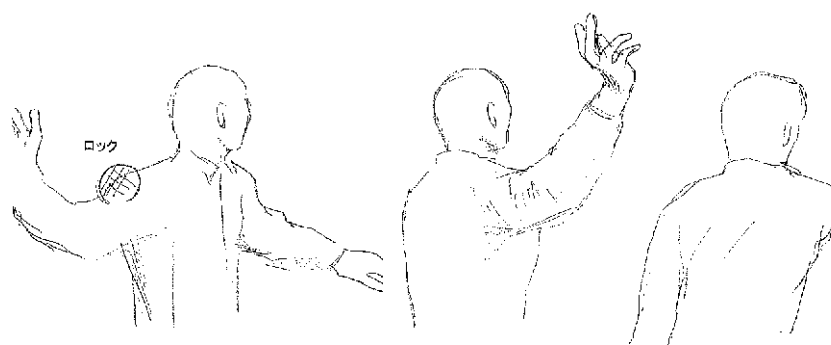


図8 肩をロックさせて撃つシュート

で、撃ち分けるという感じです。肩関節には、あまり良くない状態だと思います。このプレーは、ジャンプが利き手側に流れている時に特に多かったです。（キーパーが動く）時間を作っておいて、すっと引っぱるという感じの状態を作りますね。リリースの時には、流しのフォームを作ってから引っぱります。最後までキーパーを見て、手首を効かせていきます。この時に、ボールを持っている手が下を向いて（手首が底屈して）しまうとだめです。コースが決まってしまうから、キーパーに、ぎりぎりまでコースを分からせないようにするためには、最後まで、流しにも引っぱりにも撃てるように（手首を背屈）しておくことが大事です。

リリースでは、基本的には、人さし指と中指の2本でボールに力を加えていきます。でも、小指で力を加えることもありました。速いフォームで、速いスイングをすると、キーパーは引っぱりに撃たれるイメージになるので、そういうスイングをしておいて、小指にうまく引っかける感じで流しに撃つんです。手首は引っぱりのコースを撃つように返すけれども、小指でボールにシュート回転をかけるイメージです（図9）。シュートコースが狭いカットインシュートで、ぎりぎりまで待つキーパーだったら、そこまでしないと難しいですね。追い込まれたと思わないで、ボール1個ずらせば入ると考えていました。

#### ⑤語りにおいて注目すべき内容の考察

ドリブルカットにおいては、「前につめてから、下がる時に、腰が引けている状態は絶対にだめ…」「カットする瞬間の動きのイメージとしては、かみそりのように、スパツというイメージ」と＜コツ＞身体知を表現していた。これらの発言は、身体バランスや動きの切れのよさといった身体感覚を表現したものであると考えられる。また、「フェイントは守れ

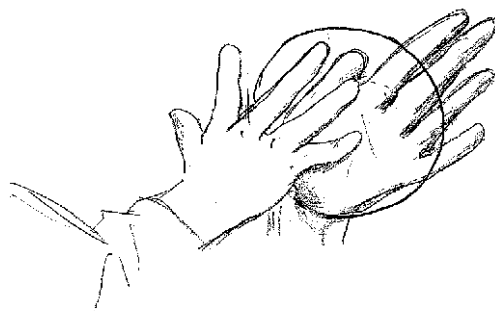


図9 小指で流しのコースを撃つイメージ

るけどステップシュートを撃たれる間合い、ステップシュートは守れるけど抜かれる間合いを雰囲気を感じて、ここではどうやって守るのがベストかを考えられるようになりました」という発言は、相手の攻撃選手にいかに対応するかという＜カン＞身体知を表現したものであると考えられる。

一方、「キーパーがよく見ていて、反応しないんだったら、ボールを（流しのコースに）押し出すように、撃つコースを見せておいて、ずっと（引っぱり）変えたりします」というシュートに関する発言からは、自らの意図を相手ゴールキーパーに悟らせないような動きと、相手ゴールキーパーのねらいの逆をつくような戦術的思考が表現されている。このことは、首藤氏のシュートが、＜コツ＞身体知と＜カン＞身体知が統一された戦術行為であることを示していると考えられる。

### （3）事例3：酒巻清治氏

#### ①競技種目

ハンドボール、オールラウンドプレイヤー

#### ②主な戦績

1990年世界選手権大会出場

1990年アジア大会準優勝

#### ③競技歴

酒巻氏は、中学からハンドボールを始め、愛知高校、中京大学を経て、1985年湧永製菓

に入社。同年、ドイツ・ブンデスリーガ2部バイスバーデンにハンドボール留学。相手ディフェンスとの対応とスピードプレーを武器に小柄ながらも日本リーグで活躍し、第14回(1989年)日本リーグから3年連続でベストセブンに選出される。全日本選手としては、1990年世界選手権大会出場、1990年アジア大会準優勝の成績を収める。

#### ④語りの内容

##### a. 競技生活を支えたプレー

ミドルシュートにおいて、相手ディフェンスにコンタクトされないままゴールできるステップワークとスイングテクニック

##### b. 獲得した動きのコツ

##### <シュートやフェイントの準備>

相手のディフェンス隊形が6-0でも、3-2-1でも、僕は相手には絶対止められない自信がありました。アルジェリアがマンツーマンしてきても、韓国が高めのディフェンスをしてきても、ボールをもらって、味方を活かすプレーに対して絶対的な自信がありました。そのために、自分の前のディフェンスを常にチェックしていました。普通は、パスした後、パスした方向をずっと見ているんです。でも、世界のトッププレーヤーを見てみると、パスを放す時には、ゴールやパスとは逆の方向を見ているんですよ。「ああいうプレーをせないかん」と思っていました。僕をマークするディフェンスが、僕がボールを持っていない時に、ボールを見ながら僕も見ているかをチェックしてみたら、完全にボールだけを見て、僕を見ないディフェンスもありました。そういうディフェンスはパスが来てから準備するんです。僕は、パスが来た時にはすでに次の攻撃の準備をしていますから、常に先手を取っている状態になりますね。常に「相手の考えを見る」という準備です。

##### <シュートの脚さばき>

例えば、左側からボールをもらってシュートを撃つ時には、当時の選手はみんな、右脚と左脚を交互に使って、シュートを撃っていました。でも、僕は、左脚が着地する時に、左手でボールをキャッチして、左-左-右-左と、ケンケンするようにステップを踏むようにしたんです(図10)。これは僕にとって大きかったですね。左からのパスをもらう瞬間に、50センチでも1メートルでも右にずれながら、左手でパスをもらうんです。その瞬間、ディフェンスをずらせるんです。両手でもらうと、体はパサーの方を向いてしまします(図11)。シュートに行くには体をゴールに正対させるように持って来ないといけない



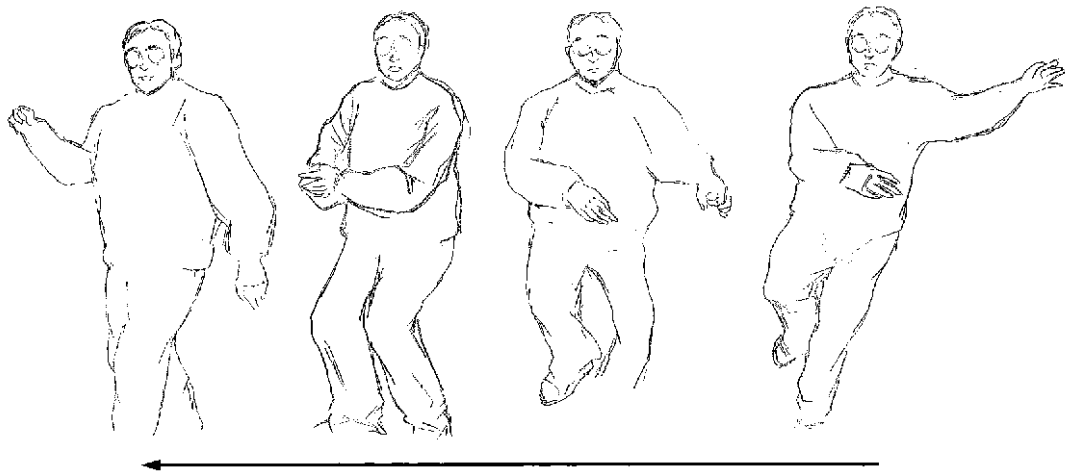


図 10 ミドルシュートのステップワーク

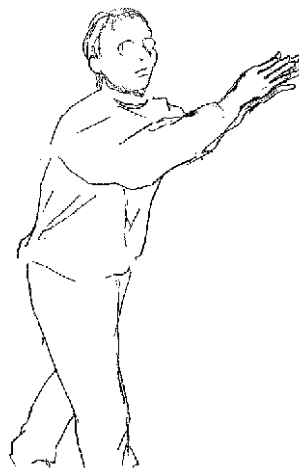


図 11 両手でボールキャッチした時の体の向き

ですから、シュートまでに時間がとられてしまうんです。そんな時間はもったいないので、左手だけでパスをもらって、右手に持ちかえるようにしました。このステップはパス練習の中で練習していました。

このプレーは、よく応用して使っていました。それは、例えば左バックでプレーするとしたら、センターからボールをもらって、アウトに抜くように1:1をしかけて、ディフェンスにわざと捕まっちゃうんです。でもフリースローにはならないように、サイドにパスします。それで、ディフェンスにはナイスマークだと思わせて、守れているようなイメー

ジ持たせておきます。ディフェンスは、ナイスマークしたから、「酒巻を見れている」と安心するんですが、それは僕のトラップなわけです。相手はプレーし終わった後、フッと力を抜いてしまうんです。そこにさぼりが発生してきます。僕は、次に、サイドからボールをもらう時には、スーッと相手の前からいなくなる感じで、右側に1歩移動しておきます。そうするとサイドからボールをもらう瞬間には、利き手がずれて、ノーマークでシュートが撃てます。もし、横のディフェンスがカバーに寄って来たら、2:1 (のアウトナンバー) になります。

### <フェイントの脚さばき>

僕をマークするディフェンスが早めにそのプレーを予測して、右腕をつぶしに来たら「ありがとうございます」です。相手が右に来る動きに対して自分は左にいくフェイントを使って、抜けるんです。止まっているプレーヤーを逆に動かして抜くというのではなく、動いているプレーヤーの逆をつくイメージです。「すごくフェイントが切れる」と錯覚されますが、違うんです。ディフェンスが勝手に動いているだけなんです。

利き手の方を早めにつぶしに来たディフェンスを抜くフェイントでは、右脚で切り返して、左脚を大きく真横に出します。少しでも大きくディフェンスの左側に幅を持たせておいて、次の右脚をゴールに向けて潜り込ませる感じです (図 12)。僕は右脚で切り返した後、その右脚を (左脚の前を通るように) クロスさせていくようなステップは使いたくないんです。クロスステップを使うと体がゴールの方を向かずに、サイドラインの方を向いてしまいます。そうすると強いシュートが撃てないし、(シュートにいくまでが) 遅くなります。これをパス練習でずっとやったんです。腕を回すフェイントもありますが、僕は回しませんでした。自分がバランスを崩して動けなくなってしまうので。

### <シュートのスイング動作>

シュートコースに関しては自分のセオリーを持っていました。まず、ゴールの下半分が優先順位の一番でした。左右のコースでは、流しのコースよりも引っぱりが多かったです。シュートを撃つ時に、僕はディフェンスより半身、利き手側にずれています。シュートは、ディフェンスの手の上からではなくて、左脇あたりから撃つので (図 13)、腕をスイングさせている時にゴールキーパーがゴールの正面に入って来ようと、流しのコースに動くんです。ゴールキーパーに流しのコースを予測させるようなスイングを見せながら、最後、ピンッとスナップを返して引っぱりに撃ちます。キーパーが引っぱりのコースに動く時には股下に撃ちます。引っぱりの下のコースに右脚を出して止めようとして、股下が空くん

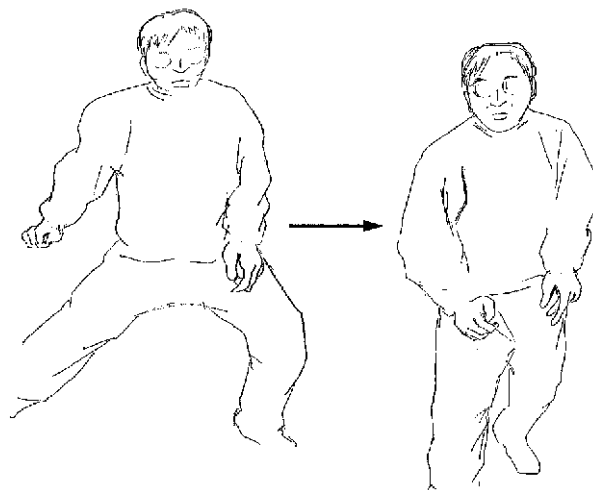


図 12 利き手と逆側へのフェイント



図 13 シュートのリリースポイント

です。

シュートの時には、頭の位置が横に倒れたり、ぶれたりしないようにしていました（図 14）。頭の位置をぶらしてしまうとディフェンスの状態が分からなくなるんです。あと、バックスイングは大きくは振りかぶるのではなくて（図 15）、上からでも横からでもすぐに撃てるように、右肩の上にコンパクトに持って来るようなバックスイングでした（図 16）。スイングは、肩を中心にするのではなく、肘を中心にスイングしていました。イメージとしては、猫が猫じゃらしをパンとパンチするようなイメージです（図 17）。以前は、肩を



図 14 シュート時の頭の位置



図 15 大きく振りかぶるバックスイング

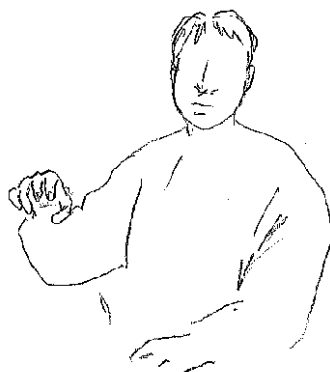


図 16 コンパクトなバックスイング

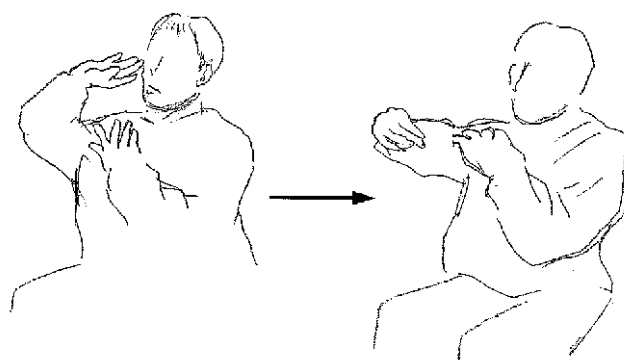


図 17 肘を中心としたシュートスイング

支点に、肘を上げて、大きく腕を回して、シュートを撃っていましたが、それだと、素早いスイングはできないし、(キーパーに読まれやすい)「線」というか「棒」のシュートになってしまうんです。とにかく、素早いスイングを心がけていたら、ボールは上からつかむようにして肩の前で持って、肘から先で撃つイメージになりました。でも、(ちょっと無理なフォームなので)肘の故障が多くて、肘が曲がらなくなっていました。

#### <ボールの握り方とシュートのリリース動作>

リリースの時に、人さし指と中指でボールに力を与えるように投げると、これも棒シュートになってしまいます。僕は、親指と人さし指でボールをつまんでいます。引っぱりに撃つ時には、親指と人さし指でボールを持って、そこから(前腕を回外させて)小指で引っかける感じで撃つんです。そうしたら、左肩をまったく開かずに、引っぱりに撃てます。でも、よく小指の関節が腫れました。このシュートができるようになったのは、26歳以降ですね。

#### c. 動きのコツをつかむきっかけ

大学まではバックのポジションだったんですが、湧永に入ってからサイドをやっていました。でもソウルオリンピックの全日本代表メンバーから落ちて、自分のチームに帰った時(25歳)に、サイドからバックポジションのセンターにコンバートされたんです。サイドのプレーはずっと待ちのプレーだったんですけど、センターになった時に、何がきっかけだったのか覚えていないんですけど、「相手からずれると、こんなにノーマークでシュートが撃てるんだな」というのが分かっちゃったんですよ。それはミドルシュートです。

僕は体が小さいですから、ディフェンスの正面でプレーをすることは、もう「終わり」でした。だけど、パス練習を一生懸命して、そのパス練習の通りに動いていくと、右腕が

ディフェンスから外れる状態になったんです。ゴールキーパーから見ると僕の体はディフェンスに隠れていて、右腕だけが見える状態です。利き腕に対して邪魔がないのでノーマークなんですよ。ボールに目を持っていくと常にフリーなわけです。「こんなにフリーなんだ。撃っちゃえ」とシュートを撃つようになったら、ゲームでもトレーニングでも、ものすごい点数が入ったんです。そこが上昇の始まりでした。

#### d. 動きのコツを定着させるための練習

##### <ステップワーク>

世界で活躍する選手を研究したんです。当時よく見ていたのが、ロシアのヤキモビッチ選手と、スウェーデンのM. アンデルソン選手です。彼らのプレーを見てみると、ボールを持ってから動かないんです。動かないというのは、ボールをもらってから少ない歩数でプレーしているという意味です。シュートは、必ずワンステップです。「これだな」と思いました。世界のトッププレーヤーがそういうプレーをしているのに、日本みたいに（シュートまでの助走で）3歩使って「イチ、ニ、サン、ドン！」じゃいかんだろう、でも、どうしてこういうことができるのかなとも思っていました。

バルセロナオリンピックを目指したナショナルチームの遠征で、ヨーロッパのチームのパス練習を見たんです。そのパス練習というのは特別なパス練習ではありません。シュートをねらいにいて、パスして、バックステップをして…、というのを繰り返すパス練習です。でも、ステップワークが激しくて、とんでもないスピードで動くんです。バシン、バシンと、シュートみたいなスピードのパスをするんです。彼らは、パス練習で「ハア、ハア」へばるんです。さぼってないんです。その時に、パス練習というのはミスをしないためじゃなくて、パスをした後やパスをする前に自分の体を移動させて、短い時間で、相手より常に先手を取るような準備していくことなんだ、と気がついたんです。パスのトレーニングというのは、日本ではアップの練習ですけど、実はメインの練習なんですね。

日本に帰って来て、「あれをとりあえず真似よう」と思って、湧永でも、全日本でも、どんなパス練習でも、とにかく全力でやりました。センタープレーヤーにコンバートされた瞬間は、シュートが撃てなくて「センター、無理やわ」って思っていましたけど、そのトレーニングをやっていくうちに、「ずれの状態」が分かってきて、途端にゴールがよく見えるようになったんです。最初は、なんとなく分かったんですけど、それをくり返していくうちに、「いつでもできるように」に変えてやろうと思うようになりました。いろいろなパスワークの練習がありましたが、どんな練習でもボールを持っている時間を短くして、少

ない歩数で、速くボールを動かすことを常に心がけてやっていました。それから調子がよくなりました。僕はフェイントが切れるタイプではなかったんですけど、相手が来る前に、先に位置をとっておいて、相手が動きだしてからフェイントかけたり、相手の動いた逆の方向に動いてフェイントがかかる状態ができるようになって、日本リーグで得点を量産しました。1990年のバルセロナ五輪の予選の前、USAカップで韓国を倒した時には、僕はナショナルチームでセンターをやっていたんですが、絶好調だったですね。ベストセブンにも選ばれました。

以前は、（パスワークの時の）ステップの動きは、脚が止まった状態で、硬く、ゴツゴツした感じだったんですけど、（動きのコツをつかんでからは）リズムよく踊るような感じのステップになりました。常に膝に余裕を持たせて、どちら（の方向）にも変化できるように、どういう状態にも対応できるようになりました。

### ＜スイングテクニック＞

僕は、大学1年生からバックプレーヤーとして試合に出ていました。チームは全日本インカレで上位に進出する戦績は残せませんでした。3、4年生になって、筋力が強くなり、ボールの扱い方が変わって急成長しました。高校時代までは、ボールを手のひらの上に乗せて「持っている」状態だったんですが、筋力が強くなってボールが小さく感じるようになって、完全に上から「つかんでいる」状態になったんです。親指と人さし指でボールをつまんで、ちぎって投げるという感じに変わりました。この感覚の違いは大きかったです。鉄アレーを持ったり、風呂の中でタオルを100回くらい握ったり、広げた新聞紙を手のひらから出ないところまで丸く握ったり、手首を鍛えることは、大学に入ってからずっと個人でやっていました。今でも前腕は現役の選手よりも太いです。握力は、現役の時は70kgくらいありました。

### ⑤語りにおいて注目すべき内容の考察

酒巻氏は、プレーの準備として、「パスが来た時にはすでに次の攻撃の準備をしています… 常に『相手の考えを見る』という準備です」という言葉で、相手との対応における＜カン＞身体知を表現していた。このことは、酒巻氏が、相手の動きを観て、それに対応したり、反応するのではなく、相手の戦術的意図を読み取ろうとしていたことが分かる。また、シュートに至るまでの脚さばきを「サイドからボールをもらう時には、スーッと相手の前からいなくなる感じ」と＜コツ＞身体知を表現していた。この表現からは、力動感で

はなく、軽快感が感じられる。

「ゴールキーパーに流しのコースを予測させるようなスイングを見せながら、最後、ピシッとスナップを返して引っぱりに撃ちます」という発言からは、酒巻氏が、シュートの動作中において、相手ゴールキーパーに自らの動作を先読みさせて、その逆をつくという戦術的意図を持っていること、相手の逆をつくために、シュートスイング中の動きのリズムを瞬間的に変化させている様子がうかがえる。

#### **(4) 事例 4 : 藤井孝志氏**

##### **①競技種目**

ハンドボール、ポストプレーヤー

##### **②主な戦績**

1997 年世界選手権大会ベスト 16

##### **③競技歴**

藤井氏は中学 1 年からハンドボールを始める。大学までは、いずれのチームでも左バックのポジションを任せられ、チームのエースとして活躍する。体力的な向上に伴い競技力が高まり、大学 4 年次には全日本代表選考合宿に参加するようになる。大学卒業後、大同特殊鋼に入社。それまで全く経験がなかったポストにポジションが変わり、パフォーマンスが大きく落ちる。ポストプレーヤーの技術・戦術の理解に苦しみ、全日本のメンバーからも外れる。ポストプレーヤーとしての技術・戦術が高まってきた 1993 年（実業団に入り 3 年目）、チームとして全日本総合に優勝し、全日本にカムバック。1996 年、全日本の監督が日本人からスウェーデン人のオレ・オルソンに代わり、攻撃のかなめとして起用されるようになり、急成長。1997 年熊本世界選手権ではベスト 16 の成績を収める。

##### **④語りの内容**

###### **a. 競技生活を支えたプレー**

ポストでのブロックプレー

###### **b. 獲得した動きのコツ**

＜ブロックの入り方＞



オルソンが監督になって（1996 年）からは、まず自分が死んで味方を活かした後に、自分が活きるプレーを特に心がけていました。これは、相手ディフェンスをブロックして（味方のスペースを作り）、その後、空いたスペースに走ってボールをもらうというプレーです。オルソンは、このプレーをベースに攻撃を組み立てていきました。左バックの中山、センターの富本、ポストの藤井の 3 人のコンビネーションと、右バックの岩本、富本、藤井の 3 人のコンビネーションが基本で、すべてはそこから始まる感じでした。中山、富本、藤井のコンビネーションでは、まず右センターディフェンスと左センターディフェンスの間に位置をとります。左バックの中山がボールを持って（目の前の）右 45 ディフェンスに対してアクションを起こすと、右センターディフェンスが右 45 ディフェンスのカバーにいかうとして、少し右方向に重心をかけます。カバーにいかうかなと体を動かした時に、右センターディフェンスに対してブロックに入ります。

以前は、（ディフェンスに）向かい合うようにブロックに入って、（そこから反転して）ボールをもらおうとしていたんです（図 18）。でも、そのやり方だと、（反転してボールを）キャッチしようとした時に、ディフェンスに手をつかまれたらどうにもなりませんでした。オルソンは、「背中でブロックに入れ」と言ったんです。そうすると（ゴールに近い方の）手が空いちゃうんですね。その手でボールをもらうことによって、そのまま跳び込んでシュートにいけるし、ディフェンスに押さえられればペナルティースローになります。つかまれたら動けなくなる向かい合うブロックから、背中で押さえるようなブロックに変わって、かなり自分から味方にアピールできるようになりました。

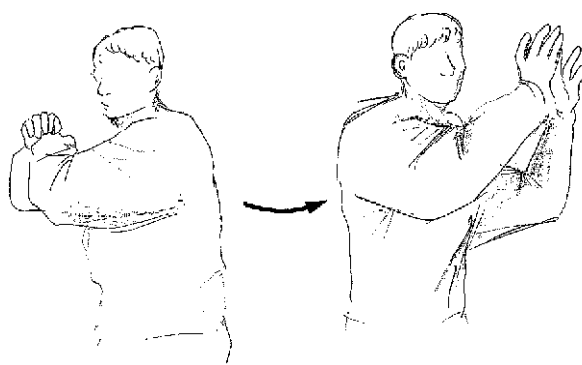


図 18 ディフェンスと向かい合うブロック

### ＜ブロックに入る前のディフェンスとの駆け引き＞

バックプレーヤーが移動すれば、それをマークするディフェンスも動きますから、ポストは、ディフェンスとディフェンスの間に立っていればノーマークになっちゃうんです。でも、その位置をとろうと思ってディフェンスをぎゅうぎゅう押すと、ディフェンスがケアしてマークしてきます。だから、ブロックに行く前は、ダラーと、コンニャクみたいにしておいて、本当に何もないような、どこで合わせるのかなという（雰囲気を持っておく）感じでいます。ディフェンスに押された時に、ぐにゃっと倒れるようにしておくんです。そうするとディフェンスは、結構、安心するんですね。

これは、海外での試合で覚えたんです。当時は、ブロックしようという気持ちが強いから、どうしても先にディフェンスを押さえにいていました。体も大きく、力もあるヨーロッパの選手と、一試合中、ガンガン、ぎゅうぎゅう押し合いになっちゃっていたんです。すべての動きに対して合わせて、体力を消耗して、大事なところで仕事ができなかったんです。試合が終わったら、疲れて、シュートもできなくなるくらいへろへろになっちゃうんですよ。でも世界のポストプレーヤーのビデオを見てみると、一試合中ブロックしているポストなんかいなかったんです。ディフェンスに押されても、あんまりブロックする気はないなあと思わせることが大事なんじゃないかと思うようになって、押されても、ぐにゃんとするようにしたんです。

### ＜ブロックに入る前の位置どり＞

ブロックをかける相手ディフェンスプレーヤーに対して、距離を空け過ぎていたらブロックできません。でも、あまり近づいていると、ディフェンスはブロックにかからないように警戒してしまいます。最初は、手が届く範囲ぐらいのところにいます。ディフェンスが味方のカバーにいて、ちょっと横に動いて、戻って来るところをねらうか、バックプレーヤーの切り返しのパスに対してディフェンスが切り返しの動きをして、重心が振られるところをねらってブロックに入ります。

ディフェンスがフリースローライン（ゴールから9メートル）付近まで高くつめている場合は、ちょっと距離を空けるんです。ディフェンスは動けるスペースがあると、マークするバックプレーヤーについて横に動きますから、その時にブロックがはまるんです。バックプレーヤーを守るのに集中していると、（ブロックに対する）注意力がなくなって、コツンとブロックにぶつかってくるんです。

動きのコツをつかむ前は、すべての動きに対して合わせようとしていたので、ブロック

するポイントがなかなか見つかりませんでした。攻撃のポイントが（自分の中で）絞れてなかったんです。バックプレーヤーが動いている時にはポストは動かないで、合わせるポイントやタイミングをしっかり意識することが大事だと思います。

もちろんディフェンスは、ブロックを外そうとします。腕を回してブロックを外そうとしてくるのに対しては、うまく腕を使います。例えば、右センターディフェンスの内側をブロックする時には、右腕を使って、相手の左肩か、左の二の腕あたりを押さえるんです。そうするとディフェンスは腕を動かさなくなります。脚でもブロックを外そうとしてきますが、それに対しては、右のお尻のあたりで、相手の左のお尻を押さえていきます。上から見ると、ディフェンスと自分とでTの字とか、Lの字とかを作っている感じになります。それでも相手がブロックを外してきた時には、外れた後に、同じディフェンスに対して逆側をブロックします。そうやって、バックプレーヤーに、ディフェンスがブロックを外しに来ているという情報を伝えてあげて、切り返しのプレーを促していきます。

ブロックに入る時に、手で相手を押さえたり、押ししたり、またお尻で押しにいったりすると、ブロックの反則を取られてしまいます。自分から押しにいくのではなくて、ディフェンスがバックプレーヤーを守ろうと移動する進路の途中にいて、体全体を板にするようなイメージでいます（図 19）。そうすると、カッスンと相手が当たってくるんです。腕だけで押さえるとか、お尻だけで押さえるとかではなくて、足から腕までの体の片側全体を一枚の板にするというイメージです。うまくブロックが入ると、ボールをもらえるスペースができます。また、ディフェンスは（体勢が崩れて）ぐにゃっとなります。

### ＜ブロックの後のボールのもらい方＞

ブロックをかけている腕やお尻と反対側の手で、パスを投げるバックプレーヤーに、「捕れる体勢だよ」「ここに投げて」という合図を出すんです。そうして、味方のパサーに安心感を与えてあげます。

キャッチは片手でしました。両手でとるよりも片手の方が遠くのパスがとれるんです。とってから、ゴールエリアにジャンプする時にボールを右手に持ちかえてシュートします。右手だけでも、左手だけでもとれるように、片手でのキャッチの練習をしましたね。

パスは、「バウンドパスしろ」と言われたんです。バウンドパスは、ディフェンスにカットされにくいし、ゴールエリアに飛び込める、腰を落とした体勢でキャッチできます。上でキャッチすると、（シュートに飛び込む体勢を作るのに）時間がかかってしまうんです。

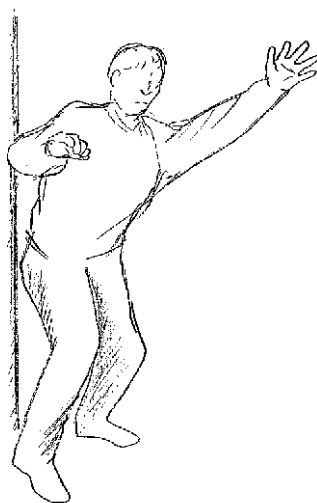


図 19 体を板にしてブロックするイメージ

バックプレーヤーからのパスはゴールエリアの空間に出てきます。最初、(ディフェンスをブロックするために) 重心は後ろの方にかかっています。ブロックをかけておいて、ボールが(自分の前を通過してゴールエリアに)いった後に自分が動く感じです。自分が動き始めるタイミングが早いと、ディフェンスも一緒について来て、ボールをとれません。パスに対してワンタイミング遅らせて動くんです。ディフェンスに対して右側の腕やお尻でブロックに入った場合は、右脚に重心をかけておいてから左脚の方に動いて、左手でキャッチします。

#### <ポストシュート>

左手でキャッチしても、右手でキャッチしても、キャッチの後は、ボールを素早くゴールエリアラインに入れてしまいます。そこまでいってディフェンスにたたかれたらペナルティースローになりますから、そこから(シュートまでは)時間をかけることが大事です。ボールをもらって、そのままの体勢ではジャンプができませんし、しっかり跳ばないと、キーパーを見て、ずらしてシュートを撃てません。ジャンプする前は1回(重心を)沈ませて、ガッとしっかり踏んばってジャンプします。もらってから早く(ボールをゴールエリアに入れて)、その後は1度沈んでしっかりジャンプして撃つというのが基本です。右手でキャッチする時も、左手でキャッチする時もやることは全く一緒です。左右が逆になるだけです。ただ、右手でもらう時には右脚が前に出ているので(しっかり跳べないので)、基本的には、左脚を(ゴールエリアラインまで)持って来て、踏んばってジャンプします。

ポストシュートは、キーパーが間近にいるんで、スピードボールは必要ありません。いかに、腰の横や股下やキーパーの空いているところを抜くか、(ジャンプでキーパーの位置どりを) ずらして逆に撃つかが大切だと思います。あまり複雑なテクニックは必要ないと思います。

跳ぶ方向は斜め横です(図 20)。右斜め前か、左斜め前かは、ディフェンスの状況に応じます。横にジャンプすると、(その方向にキーパーが) 来なかったらそのまま撃てるし、来たら逆に撃てます。でも、前に跳ぶとキーパーに近くなり過ぎて、キーパーをずらせなくなって、撃つところがなくなってしまいます。シュートは、基本的にバウンドシュートを撃っていました。上に撃つとゴールの枠外にいく危険性があるので。



図 20 ポストシュートのジャンプ

#### c. 動きのコツをつかむきっかけ

ポストにコンバートされた当初は、本当に何をやればいいのか、いつ動けばいいのか全然分からなくて、(チームメイトに) 文句ばかり言われていました。しかも、キャッチが下手だったので、ずっとキャッチの練習をやらされました。大同に入って3年ぐらいたって、ポストとしてようやく普通の動きができるようになりました。

ポストとして急成長したのは、27歳ぐらいの時です。オルソンが来て、ブロックプレーやゴールエリア際でのボールのもらい方を徹底するようになったことがきっかけです。オルソンの攻撃に対する考え方は、バックコートから点をとるのではなく、確率が高いライン際のシュートを撃つというものでした。ポストプレー重視の考えだったんです。監督に

は、「おまえをポストで使う」「第一線のメンバーとして育てていく」と言われたんです。

オルソンは、スウェーデンのナショナルのビデオをよく見せてくれました。よく見たのはポストのカーレンとか、ビスランデルですね。映像を見て、こうやればいいんだ、こういう動きなんだ、このタイミングなんだ、というのを目で確かめられました。一番学んだのは、ブロックの仕方です。自分が常に先手として（味方をリードするように）プレーしなければならないと感じました。ボールをもらう時にも、自分から先に「ここにパスを投げろ」と味方にアピールするようになりました。どこでもらうかを手で合図を出してあげるんです。それまでは、自分からは言わなかったんですが、自分主導でやっていくことによってミスが減りました。受け身になっていた時は、遅れていましたね。

## ⑤語りにおいて注目すべき内容の考察

ブロックにおいては、「足から腕までの体の片側全体を一枚の板にするというイメージ」「そうすると、カツンと相手が当たってくる」と語っていた。このように表現された＜コツ＞身体知は、相手を押し出すように積極的・能動的に力を発揮するのではなく、相手の力を受け止めるように力を発揮している身体感覚を表現したものであると考えられる。

また、「ディフェンスが…バックプレーヤーを守るのに集中していると、（ブロックに対する）注意力がなくなって、コツンとブロックにぶつかってくる」「ブロックに行く前は、ダラーと、コンニャクみたいにしておいて、本当に何もないような、どこで合わせるのかなという感じでいます。…そうするとディフェンスは、結構、安心するんです」という語りは、＜カン＞身体知が言語化された表現と理解できる。そこでは、藤井選手が、相手選手に自らの意図を読まれない、読ませないような戦術的意図を持って行為していることが分かる。

## （5）事例 5：富本栄次氏

### ①競技種目

ハンドボール、センタープレーヤー

### ②主な戦績

1997 年世界選手権大会ベスト 16

### ③競技歴

富本氏は中学1年からハンドボールを始める。182cmの身長ながら、スピードプレーと切れのあるフェイントプレーを武器に、バックプレーヤーとして、日本体育大学時代から全日本代表に選ばれる。卒業後、大同特殊鋼に入社し、チームとしては全日本総合選手権で4回優勝、個人としては日本リーグで2回ベストセブンに選出される。全日本代表として、さまざまな国際大会で活躍し、1997年熊本世界選手権ではベスト16の成績を収める。

### ④語りの内容

#### a. 競技生活を支えたプレー

1:1を抜くフェイント。状況に応じて、ステップフェイント、キャッチングフェイント、スイングフェイント、ローリングフェイントの4つを使い分けていた。

#### b. 獲得した動きのコツ

##### <ステップフェイント>

ステップフェイントというのは、例えば、左バックでプレーする場合、センターからのパスを、(空中で)キャッチして、右脚で着地して、左脚を強く(左方向に)踏み込んで右に方向変換して、その後、右脚を(右方向に)踏み出して抜いていくプレーです(図21)。そのままシュートも撃てるし、次のディフェンスが寄ればパスできます。歩幅も重心移動も大きいフェイントで、ボールをもらってから大きく動くフェイントです。

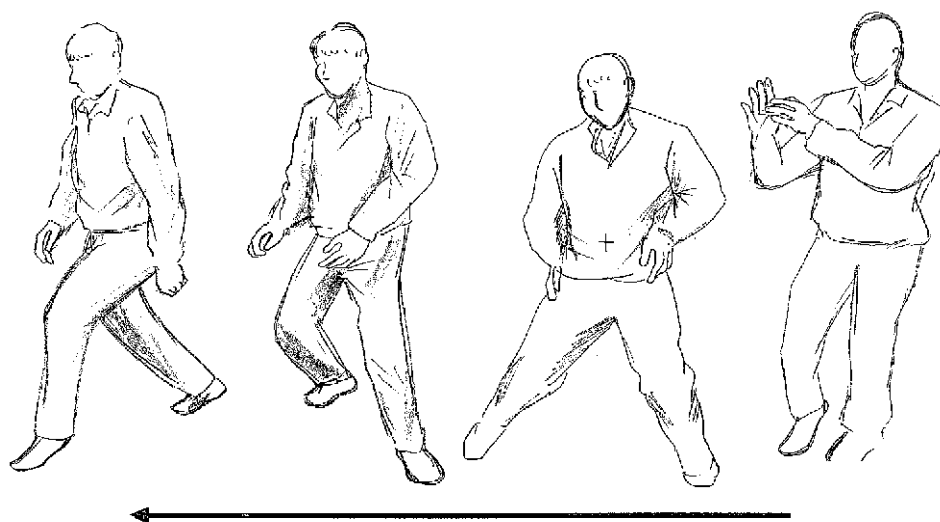


図21 利き手側へのステップフェイント

このフェイントのポイントは、目の前のディフェンスを、いかに抜く方向と反対側に動かすかということなのですが、方向変換する時に、上半身が先に、肩から先に突っ込んでしまうようにいってしまうと、フェイントで抜きたい方向に戻れなくなってしまいます(図 22)．上半身を倒さないで、肩を突っ込ませないで、へそを中心に動かすと、上体がぶれないので、次に蹴りやすく（方向変換しやすく）なります．動きのイメージとしては、腰とつか先、へそだけが動く感じです．

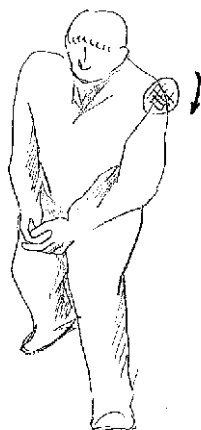


図 22 肩が先に突っ込んだ方向変換

方向変換する時、足の裏の外側に重心がいかってしまうと、バランスを崩してしまいます．親指の下、母指球とかかとの外側に力を入れるんです．足の裏を対角線上に使うような感じですね（図 23）．母指球とかかとの内側に力を入れると、膝が内側に入って、へそが動かなくなってしまいますし、（切り返すための）力が弱くなってしまいます（図 24）．まず、つま先・母指球、次に、かかと・外側という順で着かないといけないと思います．私は、母指球とかかとの外側（の皮膚）が硬くなっていました．

（切り返した後に踏み込む）右脚は、斜め前に出すとディフェンスにつかまってしまいます．いこう、いこうと思って抜く方向に縦に脚を出すんじゃなくて、脚をちょっと後ろに引くようなイメージで、右足のつま先を横に向けてステップすると、ディフェンスにつかまらないで抜けます．指導者によっては「（ディフェンスが）出て来たらお尻を引いてかわしなさい」と言う方もいますが、僕の場合は、「脚を引く」という感じです．方向変換した後も、へそは前に向いています．つま先の向きは横で、上半身は前というイメージです．そうすると、次の（左脚の）ステップにいきやすく、（左脚をゴール方向に向けていく）





図 23 方向変換時の力の入れ方（良いイメージ）

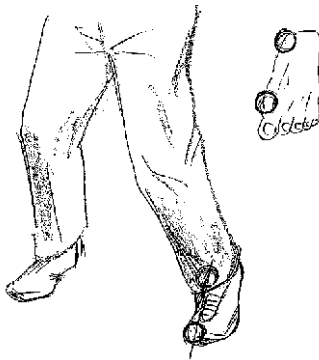


図 24 方向変換時の力の入れ方（悪いイメージ）

縦の力も強くなります。ディフェンスが動いて空いたスペースに縦に行くために、1 回後ろに下がった方がいいんです。

利き手と逆側に抜く時も一緒です。その場合、ディフェンスをちょっと右（利き手側）に動かして、スペースを空けることになります（図 25）。その時もイメージは、へそあたりです。

フェイントをする前にドリブルをついた時は、オーバーステップをよく取られていました。でも外人とやった時に、（プレーをする前に相手の守り方を）観察をしておいて、「動く」というディフェンスには、たまにドリブルを使ってもやります。その時は、大きいステップフェイントをして、シュートが撃てなくても次のディフェンスが寄ってくれたら（パ

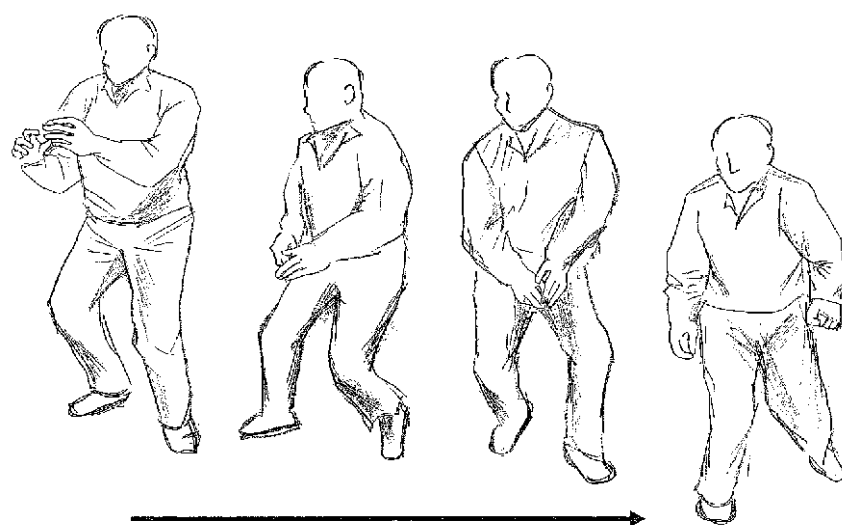


図 25 利き手と逆側へのステップフェイント  
(左から順に、ゼロ、イチ、ニ、サン のステップ)

スを) 出せばいい, というイメージで.

### <キャッチングフェイント>

キャッチングフェイントは, ボールをもらう瞬間に, 相手ディフェンスが積極的に前につめて来るような状況で使うフェイントです. 例えば, センターでプレーする場合, ディフェンスが左バックからのパスを先読みして (利き手側に対してつめて) かぶさって来る時があります. そんな時に, ボールをキャッチした瞬間に, 細かくステップを使って方向変換して抜いていきます. 脚の運び方はステップフェイントと一緒ですが, 細かな脚のさばきになります. 歩幅も重心移動も小さいフェイントで, ボールをもらう前に動き出しているようなイメージです. 前に出て来る相手を, 歩幅をかえて, タタンと抜いていくイメージです.

ゼロ, イチという (歩数を踏んでいく) 意識はありません. 腰とか, ヘソとか, 体の使い方を意識することはありません. ディフェンスがかぶさって来たという確認ができた瞬間に, 切り返せるかどうかポイントです. (流れのある) ボール回しの中でキャッチすると, 自然とフェイントをしかける方向に流れている中でボールがもらえるので, 瞬間的に (方向変換して) ディフェンスを移動させる感じを持っているだけです.

利き手側に抜く時も動きは一緒です. この場合, 多くは右バックからのパスになります. いずれにしても, 相手ディフェンスの予測 (先読み) の逆をいくようなイメージです.

キャッチングフェイントでは、フェイントをする前にドリブルは使いません。これは、前に出て来るディフェンスに対するフェイントで、シュート（に跳び込む）までの距離があります。（フェイントの後に）ドリブルが必要になってきますから。

### <スイングフェイント>

スイングフェイントというのは、ボールを持っている腕を後ろから前に回して、相手をおかわしていく「回旋フェイント」です。この時、ボールを持っていない手で相手の手をおさえ、守るバランスを崩していきます。例えば、利き手と逆側の左に抜く場合は、ボールを持っている右手を回して抜いていきますが、その時に左手でディフェンスの右手をたたくような感じでおさえっていきます（図 26）。そうすると（相手の）体勢が崩れて、左のスペースが空きます。そこに入っていくんです。相手の手を振りはらい、ディフェンスの背中側に入るイメージです。脚のさばき方としては、キャッチングフェイントと同じような感じで抜いていき、自分でそのままシュートにいくか、抜いた瞬間にボールを（反対の手に）持ちかえて味方にパスします。



図 26 スイングフェイント

スイングフェイントは右にも左にも抜けます。ボールの展開の流れと逆方向に（切り返すように）いくことが多かったです。利き手側に抜く時には、ボールを左手で持って、（右手でディフェンスの左手をはらって）右に抜いた後、ボールを持ちかえてシュートにいきます。

スイングフェイントで意識しているポイントは、相手の手先をたたくことです。肘のあ

たりを押さえてもディフェンスは動かないんですけど、手先を押さえると、テコの原理で、ディフェンスが後ろを向くような感じになります。

このフェイントは相手が大きくても、前につめて来るんだったら十分できます。前に出て来るディフェンスは、オフェンスをつかもうと、腕を広げるように出きます。つかもうとして出て来た相手に対して、止まって、伸ばしてきた手をはらって抜いていけるんです。

### ＜ローリングフェイント＞

ローリングフェイントというのは、フェイントで抜きにいった、ディフェンスに対応されて守られた時に、最後にもう1回ターンしてシュートに行くフェイントです。例えば、キャッチングフェイントをして左側に抜いた時に、（完全に止めようと）100%で追って来て体を入れて来るディフェンスがいるんですが、そのような相手に対して、利き腕側がフリーになるように（ゴールエリア際で）、バンと踏み込んで、クルッと回って（ターンして）、シュートに行くプレーです。これは、抜きにいったプレーが守られた後のプレーになります。はじめからローリングフェイントに行くのではありません。ここで大事なことは、最初のフェイントで抜きにいった時に、背中で相手がどこにいるかを感じることです。それを感じられないと、（ローリングして）振り返った時にチャージングになってしまいます。

### c. フェイントの使い分け

これらのフェイントでは、相手の状態がどうなっているかを観察することが大事です。それに応じて、タイミングや歩幅などのポイントが生まれます。

例えば、積極的に出て来るディフェンスに対しては、（大きく動く）ステップフェイントをしている時間はありません。すれば、つかまってしまいます。逆にべったり下がっているディフェンスに対しては、キャッチングフェイントしても、動きが小さい分、あまり効果がありません。また、慌てて前に出て来るディフェンスに対しては、スイングフェイントで抜いていけます。ディフェンスの状態がどうなっているか、まず高いのか低いのか（前につめて来るのか下がって守っているのか）を確認することが重要です。

フェイントをかける時に、間合いとタイミングも大事です。ディフェンスの（守りやすい）間合いに入ってしまうと、絶対に抜けません。（オフェンスは）3歩しか歩けないので、いかにタイミングを合わせて、フェイントしやすい体勢でキャッチできるかが、フェイントで抜く時に大事だと思います。

つめて来るのが早いディフェンスでも、そうでないディフェンスでも、フェイントす

る間合いは変わらないのですが、つめが早かったり、どんどん前につめて来るディフェンスに対しては、自分も下がってディフェンスとの距離をあけます。フェイントで抜ける距離がある程度つかめてしまえば、その距離にどう割って入るかだけを考えます。

#### d. プレー中の状況の変化への対応

（フェイントを覚えた当初は）このフェイントをしたいからこういうふうに動こうと思っていました。ディフェンスに応じてというのではなくて、ディフェンスを自分のパターンにはめ込むようなイメージです。例えば、ステップフェイントをするために、自分の位置どりを変えたり、まわりを動かしたりして、ディフェンスがどんな状態でもステップフェイントにっていました。その頃は、チャージングを取られることも多かったです。ステップフェイントは、強く踏み込むので、その後の応用がきかない部分もあるので。

その後、試合中に相手ディフェンスがステップフェイントに対して、動くのか、待つのか、その反応を観察しておいて、ステップフェイントでも踏み込みの強さを変えて対応するようにしましたが、守られることもよくありました。

いろいろな経験を積んでいくうちに、だんだん、状況に応じてフェイントの種類を使い分けられるようになっていきました。実際には、ステップフェイントで思いきって、ガンッと脚を踏み出して方向変換しようと思っていたけれども、（ディフェンスが）スッとつめて来るから、ダダッとキャッチングフェイントやスイングフェイントに変えたりとか、また、相手が下がっていったから、ワンドリブルしてから（ドリブルを先についてから）抜きにいたり、すり抜けを使ったりとかができるようになりました。すり抜けというのは、方向変換しないで、そのまま抜いていくプレーです。右脚で着地した場合、次に左脚を出すんですが、（そこで）方向変換しないで、そのまま左に抜いていくというプレーです（図27）。そのままシュートに行く場合、（右脚をディフェンスの左に入れて）そこに右肩を入れていって、最後に右肩を後ろに戻して撃つんです。

フェイントは10回やって10回抜けるわけではないので、（うまくいかなかった時の）次のプレーも予測しておかなければいけません。フェイントで抜けなくても、上半身が崩れていない状態ならば、（パスした後）素早く次の位置どりができて、もう1回パスをもらって、今度はフェイントなしでディフェンスを抜けます。でも、（方向変換の時に）肩が突っ込んでしまうと、（フェイントでうまく抜けなかった時にも）だめなんです。パスした後、（次の位置をとろうとしても）戻れないし、（ディフェンスがついて来なくて）すり抜けをやろうとしても、（カバーに来る）次のディフェンスに対応できなくてチャージングになっ

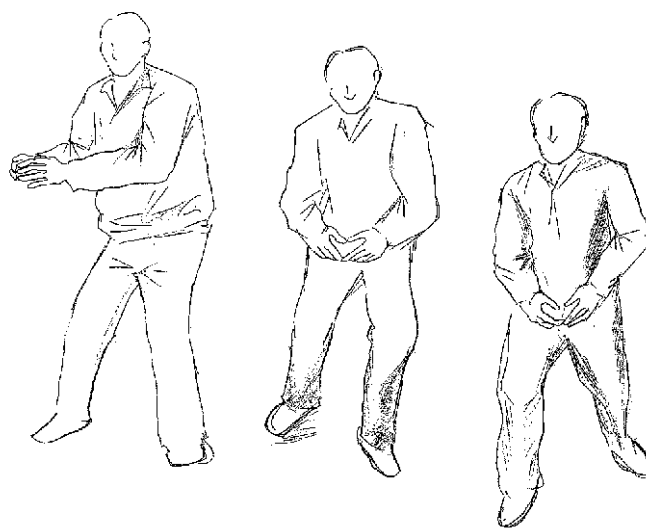


図 27 すり抜けのイメージ

てしまうことがあります。レベルが上がってくれば上がって来るほど、1 回で抜けることはまずないので、フェイントで相手をゆさぶっておいて、「その次」で勝負していきます。

#### e. 動きのコツをつかむきっかけ

動きのコツをつかむきっかけは、大学時代の監督の松井先生の言葉です。大学2年生ぐらいの時に「自分の抜きたい方向に行くには、どういうふうにしたらいいか考えろ」と言われたんです。それで（フェイントについて）試行錯誤するようになったんです。それまでは、やみくもに、感覚だけでやっていました。抜ける相手もいたし、全然抜けない相手もありました。最初は、ステップフェイントだけでした。シュートを撃ちたかったので、右（利き手側）に抜いて、そのままシュートを撃つフェイントが主でした。ステップフェイントが大まかにできるようになったのは、大学の3年生を過ぎたころです。初めて全日本に入って海外に遠征にいった、外人相手にステップフェイントがある程度通用したことが自信になりました。ステップフェイントを覚えた後は、他のフェイントも覚えていきました。動きのコツをつかんだ（フェイントの使い分けまでできるようになった）のは、26 歳くらいでしょうか。

その他に手がかりになったものはビデオです。ビデオを見て、自分のステップを確認したり、他の選手のプレーを見て研究しました。ビデオを見るようになったのは、実業団に入ってからです。オルソンが全日本の監督になって（1996 年）からは、編集ビデオを詳しく見るようになりました。

#### f. 動きのコツを定着させるための練習

脚のさばき方の練習として、「タンタタン・タンタタン」とリズムを変えて、（細かく方向変換しながら前に走る）ステップを、大学の中からよくやっていました。体育館に引かれている1本の線に対して、ラダートレーニングみたいにステップを踏むんです。20メートルの距離を全力でバーッといくのを繰り返していました。この練習は、自主練で（個人として）やっていました。（ステップフェイントで）細かくステップが踏めるようになったのは、タタンというイメージができてからだと思います。

ディフェンスに触られないステップの仕方を覚えるために、バスケットボールコートのサークルをよく使いました。サークルの中心にディフェンスを置いておいて、サークルの頂点でパサーからボールをもらうようにします。パスが来る時に、ディフェンスにつめさせて、キャッチングフェイントで抜いていき、サークルの線上を（ディフェンスにタッチされないように）走っていきます。ステップフェイントの練習の時には、ディフェンスをあまりつめないようにさせて練習しました。

#### ⑤語りにおいて注目すべき内容の考察

「動きのイメージとしては、腰というか、へそだけが動く感じ」と表現された＜コツ＞身体知は、体幹の中心部に意識が向けられた身体感覚を表現したものであると考えられる。また、「親指の下之母指球とかかとの外側に力を入れる…足の裏を対角線上に使うような感じ」といった方向変換時における足裏の感覚は、行為の最中には前意識化されている＜コツ＞身体知と考えられる

フェイントを覚えた当初は、「ディフェンスに応じてというのではなくて、ディフェンスを自分のパターンにはめ込むようなイメージ」であったが、「いろいろな経験を積んでいくうちに…ステップフェイントで思いきって、ガンッと脚を踏み出して方向変換しようと思っていたけれども、（ディフェンスが）スッとつめて来るから、ダダッとキャッチングフェイントやスイングフェイントに変えたり」できるようになっていった。このことは、冨本氏のフェイントの習熟においては、＜カン＞身体知が非常に高いレベルにまで高まっていき、フェイントの個人戦術が自在位相のレベルに達していたことを示していると考えられる。

#### 4. 個人戦術に関する実践知を提示するために開発した方法の有効性

本章の目的は、選手の競技力の向上に活かせるように、卓越した選手における個人戦術に関する実践知を提示するための方法について開発することであった。ここでは、開発した方法の有効性の検証を、個人戦術に関する実践知を提示する際に、質的研究の科学性が保持できているかどうか、行為者の視点が保証できているかどうかの2点に着目して行う。

1 点目の質的研究における科学性の保持のために、本研究では、まず、個人戦術に関する実践知を語りによって外化・対象化し、次に、意味内容をくずさないようにまとめられた語りの内容に関してメンバー・チェックを行った。これらの手続きを通して、提示に調査者の恣意性が含まれる余地をできる限り小さくし、内容の説明と解釈の精度を高め、他の研究者や実践者の反証可能性を担保することができたと考えられる。すなわち、開発した方法によって導かれた語りの内容が実証的データに基づき、その成立過程が明示されていることから、語りの内容の妥当性および信頼性が保証でき、質的研究における科学性が高いレベルで保持できたと考えられる。

2 点目の行為者の視点の保証のために、本研究では、まず、調査対象者が現役時代に獲得した「動きのコツ」を手がかりにして、自らの個人戦術に関する実践知を内省してもらい、内省の内容を語る際には、対象者の語りを深く理解でき、現場感覚および生成的視点を持っている調査者が、語りを単に聞いてまとめるという受動的立場をとらずに、対象者の持っている動きのコツをより具体的な言葉で表現できるように積極的に関わるという立場（桜井・小林，2005，p.185）をとった。これらの手続きと立場をとることで、インタビューという対話活動において、戦術的思考力が身体化された＜カン＞身体知と技術力が身体化された＜コツ＞身体知に関する語りを、調査者と対象者が共同的に産み出すことができたと考えられる。

5 名の対象者から得られた注目すべき語りの内容を考察したところ、いずれの対象者からも＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知に関する語りが得られた（表 1）。

＜カン＞身体知に関しては、「ディフェンスの予測をはずして、次はこっちにいくふりをして反対にいかうとか、相手の裏をつくような駆け引きが面白かった」（松井氏）、「フェイントは守れるけどステップシュートを撃たれる間合い、ステップシュートは守れるけど抜かれる間合いを雰囲気を感じて…」（首藤氏）、「ゴールキーパーに流しのコースを予測させるようなスイングを見せながら…」（酒巻氏）、「ブロックにいく前は、ダラーと…本当に何



表1 <カン>身体知と<コツ>身体知に関する語りの代表例

対象者	<カン>身体知	<コツ>身体知
松井氏	ディフェンスの予測をはずして、次はこっちにいくふりをして反対にいかうとか、相手の裏をつくような駆け引きが面白かった	左脚は円周上じゃなくて、その外に踏み出します。そうして、重心を脚の下からはずして…
首藤氏	フェイントは守れるけどステップシュートを撃たれる間合い、ステップシュートは守れるけど抜かれる間合いを雰囲気を感じて…	カットする瞬間の動きのイメージとしては、かみそりのように、スパッというイメージ
酒巻氏	ゴールキーパーに流しのコースを予測させるようなスイングを見せながら…	サイドからボールをもらう時には、スーッと相手の前からいなくなる感じ
藤井氏	ブロックに行く前は、ダラーと…本当に何もないような、どこで合わせるのかなという感じ…。そうするとディフェンスは、安心する	足から腕までの体の片側全体を一枚の板にするというイメージ
富本氏	(ディフェンスが) スッとつめて来るから、ダダッとキャッチングフェイントやスイングフェイントに	動きのイメージとしては、腰というか、へそだけが動く感じ

もないような、どこで合わせるのかなという感じ…。そうするとディフェンスは、安心する」(藤井氏),「(ディフェンスが) スッとつめて来るから、ダダッとキャッチングフェイントやスイングフェイントに」(富本氏)といった語りが得られた。

一方、＜コツ＞身体知に関しては、「左脚は円周上じゃなくて、その外に踏み出します。そうして、重心を脚の下からはずして…」(松井氏),「カットする瞬間の動きのイメージとしては、かみそりのように、スパッとというイメージ」(首藤氏),「サイドからボールをもらう時には、スーッと相手の前からいなくなる感じ」(酒巻氏),「足から腕までの体の片側全体を一枚の板にするというイメージ」(藤井氏),「動きのイメージとしては、腰というか、へそだけが動く感じ」(富本氏)といった語りが得られた。

＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知に関するこれらの語りは、個人戦術を客観的に対象化してとらえたものではなく、動感身体知に支えられている個人戦術に行為者の視点からアプローチした結果得られたものであると考えられる。また、いずれの語りも、個人的、経験的な知識、柔軟で不定形な知識(ベナー, 2004, p.178)であり、個人戦術に関する実践知のリアリティを提示したものであると考えられる。

本研究で開発した方法を用いて、国際レベルで活躍した元ハンドボール競技選手5名の個人戦術に関する実践知を提示した調査事例を考察した結果、開発した研究方法は、質的研究の科学性が保持でき、行為者の視点が保証できることが明らかになった。このことから、本研究で開発した方法は、個人戦術に関する実践知を提示するために有効であると判断できる。また、調査によって得られる語りの内容は、一流選手の持つ個人戦術に関する実践知を他の選手や指導者にも共感・共有できる情報として、また臨場感を持ってプレー場面をイメージできる情報として、さらには伝承可能な主観的な情報として指導実践現場に発信できる可能性を内包していると考えられる。

## 5. まとめ

本章では、はじめに、個人戦術に関する実践知の構造について検討するためにはどのように質的研究を適用したらよいのか検討した。次に、個人戦術に関する実践知を選手の達成力の向上に活かせるように提示するための方法を開発し、この方法を用いて、国際レベルで活躍した元ハンドボール競技選手5名を対象に、個人戦術に関する実践知の提示を試

みた。最後に、開発した方法の有効性について検討した。その結果、以下の2点が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知の構造について明らかにするには、個人戦術を客観化して対象としてとらえるのではなく、質的研究を用いて「行為者の視点」からとらえ直す必要がある。その手続きとしては、まず語りとして個別事例を提示し、次にその個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例に共通の構図を描き出すことが重要である。その際、妥当性と信頼性の2つの基準を用いて、質的研究の科学性を保證する必要がある。
- 2) 本研究で開発した個人戦術に関する実践知を提示するための具体的な方法、すなわち動きのコツを手がかりにした内省、語りによる<コツ>身体知と<カン>身体知の外化、調査者と対象者による語りの共同産出、語りの内容に関するメンバー・チェックといった手続きは、質的研究の科学性が保持でき、行為者の視点が保證できることから、個人戦術に関する実践知を提示するために有効である。

## 第4章 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造

本章では、卓越したハンドボール選手を対象に、個人戦術に関する実践知の個別事例を言語および図を用いて提示し、個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例に共通の構図、他の現場にも通じる普遍の構図を明示的に描き出すこと、すなわち事例を全体的にとらえた時の姿や形の共通性を提示することを通して、卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造について検討する。

### 1. 目的

金子（2002, p.272）は、「生命ある運動の意味構造を成り立たせるためには、オフェンスとディフェンスの織りなす有意義な行動を運動分析の対象にせざるをえない」と述べている。また、會田（1994）は、球技における戦術が、相手との相対的、対立的な関係の中で合目的的に発達すること、すなわち、攻撃がそれ相応の攻撃手段を持って防御を撃ちぬこうとし、防御が適切な対抗手段を実施していく中で発達することを示している。これらのことは、球技における戦術に関する研究では、個別の攻撃および防御戦術を形而上学的に研究するのではなく、攻撃と防御との、密接で相反する関係を考慮する必要があることを示していると考えられる。

球技における代表的な個人戦術に、ハンドボールのシュートおよびシュートの阻止がある（會田, 2006b）。シュート局面では、ゴールキーパーとシューターが対峙する。本章では、国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターを対象に、シュート局面における動きのコツに関する語りを質的に分析し、卓越した選手の個人戦術に関する実践知の構造について明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

#### (1) 対象者

対象者は、国際レベルで活躍し、現役を引退していたハンドボール競技選手 5 名であった。これらの対象者は、いずれも、本研究者が研究目的を達成するのにふさわしいと判断し、協力依頼したものである。現役時代のポジションは、ゴールキーパーが 2 名、コートプレイヤーが 3 名であった。それぞれの競技プロフィールは以下の通りであった。

#### ①対象者 1：橋本行弘 氏

##### a. 競技種目

ハンドボール，ゴールキーパー

##### b. 主な戦績

1997 年世界選手権大会ベスト 16

1997 年世界優秀選手の選考で 3 位にランクイン

2001 年ヨーロッパカップ優勝（TV グロースヴァルシュタット）

##### c. 競技歴

橋本氏は、高校卒業後、1984 年本田技研に入社と同時に全日本に入る。ソウルオリンピックに出場した後は、オリンピック出場から遠のき、所属チームの成績不振もあって低迷期にあった。引退も考えていた 30 歳の頃（1996 年）、2 年後に世界選手権が熊本で開催されることが決定し、強化のため全日本監督にオレ・オルソン氏（スウェーデン）が就任する。熊本世界選手権に向けて「自分の中で限界を作ってはいけない」「今の自分のキャリアを残しながら、何か新しい技術もほしい」とモチベーションが向上。世界 No.1 ゴールキーパーのマッツ・オルソン（スウェーデン）らとの合同練習で、レベルアップのヒントを得る。その後、テクニック、メンタル、フィジカルを総合的に強化し、熊本世界選手権では、ゴールキーパーとして世界的な評価を受ける。世界選手権後は、ドイツ・ブンデスリーガ（TV グロースヴァルシュタット）に移籍。公式国際試合出場 196 回は日本歴代 1 位。

#### ②対象者 2：ワン・タオ 氏

##### a. 競技種目

ハンドボール，ゴールキーパー（国籍：中華人民共和国）

##### b. 主な戦績

1988 年ソウルオリンピック 6 位

1990 年世界選手権大会 8 位

1996 年アトランタオリンピック 5 位

**c. 競技歴**

ワン氏は、18 歳で中国女子代表選手に選ばれ、レギュラー・ゴールキーパーとして 1988 年ソウル五輪、1990 年世界選手権に出場する。しかし、世界大会で十分な実力を発揮できず、スランプに陥る。1990 年の東ドイツ遠征で、相手ゴールキーパーの動きを見て、キーピング動作を始動するタイミングが分かり、開眼する。自ら考えたトレーニングを実践していく中で、独自のキーピングスタイルを身につけ、アジアナンバーワン・ゴールキーパーと評価されるようになる。1992 年日本リーグ・オムロンに移籍。1993 年左膝前十字靭帯断裂のけがを負うが、カムバックし、日本リーグではベストセブン 3 回、アトランタ五輪では 5 位入賞の成績を収める。

**③対象者 3：玉村健次 氏**

**a. 競技種目**

ハンドボール、右バックプレーヤー、左利き

**b. 主な戦績**

1988 年ソウルオリンピック出場

1990 年世界選手権大会出場

**c. 競技歴**

玉村氏は、大学卒業後 2 年間の保健体育教員生活を経て、1985 年に湧永製薬に入社。同年、ドイツブンデスリーガ（2 部）に 1 年間移籍する。ディフェンスとゴールキーパーとの連携の逆をつくブラインドシュートを覚え、大きな選手の中でも得点できるシューターとして成功を収める。帰国後、日本でのプレーに戸惑い伸び悩むが、所属する湧永製薬での練習を重ねて、ブラインドシュートを究める。日本リーグでは、1 試合最高得点アベレージ（8.5 点）と 1 試合最高得点（22 点）を記録し、日本を代表するサウスポーとして高い評価を受ける。日本リーグ最高殊勲選手賞 3 回は歴代 1 位。

**④対象者 4：西山 清 氏**

**a. 競技種目**

ハンドボール、左バックプレーヤー、右利き

**b. 主な戦績**

1980 年フランス世界学生選手権大会出場・得点ランキング 1 位

1982 年西ドイツ世界選手権大会出場

1984 年ロスアンゼルスオリンピック出場

1988 年ソウルオリンピック出場

### c. 競技歴

西山氏は、中学 2 年生からハンドボールを始め、高校時代はインターハイ準優勝、国体優勝の成績を収める。「引っぱりの西山」と呼ばれ、ゴール左隅に放つ切れのあるシュートを武器に、筑波大学時代は関東学生リーグにおいて 2 年生時から 3 年連続得点王に、フランスで開かれた世界学生選手権において得点王に、日新製鋼時代は日本リーグにおいて 1 年目に得点王に輝く。日本を代表するロングシューターとして高い評価を受ける。日本リーグ通算得点は 709 点（700 点突破は日本リーグ初）。

## ⑤対象者 5：堀田敬章 氏

### a. 競技種目

ハンドボール、右サイドプレイヤー、左利き

### b. 主な戦績

1994 年アジア大会出場

1995 年世界選手権大会出場

### c. 競技歴

堀田氏は高校 1 年からハンドボールを始める。171cm という身長ながら努力と工夫を重ね、高校・大学時代は、いずれも全国大会で活躍。大学卒業後、湧永製薬に入社。実業団に入って 3 年目、藤本コーチとの個人練習でシュートフォームを改造し、サイドシュートの動きのコツを獲得する。その後、日本を代表する右サイドプレイヤーに成長し、全日本代表にも選ばれ、全盛期を迎える。日本リーグでは第 15 回（1990 年度）および第 20 回（1995 年度）大会において最高シュート率賞を、第 20 回大会から 3 大会連続でベストセブンを受賞。

いずれの対象者にも、本研究の趣旨を事前に電話および文書にて十分に説明し、調査への協力を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問に対しても回答を拒否できることを伝え、調査内容の音声および VTR 記録、研究成果の実名での公開に関して了解を得た。

調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に、ラポール（桜井・小林，2005，pp.83-84）の形成，すなわち調査者と対象者とが相互を信頼し合い，安心して自由に対話ができる関係の形成に努めた。

## （2）インタビュー調査の内容と方法

調査内容は，現役時代に得意であった技や動きのコツ，動きのコツを獲得するまでのプロセス，動きのコツ獲得後の変化，動きのコツの伝達などであった（中込，2003）．動きのコツの同定を容易にするために，インタビュー調査の1-2週間前に，調査内容に対して自由記述形式で回答を求めるアンケート調査票（阿江，2002）を対象者に郵送し，現役時代を振りかえって記述して，返信してもらった．インタビュー調査時には，それを補助資料として用いた．

インタビューの場所は，対象者と調査者が1対1で対話できる静かな場所であり，主に，対象者の勤務先の応接室などであった．

インタビューの方法は，半構造化面接を用いた．インタビューの標準的な流れについては，さまざまなスポーツ種目を専門とする複数の研究者間で検討し，インタビューガイド（マニュアル）を作成した（中込，2003）．また，面接状況を想定した意見交換を行い，インタビュー調査の習熟をはかった．

インタビューの場では，調査者は，対象者の語りに敬意と好奇心を持って臨むこと，語りに対して先入観を持たずに共感する態度を持ち合わせることを心がけた（徳田，2004）．なお，調査者は，語りを単に聞いてまとめるという受動的立場をとらずに，むしろ，対象者の持っている動きのコツをより具体的な言葉で表現できるように積極的に関わるという立場をとった（桜井・小林，2005，p.185）．言葉で表現しにくい場合は，身体を使ってデモンストレーションしてもらった．このような調査者の態度と立場，調査者と対象者との関係は，結果として，インタビューという活動を通して調査者と対象者が共同的に語りを産み出すこととなった．

語り手と聞き手が対話的关系として，ともに物語の生成に関わる場合，語られる内容は聞き手の影響を受ける（やまだ，2000，p.23）．特に，対象の詳しい記述が必要である質的研究のインタビューでは，聞き手の現場感覚および生成的視点が重要である（無藤，2004）．実践知を聞き取る先行研究においては，聞き手が語り手と同様の経験をつんでいることが役立つと報告されている（桜井・小林，2005，p.264；西村，2001，p.218）．本研究におけ



る聞き手は、調査者本人であり、ハンドボールを専門とし、選手として全日本学生選手権大会4位（同大会優秀選手）、監督として全日本学生選手権準優勝の実績を持っていた。対象者の語りを深く理解し、語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持っていたと考えられる。

すべての発言はMDレコーダを用いて録音し、デモンストレーションはビデオカメラを用いて撮影した。調査は、2002年1月21日から2003年4月21日の間に行った。

### (3) 語りの作成とテキストの作成

まず、対象者ごとに、すべての発言内容を逐語録として文章におこした。次に、語りの意味内容を全体として十分理解できるまで逐語録を熟読した。続いて、語りの意味内容をくずさないように、獲得した動きのコツ、動きのコツ獲得のプロセス、動きのコツ獲得前後の変化、ジュニア期の指導への示唆の4つの項目にまとめた。動きを伴うデモンストレーションに関してはイラストにした。

語りの妥当性および信頼性を保証するためにメンバー・チェック（フリック, 2002, p.285）を行った。すなわち、調査内容のまとめとイラストを対象者に郵送し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認した。これらの作業を終えたものを語りの内容とした（會田 2002；會田, 2003；會田, 2004a；會田, 2004b；會田, 2004c）。

得られた語りの内容を精読し、シュート局面におけるゴールキーパーおよびシューターの個人戦術に関する実践知に関する記述を取り出し、対象者ごとに、テキストとして再構成した。基礎資料がテキストとして再構成された時に、語りの意味内容が恣意的に変換されていないかどうかを確認するために、博士の学位を有し、本研究に関わっていない2名の研究者に協力を求めた。この2名は、コーチング学を専門とし競技場面において球技の指導者として活躍している研究者と、スポーツ心理学を専門とし球技を専門としない研究者であった（表2）。これらの手続きによってテキストの妥当性と信頼性を高めた。

表2 テキスト作成協力者のプロフィール

氏名	学位	専門研究領域	専門スポーツ領域
S.K.	体育学博士	コーチング学	バスケットボール
M.H.	博士（人間科学）	スポーツ心理学	レスリング

#### (4) テクストの分析

本研究の調査内容は、対象者の過去の経験である。「経験は、過去の『その時』に感じたこと、あるいは知覚したと矛盾していたり、その時には全く気づかなかったこととして語られたりもする」（西村，2001，p.211）。それは、私たちが「一瞬ごとに変化する日々」の行動を構成し、秩序づけ、『経験』として組織化し、それを意味づけながら生きている」（やまだ，2000，p.5）からである。本研究では、変わらずに存在する正確な思い出や事実」に固執したり、記憶違いや忘却に苦心したりするのではなく（桜井・小林，2005，pp.54-55），やまだ（2000，p.5）や秋田ほか（2005，pp.196-197）に倣い、対象者の語りは、さまざまなゲーム状況を克服し個人戦術力を国際レベルにまで高めていった過程の中で組織化された経験の語りであり、意味づけられた行為の語りであるにとらえて分析を進めることとした。なお、分析にあたっては、個人戦術に関する既存の理論をできるだけ保留し、人間の運動感覚能力による形態発生を主体原理に基づいて解明しようとする（金子，2002，p.139）現象学的態度で臨んだ。

### 3. 結果

以下に、個人戦術に関する実践知に関するテキストを対象者ごとに示した。なお、テキスト中の（ ）は、調査者の補足を示す。

#### (1) 橋本行弘 氏（ゴールキーパー）

全日本チームがスウェーデンで合宿した時に、スウェーデン代表のゴールキーパーにキーピングを教わったんです。彼は「ボールが手から離れる瞬間まで、ボールから目を離すな。シューターがキーパーをだます仕草につられて動いてはだめだ」と強調しました。彼の言うキーピングを実践しようとしたら、トラッキング（左右の脚で地面を細かくたたきようにステップし、シュートに対して準備するフットワーク）とスライディング（ハードルを越えるような姿勢でかかとを滑らせて下のエリアを捕りにいくキーピング）は必須なんです。

キーパーは、シューターの持つボールと左右のゴールポストを結ぶ線の真ん中に、絶えず立たないといけません。ボールが動いている以上、自分が止まることは絶対にありませ

ん。常に正確な位置に立つために、数センチ、何ミリの差を意識してトラッキングを使います。また、トラッキングをすると、シュートに対する次の動作に早く出られます。足が平行に横にそろっている状態だと、1歩出そうと思うと、ふっと1回腰を沈めてからしか出せないんです。動きのコツとしては、上半身がぶれないように、へそを中心として、前かがみになりすぎないようにして、体の中心を自分の中に持って、骨盤の位置を絶対に動かさないことですね。かかとがついてしまわないように、母指球に力を持ちながら動いていきます。ただ、それは、そういう構えをしようというのではなくて、ボールを追って、相手を観察しながら、自分の状態を動かしていくと、自然とそういうところに落ち着きます。世界選手権前のドイツ遠征で、トラッキングを意識しすぎて失敗したことがあります。ずっとトラッキングをやっていて、ボールが来る時には、(疲れて)フーッと入られてしまったんです。

スライディングすると、下のコースを(体)全部で捕りにいけて、大きな面が作れるし、バランスもいいんです。スライディングすることによって、ボールを捕りにいくんじゃなくて、飛んでくるコースに自分が当たりにいくというかたちになり、体全部を持っていくという考え方に変わっていきます。そうすると、ボールを恐がらない、なおかつボールに向かっていく攻撃的なキーピングに変わっていきます。動きのコツとしては、かかとが遠くに出ていくような状態にすること、その下半身に上体全部がついていくことです。自分がそのエリアに飛び込んでいくというかたちを作ると、自然とスライディングになっていきます。

## (2) ワン・タオ 氏 (ゴールキーパー)

ハンドボールのシュートはスピードがあるので、飛んできてから反応すると遅くなり、シュートコースが分かっても追いつきません。でも、動くタイミングが早過ぎると、キーパーの動きをシューターに読まれて、逆に撃たれてしまいます。逆に撃たれないで、しかも遅れないタイミングを見極めることが動きのコツだと思います。

フリースローライン (ゴールから9メートル) より外からのロングシュートは、距離があるので、キーピング動作にスピードがあれば、撃たれてから反応しても間に合います。ロングシュートでは、キーピング動作のスピードが重要です。シュートを捕りにいく時に、普通はいったん沈み込んでからジャンプしますが、キーピング動作を短時間で行うために、私は沈み込む反動動作をほとんど使いませんでした。そこでは、太ももの筋肉ではなく、

膝から下の筋肉で瞬間的にスピードを出すことを常に心がけていました。

サイドシュートに対する構えでは、ほとんどの人はロングシュートと同じように、左右の脚に均等に重心をかけて立ちますが、私の場合は重心を軸脚の腰あたりに置きます。シューターがゴールエリアに飛び込んできた時に、自分が近目（ニアポスト）に立っていて、遠目（ファーポスト）のシュートを捕りにいく場合には、重心は軸脚（ニアポスト側の脚）の腰にずっと置いておくんです。そうすると、ボールを捕りにいく脚（ファーポスト側の脚）が自由になります。上段のコースも、中段のコースも素早く動けます。股下に撃たれるシュートにも完全に対応できます。

動きのコツをつかむまでは、サイドシュートとロングシュートは怖かったです。捕れなくてもあまり責任のないポストシュートとノーマークシュートの方が好きでした。捕りたいという気持ちが強くて、緊張しすぎて、動きが硬くなって、動き始めるタイミングをつかめませんでした。

### **（3）玉村健次 氏（右バックプレーヤー、左利き）**

利き手側に移動しながらジャンプシュートを撃つ時、普通の人は最後の一步をキーパーに向かって踏み出してジャンプします。でも僕の場合は、右足（ジャンプの踏み切り脚）のつま先を、味方のセンターや左 45 度（左バックプレーヤー）に向けて踏み出していくんです。キーパーに対して真横を向く感じのジャンプになります（図 28）。その体勢からシュートを撃つんです。このようにジャンプすると、バックスイングの時に肩が入って、自然とボールが隠れます。キーパーはいつもボールに反応しますから、シュートが撃たれるまでボールが見えなかったら「どこからボールが来るのかな」と迷いますよね。

ディフェンスが引っぱり（左利きの玉村氏から見てゴール右側）をつぶしている時には、同じフォームから最後の手首だけを使い分けて、流し（ゴール左側）も引っぱりも撃ち分けます。流しに撃つか引っぱりに撃つか、上に撃つか下に撃つかは、最初から決めておくのではなく、腕を振っているスイングの最中にキーパーを見て決めます。ギリギリまで判断を遅らせて、キーパーが先に流しのコースに動いているんだったら引っぱりに、キーパーが動いていなくてシュートスピードについてこれない時には流しに撃ちます。でも、どの瞬間に決めるのかと聞かれても口では言えません。僕はジャンプ力があったので、キーパーを最後まで見られたのかもしれない。

動きのコツをつかむ前は、自分のシュートの修正ばかりしていました。自分がシュート

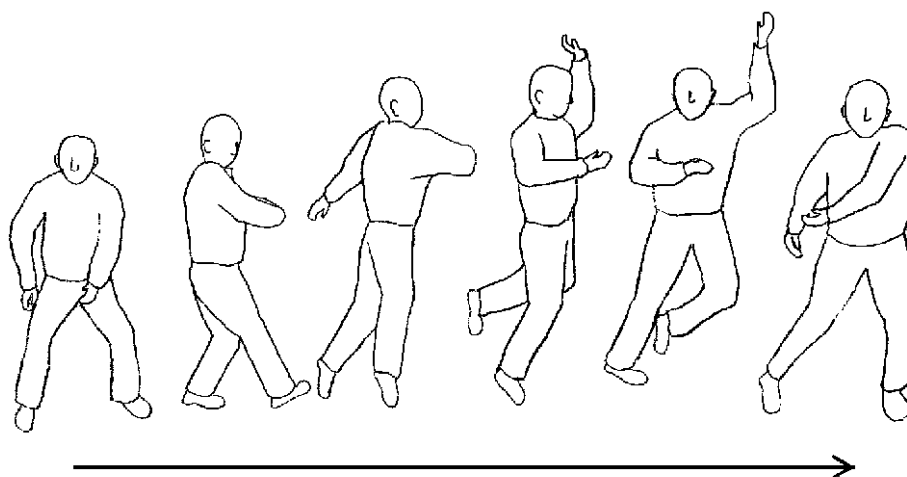


図 28 ゴールキーパーに対して真横を向いて踏み切ったジャンプシュート

を外したら、キーパーとの駆け引きを意識するんじゃなくて、自分の動きがおかしいなあと思っていたんです。

#### (4) 西山 清 氏（左バックプレーヤー、右利き）

キーパーには、「西山は引っぱり（右利きの西山氏から見てゴール左側）だ」とずっと待たれていました。それでも入れるんです。でも、流し（ゴール右側）も引っぱりも撃てるようなフォームで入らないと、キーパーに捕られてしまいます。そのための腕の振りは、流しの上から引っぱりの下へ持っていけるスリークオーターです。引っぱりを撃てるし、その途中で流しも撃てるフォームです。身体がゴールを向いていない時には、ボールに力がのりません。でも、シュートを撃つ時に肩が開けば（身体がゴールを向けば）引っぱりと、コースがキーパーに分かってしまいます。左肩の後ろに落とすというイメージで練習をしていたら、肩を全く開かない状態で引っぱりにも流しにも強いシュートが撃てるようになりました。

走りこみ方のバリエーションとしては、（通常の方法の他に）ボールをキャッチしてから1回左足でグッと左側にステップして「アウトにいくぞ」と見せてから、利き手側に移動してシュートを撃つものもありました。利き手と逆側へ切り返してジャンプシュートを撃つステップの使い方も持っていました。まず右斜め前の方向に走りながらディフェンスの正面に入って、ディフェンスが守ろうと早めに位置をとった瞬間に、右脚で左側に方向変

換して、すぐに左脚でジャンプしてシュートするんです。ここで重要なのは、踏み切り脚の1歩前の右脚です。ガッと踏み込んで逆方向に切り返す力強さが必要です。利き手側に移動したシュートが決まっていると、このプレーが効きました。キーパーも予測の逆をつかれて、体勢が崩れているので、顔の横とか、引っぱりの上がよく入りました。

#### (5) 堀田敬章 氏 (右サイドプレーヤー, 左利き)

サイドシュートで (ゴールエリアに飛び込む時に)、ボールを (下から) 後ろに回して、ディフェンスをかわしてジャンプしながら、肩の入った右肩にキーパーの位置を合わせさせます。(ボールを持っている左) 腕を上げて、肩より高い位置にボールを持って行って、キーパーの体を1回伸ばします。腰のあたりまで腕を下ろしてサイドハンドスローに持っていき、腕を遠まわしさせて、腕をいっぱいまで伸ばして、キーパーの脇横、ゴールの中段をねらいながら、そこから手首でボールを真上にカツンと上げます。手首を上にはひねってしゃくる感じです (図 29)。ボールを離す直前までキーパーを見ていて、腕のモーションに対して、キーパーが手を下げるのと脚を上げるのが遅い時には、中段を撃ち抜きます。また、キーパーの脚が上がるのが早ければ、手首を下にはひねって股下に撃ちます。それはキーパーの体勢を見て変えていました。ゴールエリアに跳び込んで、キーパーがわりと早く遠目 (ファーポスト) に動いているのが見えたら、ボールを頭の上からひねって、近目 (ニアポスト) のクイックがよく入りました。それでキーパーが迷っていました。

実業団チームに入って、最初の3年間くらいは全くダメで、キーパーの捕り方に関係なしに、ただ低めに突っ込んで入って、キーパーの体勢を下に崩して、決め撃ち (あらかじめ決めた動きで決めたコースに撃つシュート) でしゃくりを撃っていました。それが読まれたらキーパーが手を下げなくなり、試合に使ってもらってゴールしても「たまたま入っちゃった」というような感じで、全く自信がありませんでした。(動きのコツを獲得した後は) シュートを撃つ瞬間、キーパーの動きがスローモーションのようによく見えました。ボールを離す最後の瞬間までキーパーを見ているけれども、撃つところを決めてはいません。こういう風に入って、こうやって撃ってやろうと決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まるくらい調子よかった時もありました。

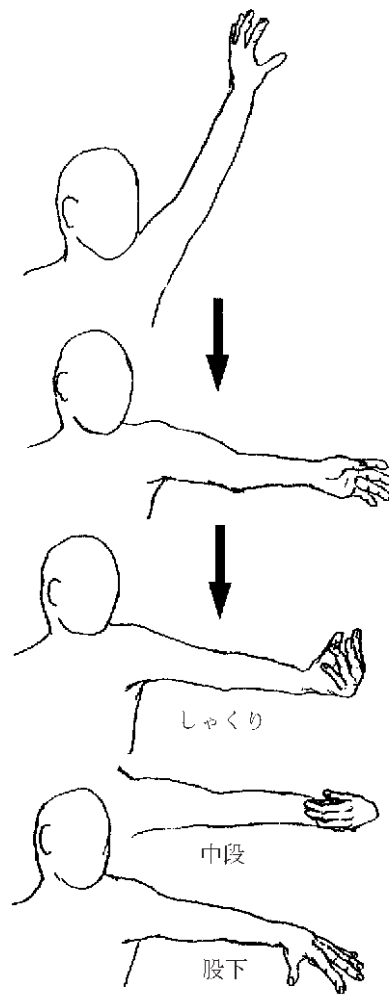


図 29 リリースにおける手首の使い方

#### 4. 考察

##### (1) 個人戦術を検討する最小単位

中川（1984）は、プレー実施に先立つ知覚・認知的な働きを状況判断ととらえ、人間を一種の情報システムとみなすアプローチにしたがい、状況判断の概念について検討している。そこでは、状況判断には、外的ゲーム状況に対する選択的注意、ゲームの状況の認知、ゲーム状況の予測、プレーに関する決定の4つの過程があると仮定している。この枠組み

は球技における戦術行為の研究に広く適応されている。この枠組みにしたがえば、堀田氏のしゃくりのシュートは、まずゴールキーパーの腕と脚の動きに選択的に注意を向け、ゴールキーパーの腕が下がるという状況を認知し、このままの状況が進行すればゴール上へのシュートコースがあくと状況を予測し、手首を上にはねり上げるしゃくりのシュートを選択し、実行した行為ととらえられる。この場合、球技における個人戦術は、一方向的で直線的な情報処理過程と、その結果として導かれた行為の実行としてとらえられ、ひとりの選手が個人戦術の最小単位となる。

しかし、競技レベルが高く、競技力が拮抗している場面では、相手の攻撃および防御戦術に対して有効な防御および攻撃戦術を選択・実行することが要求される（會田, 2006a）。例えば、シュート場面では、シューターと同様にゴールキーパーも、シューターの動きを手がかりに戦術的思考力を働かせ、シュートを阻止する行為を選択し、実行している。シューターはゴールキーパーを見てプレーを選択し、実行する主体的・能動的な立場であると同時に、見られて対応される客体的・受動的な立場にもなるのである。堀田氏のしゃくりのシュートは、ゴールキーパーとの関係の中でとらえ直すと、右肩を入れたジャンプ動作がゴールキーパーに位置どりと構えの変化を迫り、それに対するゴールキーパーの対応が腕を遠まわしさせるスイング動作を導き、そのスイング動作がゴールキーパーにミート動作を迫り、そのミート動作に対して手首を上にはねり上げてリリースした行為ととらえられる。シューターはひとりでプレーを完結できる立場にはなく、シューターの戦術的意図をゴールキーパーに先読みしてもらい、対応してもらって、はじめてプレーが成立する。また、「仮象行為（見せかけの運動）は、あたかもそうであるかのように見せかける意図を持った運動行為であり、見せかける運動を意図的に行う人と、それを見て理解する人との関係系のなかでのみ意味を持つ」（金子, 2002, p.297）ことを考え合わせると、個人戦術に関する実践知を明らかにし、実践現場に有用な知見を提供することを目指すならば、個人戦術の最小単位を対峙する選手間の関係ととらえ、そこから各選手の行為の意味を解釈し直す必要があると考えられる。

なお、個人戦術の最小単位を対峙する選手間の関係にあるととらえた場合、情報処理的アプローチの有用性は小さくなる。感覚的な刺激が提示されてから反応が生起するまでの時間は反応時間と言われる（中川, 2006）。反応時間には、中枢での刺激認知、運動プログラムの作成、刺激提示から筋放電出現までの時間、筋放電出現から実際の運動開始までの時間が含まれ、陸上競技における 100 メートル走のスタートで見られる単純反応より、球



技における相手のプレーへの対応で見られる選択反応の方が、処理すべき情報量が多くなるために反応時間は長くなる（小木曾，2006）．ハンドボールのジャンプシュートの滞空時間は 0.38－0.42 秒である（大西ほか，1983，p.56）．シューターはこの時間の中でゴールキーパーの動作に適切に対応しなければならない．光刺激（視覚）に対する選択反応時間は、利き手では 0.37 秒（足利ほか，1989），足関節では 0.26－0.28 秒（衣笠ほか，1986）と報告されている．これらのことは、情報处理的アプローチに従えば、ハンドボールのジャンプシュートでは、シューターはゴールキーパーの一連のキーピング動作に対して 1 回は適切にプレーの選択・実行ができるが、選択・実行したプレーにゴールキーパーが対応した場合、その以上の選択反応ができないことを示している．すなわち、ゴールキーパーに対応することと対応させることを対話のように繰り返す堀田氏のシュートは、情報处理的アプローチでは説明できないのである．

## （2）個人戦術における志向

### ①シュートの最終局面における志向の対峙

シュートの最終局面、すなわち、ゴールキーパーのミート動作およびシューターのリリース動作に着目すると、ゴールキーパーは「ボールが手から離れる瞬間まで、ボールから目を離すな…キーパーをだます仕草につられて動いてはだめ」（橋本氏）、「逆 撃たれないで、しかも遅れないタイミングを見極める」（ワン氏）と語っている．一方、シューターは「腕を振っているスイングの最中にキーパーを見て決めます」（玉村氏）、「ボールを離す直前までキーパーを見ていて、…キーパーの体勢を見て変えていました」（堀田氏）と語っている．これらのことは、シュートの最終局面では、ゴールキーパーもシューターも、まるで「あと出しジャンケン」のように、相手の動きに対するリアクションの動きを志向していることを示している．つまり、戦術行為では相手との相対的な関係が考慮されなければならない（會田，1994）のである．ゴールキーパーとシューターのそれぞれの運動経過それ自体の中に、ミート動作やリリース動作を開始する適切なタイミングが存在しているわけではない．「相手より先に動かないでシュートを捕る／決める」という個人戦術は、視覚によって得られた相手の運動経過の裏側にある戦術的意図を探り、相手の行為に対して有効な行為で反応することであると考えられる．

本研究で得られた事例は、ハンドボールにおけるゴールキーピングやシュートを標準化するものではない．なぜならば、シュート局面ではさまざまな有効なプレーが存在するか

らである。しかし、対象者の語りから浮き彫りになるゴールキーピングやシュートの志向は、シュート局面における個人戦術の中核であり、対象者と同じ身体的、体力的、技術的条件を持たない選手にとっても、有用な知見であると考えられる。

## ②ゴールキーパーの志向

シュートに対する準備局面において、ゴールキーパーは一般に、シューターがボールをリリースするポイントと左右のゴールポストとを結ぶ2本の直線で作られる角度の二等分線上で構える。シュートがリリースされる瞬間に、この二等分線上に立てた場合、いずれのコースにシュートが放たれても、最も短い移動距離でミート動作を行うことができるからである。これによって、ボールへのミートの瞬間から時間的に逆算すると、ミート動作を始動する時機を最も遅らせることができる。しかし、この二等分線上に立てなかった場合には、左右どちらかのシュートコースが広がってしまい、広いコースにシュートが放たれば、より大きなミート動作を、より早い時機に始動しなければならない。橋本氏の習得した動き、すなわち、ミート動作の始動前に行うトラッキングフットワークにおいて、「数センチ、何ミリの差を意識して」位置どりを微調整し、ミート動作に早く出られるように、「上半身がぶれない」「骨盤の位置を絶対に動かさない」「母指球に力を持ちながら」構えの姿勢を保持する動きは、ゴールキーピングの準備局面における課題を最も合目的に解決する動きであったと考えられる。

また、ゴールキーピングの主要局面では、ミート動作を爆発的、瞬発的に短時間で行えた場合、ミート動作を始動する時機を遅らせることができる。橋本氏の「ボールに向かっていく攻撃的なキーピング」意識、ワン氏のボールにミートする脚をすばやく自由に動かせるように、重心を軸足の腰に置く構えの姿勢、膝から下の筋肉で瞬間的にスピードを出し、沈み込まないでジャンプする動きは、いずれもミート動作にかかる時間を短縮させる動きであったと考えられる。

ゴールキーパーは、ミート動作前の準備局面においては、正確に位置をとることを志向し、ミート動作を行う主要局面においては、瞬発的にミート動作を行うことを志向することが、達成力を高めるために重要であると考えられる。

## ③シューターの志向

シュートの準備局面である助走・踏み切り動作において、玉村氏は「つま先を、味方の

センターや左 45 度に向けて踏み出し…キーパーに対して真横を向く感じのジャンプ」をしている。これは、戦術的には、サイドライン方向に向かって大きくジャンプすることで、ボールのリリースポイントを移動させ、ゴールキーパーに位置どりを常に修正し続けなければならない状況を与えていることを意味する。また、この動きは、「自然とボールが隠れ」、ゴールキーパーにリリースポイントを予測させにくくすることにも繋がっている。西山氏は「右脚で左側に方向変換して、すぐに左脚でジャンプ」することで、堀田氏は「右肩にキーパーの位置を合わせさせ」、その後「腕を下ろしてサイドハンドスローに持っていき、腕を遠まわし」させることで、いずれも瞬間的にリリースポイントを変化させ、ゴールキーパーの位置どりを困難にさせている。

また、シュートの主要局面におけるスイング動作では、「同じフォームから最後の手首だけを使い分けて、流しも引っぱりも撃ち分けます」（玉村氏）、「流しも引っぱりも撃てるようなフォームで…左肩の後ろに落とすというイメージ」（西山氏）、「ゴールの中段をねらいながら…手首を上にはねってしゃくる…手首を下にはねって股下に撃ちます」（堀田氏）と語っていた。いずれのシューターも、スイング動作の途中までは同一の動きを行い、そこからシュートコースを撃ち分けていた。これらの動きによって、ゴールキーパーにシュートコースを予測できないようにさせたり、シュートコースを早い時機に予測させてミート動作の決断を早めさせ、「あと出しジャンケン」できる条件を整えている。

シューターは、スイング動作前の準備局面においては、ゴールキーパーの正しい位置どりを困難にさせることを志向し、スイングおよびリリース動作を行う主要局面においては、自らの動作スピードを速めることよりも、相手の判断を迷わせたり、誤らせることで、相対的に自らのリリース動作の決断時機を遅らせることを志向することが、達成力を高めるために重要であると考えられる。

### **(3) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造**

ボールゲームに特徴的に表れるフェイントは、フェイク（注 6）とそれに引き続く行動の統一した戦術行為であり、これによって時間的・空間的に不利な状態に相手を追い込むことをねらって、ゲーム状況が解決される（Döbler, 1989, S.191）。すなわち、フェイントとは、相手に自分の動きを予測させてそれを裏切り、十分に有利な状況を作る動きなのである（大築, 2006）。「キーパーが先に流しのコースに動いているんだったら引っぱりに」という戦術的意図を持っていた玉村氏の引っぱりのシュートは、自らのスイング動作にゴ

ールキーパーを先読みさせて、その逆をつく行為であり、堀田氏のしゃくりおよび股下へのシュートも、中段を撃ち抜くスイング動作にゴールキーパーを先読みさせて、引き続くリリース動作で、その逆をつく行為であると解釈できそうではある。しかし、一見、フェイントと解釈できそうな、これらのシュートは「相手をだまそう（予測させてそれを裏切ろう）」と意図した行為ではない。それらは単に、ゴールキーパーの動きに対応した行為であり、行為を振り返った時に、リリース動作に先立ち行われたスイング動作が、相手をだますフェイクと意味づけられたととらえなければならない。つまり、フェイントをしたのではなく、結果としてフェイントになったのである。卓越した選手がゲーム状況を有利にするために行っているさまざまな動きは、それ自体が固有の意味を持つのではなく、その動きの前に行った動き、あるいは引き続いて行った動きとの関連の中ではじめて意味を持つように構成されると考えられる。フェイントをフェイクとそれに引き続く主動作が作り出す、まとまりのある行為ととらえてしまうと、相手に自らの動きの意図を早い時機に読みとられ、適切に対応される危険性が大きくなってしまう。このことは、堀田氏が決め撃ちでしゃくりを撃っていた時、すなわち、フェイントをしにいった時には、ゲーム状況をうまく解決できなかったことを考えれば、より明確に理解できよう。

ところで、対象者は、個人戦術が習熟する前のゲーム状況を振り返り、「トラッキングを意識しすぎて失敗した」（橋本氏）、「捕りたいという気持ちが強くて…動き始めるタイミングをつかめませんでした」（ワン氏）、「動きのコツをつかむ前は…自分の動きがおかしいなあと思っていた」（玉村氏）、「~~決~~ 撃ちでしゃくりを撃っていました…ゴールしても…全く自信がありませんでした」（堀田氏）と語っていた。これらの語りは、卓越した選手の個人戦術の構造を明らかにする上で、大きな意味を持つと考えられる。

ショーン（2001）は、現実の問題に対処する専門家とは、行為の中の知、行為の中の省察、状況との対話といった活動過程における知と省察を武器に問題を解決する実践者（反省的实践者）であると述べている。これは、専門的な知識や科学的技術を獲得し、それらを合理的に適応して問題を解決する実践者（技術的熟達者）からのパラダイムシフトであり、この新しい専門家像は複雑で複合的な実践的問題の解決に携わる看護学（注7）、教育学（注8）の領域において広く認知されてきている。

鯨岡（1999, pp.128-129）は、相互主体的関係、すなわち両者の両義的なあり方が繋がった関係は、従来の外部的な行動相互作用という見方ではとらえきれないため、間主観的な関係としてとらえる必要があることを指摘している。間主観的な把握は相手を志向

する時に成立し、その時には相手の意図がおのずから通底してくるよう感じられ（鯨岡 1999, p.129）、相手の主観内容が自らの主観内容を規定する（鯨岡, 1999, p.12）と述べている。

金子は、ボールゲームにおける戦術的課題として、相手の運動メロディーを先読みのにとらえること（金子, 2002, p.284）を挙げ、さらに戦術的課題の解決には、状況の意味構造を読み切り、間髪を入れず、即興に移せる能力（金子, 2002, p.506）が不可欠であることを指摘している。

ショーン、鯨岡、金子の見解は、いずれも、行為を観察する第三者の立場ではなく、行為をしている最中の選手の立場に立っている。この立場から、個人戦術に習熟する以前の対象者の語りを考察すれば、行為の中で知を働かせることができずに行為を変化させられなかったために、志向が相手との関係に向かず間主観的に相手の意図を感じることができなかったために、状況の意味構造が読めなかったために、ゲーム状況がうまく解決できなかったことが分かる。

また、2名のシューターは、「どの瞬間に決めるのかと聞かれても口では言えません」（玉村氏）、「こうやって撃ってやろうと決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まるくらい調子よかった時もありました」（堀田氏）と語っていた。これらの語りは、実践知においては言葉にならない暗黙知（ポラニー, 1980）（注9）が存在することを示唆している。

本研究で行ってきたこれまでの考察を総合すると、卓越した選手における個人戦術とは、知覚・認知的な情報処理によって選択した動きを実行する行為ではなく、対峙する選手と相互主体的関係を結び、間主観的に相手と「対話」しながら、行為の中で知を働かせ、その行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みであると理解できる。

## 5. 要約

本章の目的は、卓越した選手の個人戦術に関する実践知の構造を明らかにすることであった。この目的を達成するために、国際レベルで活躍したハンドボールのゴールキーパー2名とシューター3名を対象に、インタビュー調査を行った。シュート局面における動きのコツに関する語りを質的に分析した結果、以下の知見が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知を明らかにする場合、個人戦術の最小単位を対峙する選手間の関係ととらえ、そこから各選手の行為を回帰的に考察することによって実践現場に有用な知見を導くことができる。
- 2) シュートの最終局面では、ゲーム状況を有利に解決するために、ゴールキーパーもシューターも、相手選手の行為に対するリアクションの行為を志向している。また、それぞれの動きはその志向を合目的的に解決するものである。
- 3) 卓越した選手における個人戦術とは、知覚・認知的な情報処理によって選択した動きを実行する行為ではなく、対峙する選手と相互主体的関係を結び、間主観的に相手選手と「対話」しながら、行為の中で知を働かせ、その行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みである。

## 第5章 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程に関する事例研究

第4章では、卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造を明らかにした。得られた知見は、コーチングの実践現場で求められている、競技者の主観的経験（Dale, 1996）、直感的な知の内容（ヘベル・リッペンズ, 2001）、主観的な情報（阿江, 1999）を構造化したものであり、今後の選手養成における目標像となる。では、その目標像に近づくために、選手はどのようなトレーニングを、指導者はどのようなコーチングを行うべきなのであろうか。本章では、その手がかりを探るために、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手を対象に、卓越した個人戦術に関する実践知の獲得過程について、「行為者の視点」を持って事例的に明らかにし、個人戦術力の指導に寄与する知見を得る。

### 1. 目的

マイネル（1983, pp.374-419）は、運動学習を、逆戻りすることのない3段階で説明している。それは、初めて運動ができ、基本的な運動経過を、あるまとまりを持って実施できる粗形態の段階、動きを繰り返し行うことにより、動きに修正が加わり、安定し、洗練された運動になる精形態の段階、変化する状況に、どのように対応するのかを直感しながら、同時に何のためらいもなく自由自在に動ける自動化の段階である（三木, 2005, pp.153-158）。このことは、長期的な視点を持って選手の指導をしたり、選手の運動経験、知識、年齢に相応した指導をしたりするには、指導者は段階ごとの学習のねらいや課題を明確にする必要があることを示している。

卓越した選手の実践知は、さまざまな習練を積んで初めて達成できる最高の運動感覚能力を理解するための手がかりになる（金子, 2002, pp.512-513）。しかし、それは、粗形態および精形態の学習段階の選手にとっては、レベルが高すぎて「参考にならないコツ」になったり、習熟を妨げる「早すぎるコツ」になったりして、育成段階の選手を混乱させる情報にもなりかねない。卓越した選手の実践知をそれぞれの習熟段階に適応させ、より充実した指導を行うには、卓越した選手が実践知を獲得したプロセスについても十分検討する必要がある。

量的研究では、多数の標本を収集して得たデータの共通項を事実として提示し、その事実が母集団に共有されるものであることを統計的に表現することで、一般性、普遍性を示している（鯨岡，2005，pp.44-45）。このような立場をとると、具体個別のもつ生き生きとした様相は「一般化できないから意味がない」（鯨岡，2005，pp.39-40）と価値づけられ、一流競技選手が持っているような共通項から遠いデータは「誤差」として切り捨てられる（鯨岡，2005，pp.44-45）。

一方、質的研究では、具体的な事例が重要であり、事例が少ないからという理由だけで、研究の善し悪しが決まるわけではない（やまだ，2004）。Hycner（1985）は「ひとりのユニークな個人の経験を研究する過程のなかで、われわれは人間一般の現象学について多くのことを学ぶことができる」と述べている。また、西條（2008，p.103）は、「一事例の研究であっても、そこから得られた視点（構造）を通して現象の見え方が変わるような、よりよい実践につながる構造（モデル）を構成することができれば、それは『視点提示型研究』として成功」と述べている。鯨岡（2005，pp.39-40）は、「事象への密着性や情景の表象化可能性といった基準，あるいは事象の意味構造そのものに迫っているかという基準を設ければ、…事例研究の方の価値は高い」と述べている。これらはいずれも個別事例を対象とした事例研究の意義を表している。

事例研究は、特定の事例から出発し、その事例に寄り添いながら、しかしそこにとどまることなく、研究者の視点を活かした現象の記述やモデル構成などを行う方法である（杉村，2004）。対象の数が少ないために、明らかにしたい現象について多くの項目をとりあげ、深く調べることができ、対象が生きて動いているさまを、状況から切り離すことなく、時間を追ってとらえることができる（杉村，2004）。

本章では、国際レベルで活躍したハンドボール選手1名を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、動きのコツの獲得過程に関する語りを質的に検討し、実践知の獲得過程に関して事例的に検討するとともに、習熟段階に応じた個人戦術の指導に役立つ基礎的知見を導くことを目的とする。

## 2. 本研究の限界と適用範囲

本章における研究対象者は、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手である。厳



密に言えば「結果」はインタビューされた参加者にしか当てはまらない (Hycner, 1985). また, 量的研究で見られる従来の一般化の枠組によれば, 母集団への一般化はできない (西條, 2007, p.21). したがって, 本章で得られる知見は, 「すべての選手に当てはまる」という意味での普遍性を持たないという限界を持つ.

しかし, 質的研究の立場に立てば, 事例の特殊性・個別性に焦点を当てた個性記述を通して, 「事例から理論への一般化」(杉村, 2004) を目指すことができる. そこで本章では, 量的研究で見られるような, 研究の手続きに関する一般性, 普遍性の要請に応えるという立場をとらない. むしろ, 提供される研究結果が他の研究者や実践者に受容・納得され, 研究結果のリアリティを保証するという意味での一般性を問題にして, 普遍性というよりは公共性という意味での一般性の要請に応えること (鯨岡, 2005, p.41) を目指す.

科学の知は, 主として仮説と演繹の推論と実験の反復から成り立っているのに対して, 臨床の知は, 直観と経験と類推の積み重ねから成り立っている (中村, 1992, pp.135-136). 事象が直接似ている度合いが高く, 事象の構造が似ている場合, 事例研究で得られる構造は, 類推によって転用可能性が高くなる (西條, 2008, pp.102-109). これらのことは, 本章で導かれる結論は, すべての選手に当てはまる実践知の獲得過程の構造を示せるわけではないが, 事例に関する情報を的確な類推が可能になるように明示することを通して, コーチングの実践現場において有用な知見となることを意味している. つまり, 本章で明らかになる知見は, 「目の前の選手にも当てはまるかもしれない」と指導者が類推でき, 選手の理解に役立てることが可能になるのである.

### 3. 方法

#### (1) 対象者

本章の目的を達成するために, 堀田敬章氏 (ハンドボール, 右サイドプレイヤー, 左利き) を考察対象者として依頼した. 堀田氏は, 国際レベルで活躍し, 現在は, 現役を引退している元ハンドボール競技選手である. 対象者の競技プロフィールは, 第 4 章 2.方法 p.88 に示した通りである. 対象者には, 研究の趣旨を十分に説明し, 調査への協力および研究成果の実名での公開の了解を得た.

## (2) インタビュー調査の内容と方法

調査内容は、現役時代に得意であった技や動きのコツ、動きのコツを獲得するまでのプロセス、動きのコツ獲得後の変化などであった（中込，2003）。動きのコツの同定を容易にするために、インタビュー調査の2週間前に、調査内容に対して自由記述形式で回答を求めるアンケート調査票（阿江，2002）を対象者に郵送し、現役時代を振りかえって記述して返信してもらった。インタビュー調査時には、それを補助資料として用いた。インタビューは、調査者本人が行った。すべての発言はMDレコーダを用いて録音し、デモンストレーションはビデオカメラを用いて撮影した。調査は、2002年1月21日に行った。

## (3) 分析方法

インタビュー調査のVTR記録から、すべての発言内容を文章におこし、それを、獲得した動きのコツ、動きのコツ獲得のプロセス、動きのコツ獲得前後の変化、ジュニア期の指導への示唆の4つの項目にまとめ直した。また、身体を使ったデモンストレーションをイラストにした。調査内容のまとめとイラストを対象者に郵送し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認した（フリック，2002，p.285）。これらの作業を終えたものを、研究の基礎資料とした（會田，2002）。

本研究では、卓越したスポーツ選手における実践知の獲得過程を事例的に明らかにするために、得られた基礎資料を、動きのコツ獲得のプロセスと動きのコツ獲得前後の変化に着目してテキストとして再構成した。

テキストの分析は、2名の研究者で行った。このうち1名は調査者本人であり、もう1名は、球技を専門とし、競技場面において選手および指導者としての活動経験を持つ研究者（p.90 表2のS.K.氏）である。これによって、テキストの分析は、対象者の語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持って行われたことが保証できると考えられる。

## 4. 結果

以下に、堀田氏が獲得した動きのコツと、動きのコツの獲得過程に関するテキストを示した。なお、テキスト中の（ ）は、本研究者の補足を示す。

## (1) 獲得した動きのコツ

(このシュートは) キーパーの手や脚を見て、ボールを放す瞬間に手首をひねり、シュートコースを撃ち分けるプレーです。このシュートでは、まず、腕を上げて、肩より高い位置にボールを持って行って、キーパーの体を1回伸ばさせます。腰のあたりまで腕を下ろしてサイドハンドスローに持っていき、キーパーの脇横、ゴールの中段をねらいながら、そこから手首を上にはひねって撃つ(しゃくる)というような感じです(図 30)。サイドハンドに腕を落として、キーパーの脇横(ゴール中段)をねらいにいて、ボールを放す直前までキーパーを見ていて、腕のモーションに対して、キーパーが手を下げるのと脚を上げるのが遅い時(中段を止めに来るのが遅い時)には、中段を撃ち抜いてしまいます。また、キーパーの脚が上がるのが早ければ、手首を下にはひねって股下に撃ちます。それはキーパーの体勢を見て変えていて、それができた時はもう、ほとんど撃ったら入るような感じでした。

## (2) 動きのコツの獲得過程

高校の先生にシュートでボールを放す時に、手首を変化させなさいと言われました。先生は腕を使って見本を示すことは全然しませんでした。口で言っただけなので、最初はイメージが湧きませんでした。野球のカーブやシュートみたいな感覚だろうと思っていました。イメージをつかもうと1つ上の先輩にやってもらったりしましたが、ボヤーとしか分からなかったし、練習しても、何のきっかけもありませんでした。

手首の変化が初めてできたのは、サイドシュートでのしゃくりです。そのプレーは1年生の終わりに、練習試合で突然できたんです。先生に言われてから半年ぐらいは経っていると思います。3月の選抜の全国大会が終わると、いろいろなチームが名南工業に集まって練習試合をするんです。ずっと試合ばかりのきつい合宿でした。左利きなのに、選抜までは左サイド(通常、右利き選手のポジション)をやっていて、選抜が終わって右サイド(通常、左利き選手のポジション)に変わったんです。ポジションが変わって、シュートの撃ち方も分からないし、練習試合をやってもシュートが全然入らなかったんですが、ある時、シュートを撃ちにいて、高くボールを持ってジャンプして、空中でキーパーのどこに撃つか迷って、迷って、迷って、スイングするのではなく、ボールを置きにいくシュートになってしまったんです。シュートを置きにいく時に、トンと着地して、その着地

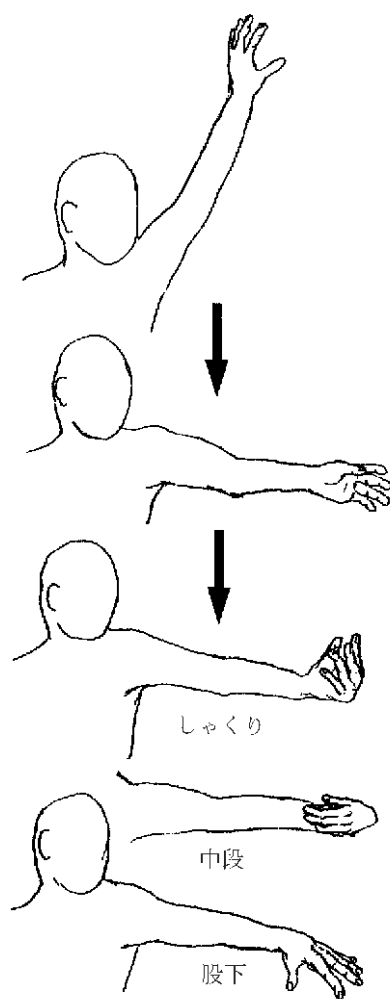


図 30 リリースにおける手首の使い方

した瞬間に、なぜか手首が自然と返っていたんです。今考えると完全な着地（ラインクロスの反則）のシュートだったんですが、それをレフリーが反則を取らずにゴールインになったんです。その試合が終わってから先生に「今のや！」みたいに言われたのがきっかけです。

練習試合で動きのコツを初めてつかんでからは、インターハイ（8月）くらいまでは、シュートが好きなように入っていました。2年生の時は3年生にゲームメーカーがいたので、コーナーで待っていて、ずらしてもらって、ゴールエリアの中へ飛び込んで、キーパーをしっかり見極めて、「そのまま撃つ」「しゃくる」「下に落とす」の撃ちわけができていました。でも、近目（ニアポストのコース）には撃てませんでした。

その当時、その動きのコツを本当に自分のものにするためにしたことはありませんでした。自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました。高めにバックスイングして（シュートに）入って、サイドハンドで撃ちにいくやり方を自分なりにしだしてから、ハンドボールの実用書に載っていたサイドシュートの連続写真を結構見て、「こう撃ちにいくとキーパーの体勢がこう見えるから」と手首の変化をイメージしました。ウエイトトレーニングはありましたが、それはチーム全体でやるウエイトで、そのシュートの感覚を継続して持たせるとか、アップさせるトレーニングは特別しませんでした。

その後、自分たちが最上級生になって（インターハイが終わって）、オフェンスがローリング（ポジションをさまざまに変えながらシューターを作り出す戦術）をしだしたんです。ローリングしだしてからサイドシュートを忘れてしまって、キーパーの捕り方に関係なしに、ただ低めに突っ込んで入って、しゃくって撃つだけになってしまいました。上に撃ちたいから、上体を突っ込んで、キーパーの体勢を下に崩して撃っていたんです。それにキーパーがごまかされれば（シュートが）入りましたけど、決め撃ちになって、キーパーをしっかりと見極めて変化することはできなくなってしまいました。

最初は高校の先生に、ループシュート（キーパーの頭の上にボールをふわりと浮かすシュート）も禁止されていました。なぜか分かりませんが、「ループシュートを撃ったら、手首の使い方ができなくなる」と言われていたんです。自分ではローリングをできなくなった理由にしていたんですが、3年生になって、先生が「ループも撃っていい」と言い出したから、本当に撃てなくなったんです。しゃくりはできるが、キーパーを観る「間」がなくなって、キーパーとの勝負ができなくなったんです。大学に入って、その4年間も全然できませんでした。ただ、決め撃ちでのしゃくりができただけです。大学の3年か4年ぐらいの時に、近目には撃てるようになったんですけど、サイドシュートが入る気はあまりしませんでした。それから、湧永に入って、最初の3年間くらいは全くだめで、決め撃ちではしゃくりを撃てるけど、それが読まれたらキーパーが手を下げなくなって、試合に使ってもらってゴールしても「たまたま入っちゃった」というような感じで、全く自信がありませんでした。その時は、シュートにいくのにボールをかついで入るモーションだったので、キーパーが遠目（ファーポストのコース）をつぶして、近目を撃たせる捕り方をしてくると、もう撃てなかったんです。

湧永の人（チームメイト）には「クイックシュート（早いタイミング撃ってキーパーのリズムを崩すシュート）が撃てないと生き（残れ）ない」と言われました。その時に、コ

一チだった藤本さんの撃ち方を真似して、シュートの入り方やフォームを変えたんです。

シーズンオフに、バルセロナ（オリンピック）を目指して、湧永の全日本選手がずっと練習を抜けていた時があって、チームの練習も1:1とか2:2とかばかりだった時期がありました。その時に、藤本さんに、結構つきっきりでシュート練習を見てもらったんです。その時期に湧永の体育館ができて、専用のウエイトルームでウエイトもすごくやりだしました。

動きのコツをつかんだのは、実業団に入って4年目のシーズンで、26歳になる年です。その年の実業団選手権では、シュートを撃てば入る状態になりました。

藤本コーチに教わって、ボールを後ろに回して、左手側から来るディフェンスをかわしてジャンプしながら、肩の入った右肩にキーパーの位置を合わせさせるようにしました。そこからサイドハンドに持っていき、シュートコースを変化させました（図31）。ただ、サイドハンドスローでそのまま振り下ろして撃つとキーパーに捕られるので、肩幅と腕の分、キーパーの位置をずらすために、腕を遠まわしさせて、サイドハンドスローで腕をいっぱいまで伸ばして撃ってまいいました。しゃくる時には、その状態から、手首でボールを真上にカツンと上げました。

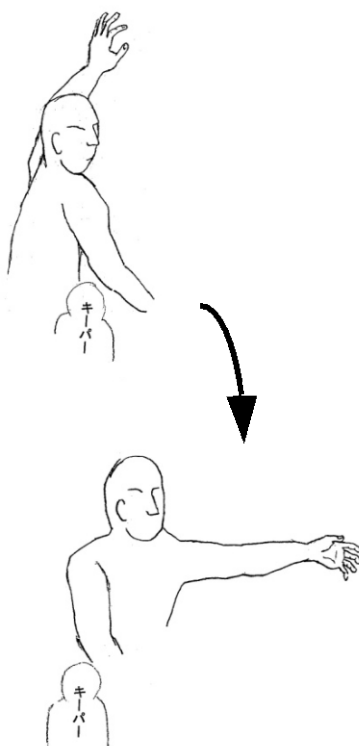


図31 スイングによってキーパーをずらす方法

その他には、ボールを後ろに回して、右肩を入れて跳び込んで、そのままループシュートを撃ったり、ゴールエリアに大きくブロードしてずれていきながら、頭の上で手首をひねって近目に落としたり、また、落とすような振りで腕をスイングさせながら、スッと肘（の力）を抜いて近目の上に撃ったり、キーパーが左から右へ調節して位置をとろうとする時や脚を上げようとする瞬間に、バックスイングする途中で、サイドハンドスローで手首だけをひねって撃ったり、腕ごと振るんじゃなくてクイックをイメージして、ソフトボールのピッチャーのウインドミルみたいな感じで撃ったりとか、いろいろなシュートを撃っていました。

感覚的には、シュートを撃つ瞬間、キーパーの動作がスローモーションのようによく見えるようになりました。えらそうな言い方をしたら、川上哲治の「ボールが止まって見えた」という感覚はこういうことかなと感じました。最初に高校の時に、完全な着地で撃った時は、シュートを撃つ瞬間までどこに撃っていいか分からなくて、躊躇していました。自信を持った後は、ボールを放す最後の瞬間までキーパーを見ているけれども、この場合も撃つところを決めていないんです。「こういうふうに入って、こう撃ってやろう」と決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まるくらい調子がよかった時もありました。

自分自身の浮き沈みとか、体の状態によってキーパーが見えて撃てている時と感覚的に決め打ちしている時もあったし、得意なキーパーと苦手なキーパーがやっぱりありましたけど、最終的に自分の一番の体勢で打ちながら、「キーパーとの駆け引きの瞬間が見極められるかどうか」というのは常に頭の中で持ちながら、常に完璧を求めました。それができていれば、どんなキーパーでも決められる自信がありました。

## 5. 考察

### (1) 実践知の獲得における4つの段階

#### ①「動きのコツとの出会い」の段階

堀田氏は、サイドシュートのリリースにおける手首の変化が初めてできた時の様子を、「突然できたんです。…ポジションが変わって、…空中でキーパーのどこに撃つか迷って、ボールを置きにいくシュートになって…着地した瞬間に、なぜか手首が自然と返っていた

んです」と語っている。初めてのポジションで、今まで経験したことがないようなシュート体勢の中で、偶然に、その運動が姿を現してきたのである。これは、わからなかった動きかたが身体によって「あっ、そうか」と合点する瞬間、私はそのように動くことができるという運動感覚能力を身体が持つ瞬間（三木，2005，p.149）であり、実践知としての「動きのコツとの出会い」と表現することができる。

動きのコツと出会うまでは、「手首を変化させなさいと言われ…，最初はイメージが湧きませんでした。…練習しても、何のきっかけもありませんでした」と語っていること、運動が初めてできる偶発位相では、まぐれ当たりを特徴とすること（金子，2002，p.422），動きのコツの部分部分が少しずつわかってきて、運動のかたちができ上がっていくのではないこと（金子，2002，p.425）などを考え合わせると、動きのコツとの出会いの瞬間は、偶然に、突然に、一気にやってくると考えられる。

## ②「動きのコツの理解」の段階

「コツをつかんだ」ということは、自らの身体を動かして、何らかの行為をうまくやり遂げる時に、その「動きかた」のかなめを自らの身体が了解していること（金子，2002，p.220）である。

ハンドボールのシュートは、ゴールキーパーとの対応が要求される個人戦術であり、その達成力は戦術的思考力（知覚・認知的要素）と技術力（技術的要素）に規定される（會田，2006b）。このことは、シュートを成功させるには、相手の運動経過の裏側にある戦術的意図を探ることと、相手の行為に対して有効な行為で反応することの2つが不可欠であることを示している（會田，2008）。

堀田氏は、動きのコツと出会った後の数ヶ月間のプレーを振り返り、「動きのコツを初めてつかんでからは、…キーパーをしっかり見極めて、『そのまま撃つ』『しゃくる』『下に落とす』の撃ちわけができていました」「自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました」と語っている。この語りから、シュートを成功させるための2つのかなめを堀田氏の身体が了解したこと、何度繰り返しても、思うような動きの感じに出会えるように動きのコツの理解が進んだことが分かる。

## ③「動きのコツの消失」の段階

堀田氏のフォワードスイングは、いずれのシュートコースに撃つ場合にも、手首を変化



させてボールをリリースする瞬間まで同じ動きであった。この動きによって、ゴールキーパーにシュートコースを予測できないようにさせたり、シュートコースを早い時機に予測させたり、動き出しの決断を早めさせたりして、ゴールキーパーの逆をつける条件を整えていた。しかし、動きのコツと出会ってから約半年後、チームのプレースタイルの変化（ローリング攻撃の導入）とシュート選択肢の増大（「うかし」の解禁）をきっかけに、動きのコツは忽然と姿を消してしまう。そこでは、「キーパーの捕り方に関係なしに、ただ低めに突っ込んで入って、しゃくって撃つだけ」になっていた。フォワードスイングからリリース動作までが、ひとかたまりの動作になってしまい、相手に自らの動きの意図を早い時機に読みとられ、ゴールキーパーに適切に対応されるようになってしまったのである。「決め撃ちになって、キーパーをしっかり見極めて変化することはできなくなって」「しゃくりはできるが、キーパーを観る『間』がなくなって、キーパーとの勝負ができなくなった」「読まれたらキーパーが手を下げなくなって、試合に使ってもらってゴールしても『たまたま入っちゃった』というような感じ」という語りからは、対峙するゴールキーパーと間主観的に「対話」すること（會田，2008）ができなくなり、ゴールキーパーの行為に対して有効な行為で反応できなくなったことがうかがえる。

運動の習熟にともない、「個々の運動構成要素も運動行為全体も、ひとりでに経過していく」（渡辺，1990），運動が自動化される。マイネル（1983，pp.406-409）は、自動化によって選手は負担が軽減され、来るべき困難を先取りするのに自由な状態になること、可変性を備えないロボットのような動きの機械化は自動化とは正反対であることを指摘している。堀田氏の場合、運動が自動化されるのではなく機械化されてしまい、その結果、運動経過が鋳型化してしまったと考えられる。運動の鋳型化は、固定化されたプログラムにしたがって戦術行為が行われるタイプの行動戦略であり、大きな欠点を持つ（ケルン，1998，pp.96-98）。堀田氏における動きのコツの消失の原因には、動きのコツの定着を目指して行った運動の自動化の方法に問題があったと推察できる。

#### ④「動きのコツの獲得」の段階

選手生命の危機を感じた堀田氏は、コーチとのつきっきりの練習により、動きのコツを獲得する。これは、最初に動きのコツに出会ってから、約10年後のことである。

堀田氏は、動きのコツと出会った高校時代におけるシュートの運動感覚を、「自然とサイドハンドでしゃくって撃っていました」と語っていた。一方、動きのコツの獲得時には、

技術的要素に関しては、「位置をずらすために、腕を遠まわしさせて、…しゃくる時には、その状態から、手首でボールを真上にカツンと上げました」と具体的かつ明瞭な身体操作で表現し、知覚・認知的要素に関しては、「ボールを放す最後の瞬間までキーパーを見て…撃つところを決めていない」「キーパーとの駆け引きの瞬間が見極められるかどうか」と相手の戦術的意図を読み取り、それに対応すると表現している。

「キーパーの動作がスローモーションのようによく見えるようになりました」「『こういうふうに入って、こう撃ってやろう』と決めていた時でも、何も意識しないで勝手に違うコースに撃って決まる」という表現は、他者とのかかわりのなかで、自ら動くのに何らの心身の束縛も障害もなく、まったく思うままに動いてすべて理に適っているという、運動感覚身体の織りなすわざの最高の位相（金子，2002，p.428）に到達したことを示すものである。

## （2）実践知の獲得過程の特徴

偶然に、まぐれにできた段階から、自分なりの動くコツをとらえ、いつやっても成功するようになるまでには、多くの特徴的な形成位相を通過しなければならない（金子，2002，p.151）。堀田氏における実践知の獲得過程は、シュートリリースにおける手首の使い方に着目すると、まぐれ当たりで偶然に「手首が返った」段階、「手首が返せる」段階、意図的に「手首を返す」段階、何も意識しないで「手首がかえる」段階を経ていった。それは、「動きのコツとの出会い」「動きのコツの理解」「動きのコツの消失」「動きのコツの獲得」という紆余曲折に満ちた、弁証法的ともいえるべき形成の過程であったととらえられる。本研究で得られた結果は、金子のコツの発生に関する考察（金子，2002，pp.220-283）を、具体的な事例を持って支持したことになる。

## 6. 要約

本章の目的は、卓越した選手における実践知の獲得過程を事例的に明らかにすること、および習熟段階に応じた個人戦術の指導に役立つ基礎的知見を導くことであった。この目的を達成するために、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、動きのコツの獲得過程に関する語りを質的

に分析した.

結果は以下の通りであった.

- 1) 対象者の実践知は、動きのコツとの出会い、動きのコツの理解、動きのコツの消失、動きのコツの獲得という過程を通して獲得されていった.
- 2) 動きのコツとの出会いの瞬間は、偶然に、突然に、一気にやってきた.
- 3) 動きのコツは、個人戦術の技術的要素と知覚・認知的要素を身体が了解した時に理解された.
- 4) 習熟を目指して運動を自動化させる過程において、運動経過が鋳型化し、対峙する選手の行為に対して有効な行為で反応できなくなり、動きのコツは消失してしまった.
- 5) 動きのコツの獲得という形成位相は、何も意識しないで合理的に行為できる段階ととらえられる.

## 第6章 終章

本章においては、本論の結論と今後の課題について述べる。結論では、まず本論の目的を概説し、設定した4つの課題ごとに得られた知見をまとめた後、本論全体の結論として、卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造と個人戦術力の向上に寄与できる知見について述べる。今後の課題では、個人戦術に関する実践知をより体系的・包括的にとらえるために、さまざまな球技種目および習熟レベルの選手を対象に個人戦術に関する実践知について検討を加える必要があることを述べる。

### 1. 結論

球技において、卓越した選手の経験に基づいた個人戦術に関する実践知を明らかにすることは、長期的な視点を持って選手を指導するために役立つ。個人戦術に関する先行研究では、自然科学の方法を用いて、戦術的思考力と技術力のそれぞれが個別に研究対象とされたり、実際のゲーム中に観察、測定および検証可能な現象がとりあげられてきた。しかし、自然科学的方法では、複雑な要因が絡み合う中で発揮される行為を総体として理解したり、行為の意味や意図を理解することはできないために、個人戦術の戦術的思考力と技術力に個別に論理的整合性を与えることはできても、個人戦術力そのものは検討されないままであった。

実践知を対象とした研究に質的研究がある。質的研究はさまざまな学問領域において行われており、実践知を語りとして事例的に記述することが実践的能力の改善に有用な知見になりうるということが指摘されている。このことは、コーチング学において、卓越した選手の実践知を提示するために、質的研究が有用であることを示唆している。

しかし、わが国においては、体系的な球技運動学研究の基盤が脆弱であり、技術、技能、戦術など、ゲームにおいて中心的な役割を持つ用語のとらえ方が、種目、研究者、指導者によって異なる。そのため、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方を検討しないまま議論を展開して、それを実践に応用させようと試みれば、用語の理解が異なるという研究上の混乱のみならず、個人およびチームの技術的・戦術的達成力の向上を抑えてしまう危険性が生じると考えられる。

また、質的研究では、多様な方法が研究目的に応じて用いられており、個人戦術に関する実践知を明らかにしていく唯一の研究方法が確立されているわけではない。

本研究では、以下の4つの課題を解決することによって、卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造を明らかにし、個人戦術力の向上に寄与できる知見を導くことを目的とした。

課題1 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討すること

課題2 球技における個人戦術に関する実践知を提示する方法を開発し、その有効性を検証すること

課題3 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造について明らかにすること

課題4 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程について事例的に明らかにすること

## (1) 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方（第2章）

第2章では、行為主体の立場から個人戦術をとらえ、個人戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討するために、まず、個人戦術とそれに関連する用語の概念を規定した。次に、実践知と身体知に関する概念を規定し、スポーツにおける運動実践知と創発身体知の関係、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知について論じた。続いて、個人戦術に関する実践知を解釈する際に必要な用語の概念について規定した。最後に、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討した。その結果、以下の4点が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知は、ゲーム状況を合目的的に解決するために、個々の選手が行う具体的・実践的な行為であり、その達成力は戦術的思考力と技術力に規定される。
- 2) スポーツにおける運動実践知は、身体的訓練において初めて習得され、その個人に身体化されていること、スポーツにおける創発身体知は、実践の場で発揮される行為とともにある知と解釈できることから、スポーツにおける運動実践知と創発身体知は同義であるにとらえられる。
- 3) 個人戦術に関する実践知は、戦術的思考力が身体化された＜カン＞身体知と技術力が身体化された＜コツ＞身体知の統一的な行為であり、＜カン＞身体知と＜コツ＞身体知はゲシュタルトクライスの関係を形成している。

- 4) 球技における個人戦術力は、チームおよびグループ戦術に規定されると同時に、それらの計画に影響を及ぼす。それゆえ、個人戦術は、戦略－チーム・グループ戦術－個人戦術の階層概念の中で位置づけられてはじめて意味を持つ。

## (2) 個人戦術に関する実践知を提示する方法の開発とその有効性の検証 (第3章)

第3章では、はじめに、個人戦術に関する実践知の構造について検討するためにはどのように質的研究を適用したらよいのか検討した。次に、個人戦術に関する実践知を選手の達成力の向上に活かせるように提示するための方法を開発し、この方法を用いて、国際レベルで活躍した元ハンドボール競技選手5名を対象に、個人戦術に関する実践知の提示を試みた。最後に、開発した方法の有効性について検討した。その結果、以下の2点が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知の構造について明らかにするには、個人戦術を客観化して対象としてとらえるのではなく、質的研究を用いて「行為者の視点」からとらえ直す必要がある。その手続きとしては、まず語りとして個別事例を提示し、次にその個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例に共通の構図を描き出すことが重要である。その際、妥当性と信頼性の2つの基準を用いて、質的研究の科学性を保証する必要がある。
- 2) 本研究で開発した個人戦術に関する実践知を提示するための具体的な方法、すなわち動きのコツを手がかりにした内省、語りによる<コツ>身体知と<カン>身体知の外化、調査者と対象者による語りの共同産出、語りの内容に関するメンバー・チェックといった手続きは、質的研究の科学性が保持でき、行為者の視点が保証できることから、個人戦術に関する実践知を提示するために有効である。

## (3) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の構造 (第4章)

第4章では、卓越した選手の個人戦術に関する実践知の構造を明らかにするために、国際レベルで活躍したハンドボールのゴールキーパー2名とシューター3名を対象に、インタビュー調査を行った。シュート局面における動きのコツに関する語りを質的に分析した結果、以下の3点が明らかになった。

- 1) 個人戦術に関する実践知を明らかにする場合、個人戦術の最小単位を対峙する選手間の関係ととらえ、そこから各選手の行為を回帰的に考察することによって実践現場に有用な知見を導くことができる。
- 2) シュートの最終局面では、ゲーム状況を有利に解決するために、ゴールキーパーもシューターも、相手選手の行為に対するリアクションの行為を志向している。また、それぞれの動きはその志向を合目的的に解決するものである。
- 3) 卓越した選手における個人戦術とは、知覚・認知的な情報処理によって選択した動きを実行する行為ではなく、対峙する選手と相互主体的関係を結び、間主観的に相手選手と「対話」しながら、行為の中で知を働かせ、その行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みである。

#### **(4) 卓越したハンドボール選手における個人戦術に関する実践知の獲得過程に関する事例研究（第5章）**

第5章では、卓越した選手における実践知の獲得過程を事例的に明らかにし、習熟段階に応じた個人戦術の指導に役立つ基礎的知見を導くために、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手を対象に、獲得した動きのコツについてインタビュー調査を行い、動きのコツの獲得過程に関する語りを質的に分析した。その結果、以下の5点が明らかになった。

- 1) 対象者の実践知は、動きのコツとの出会い、動きのコツの理解、動きのコツの消失、動きのコツの獲得という過程を通して獲得されていった。
- 2) 動きのコツとの出会いの瞬間は、偶然に、突然に、一気にやってきた。
- 3) 動きのコツは、個人戦術の技術的要素と知覚・認知的要素を身体が了解した時に理解された。
- 4) 習熟を目指して運動を自動化させる過程において、運動経過が鑄型化し、対峙する選手の行為に対して有効な行為で反応できなくなり、動きのコツは消失してしまった。
- 5) 動きのコツの獲得という形成位相は、何も意識しないで合理的に行うことができる段階ととらえられる。

#### **(5) 論文全体の結論**

##### **① 卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造**

菅原（1984, pp.131-150）は、それぞれのスポーツにおける技術の形態に着目し、球技を1つの独立した運動群としてとらえている。そこでは、球技の技術は、変化する相手、ボール、味方の動きに応じる技術であるとともに、自らもその状況を自らの身体または道具の操作によって変化させ、味方にあるいは自己に有利な状況を作り出す技術であることを示している。また、球技の技術は、動作形態の質自体を問題として理想フォームを追求する体操競技やフィギアスケートなどの技術、および個人の最高能力の発揮を課題として身体の動きの合理性を追求する陸上競技や競泳などの技術とは質的に異なることも示されている（菅原, 1984, pp.87-96 ; Weineck, 1990）。さらに、球技の技術は対応動作ともいわれ（佐藤, 1988）、刻一刻と変化する状況の中で、さまざまなプレーの可能性が存在する（中川, 1991）。これらはいずれも、球技の技術の特殊性を示しており、球技全体を対象にした包括的な視点から技術をとらえられることを示している。

バスケットボールやアイスホッケーにおける1:1の場面で、ディフェンスをドリブルで突破する場合には、ディフェンスの予測をはずそうとして突破とは逆の方向に瞬間的にフェイクをかける。この1:1の突破で用いられる方向変換の動作では、身体の傾け方、身体を使ったボールの安全保持などがすべての球技種目に共通している（デーブラー, 1985, pp.156-164）。また、ラグビー、ホッケー、ハンドボールなどの種目では、アウトナンバーを作るための戦術的な一般原則に共通点が見られる。このように、球技では、ゲームを構成する諸要因、すなわち勝敗の決定の仕方、施設・用具、ルール、プレーヤーの数、技術、戦術、ゲームコンセプトなどが、種目ごとに少しずつ異なっているが、多くの共通した特徴を持っている（デーブラー, 1985, pp.14-17）。

1つの球技種目で見られる技術や戦術の原則は、他の球技種目に適用され、競技力の向上に活かされている。1988年のソウルオリンピックにおいて、ソビエトのハンドボールチームがバスケットボールの技術や戦術の発展から多くのヒントを得て、時代を先取るような速攻の技術・戦術を構築し、非常に大きな成果を得たこと（Späte, 1988）は、その1つ例である。

このように考察してみると、ある1つの球技種目から導かれる戦術的な原則や構造は、他の球技種目においても共通して見られることが分かる。すなわち、本論において卓越したハンドボール選手を対象にして得られた、個人戦術に関する実践知の構造は、卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造として理解することができるのである。そのように理解すると、本論で得られた知見は、ハンドボール競技を越えて、その実用的



価値を高めることができる。

そこで本論では、卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知の構造として、以下の4点を結論として示す。

- 1) 球技における個人戦術に関する実践知は、ゲーム状況を合目的的に解決するために、個々の選手が行う具体的・実践的な行為であり、その達成力は戦術的思考力と技術力に規定される。身体的訓練において習得され、その個人に身体化されている実践知は、創発身体知と同義にとらえられる。個人戦術に関する実践知は、戦術的思考力が身体化された<カン>身体知と技術力が身体化された<コツ>身体知の統一的な行為であり、<カン>身体知と<コツ>身体知はゲシュタルトクライスの関係を形成している。
- 2) 卓越した選手の個人戦術に関する実践知は、対峙する相手選手の行為に適切に対応するリアクションの行為を志向している。また、それぞれの動きはその志向を合目的に解決するものである。
- 3) 卓越した選手における個人戦術に関する実践知とは、知覚・認知的な情報処理によって選択した動きを実行する行為ではなく、対峙する選手と相互主体的関係を結び、間主観的に相手選手と「対話」しながら、行為の中で知を働かせ、その行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みである。
- 4) 個人戦術に関する実践知の獲得過程では、動きのコツとの出会い、動きのコツの理解、動きのコツの消失、動きのコツの獲得という過程が見られる。この過程を通して、<カン>身体知と<コツ>身体知の統一的行為が非常に高い段階に到達する。

## ②個人戦術力の向上への寄与

### a. 技術力と戦術的思考力の養成

本論では、球技における個人戦術力は、戦術的思考力が身体化された<カン>身体知と技術力が身体化された<コツ>身体知の統一的な行為であり、<カン>身体知と<コツ>身体知はゲシュタルトクライスの関係を形成していることを明らかにした。このことは、個人戦術力の養成においては、要素還元的な考え方に基づいて、戦術的思考力と技術力のそれぞれを絶縁的に養成し、後からそれらを統合させるという方法は適切ではないことを示している。

球技における技術力の養成は、一般に繰り返し練習（ドリル形式練習）を用いて行われ

る（會田，1992）．そこでのねらいは，ゲーム状況を解決する十分な動作の獲得とその動作の自動化である（會田，1992）．しかし，実践知の構造に関する本論の結論を考慮すれば，技術力の養成では，動作の獲得および自動化だけを目的とするのではなく，「対峙する相手選手と相互主体的関係を結び，間主観的に対話できるように」という上位の目的を設定することが妥当であろう．その目的を果たそうとすれば，運動経過の型の繰り返しによる動作の鑄型化は起こりえないからである．

一方，戦術的思考力の養成は，一般にゲーム形式練習を用いて行われ，そのねらいは相手や味方プレーヤーとの対応力や適応力の向上である（會田，1992）．しかし，本論の結論を考慮すれば，戦術的思考力の養成では，相手や味方プレーヤーとの対応力や適応力の向上だけを目的とするのではなく，「対峙する相手選手の行為に適切に対応するリアクションの行為を可能にする動作を習熟させた上で」という条件を設定することが妥当であろう．その条件が満たされるならば，いわゆる状況判断能力が個人戦術に関する実践知から離れて検討されることはなくなるであろう．

このように，技術力と戦術的思考力の養成では，それぞれの個別の目的に上位の目的や条件を設定することで，技術的な達成と同時に戦術的な問題を処理できるようになると考えられる．

ところで，動作を効率的に習得したり修正するためには，意識性の原則にしたがって，動作の細部を明確に意識しなければならない．一方，本論で得られた知見，すなわち，卓越した選手における個人戦術は前意識的な営みであること，対峙する選手の行為に対して有効な行為で反応できなくなると動きのコツは消失してしまうことは，自らの動作を志向すると個人戦術力の発揮が妨げられることを示している．これらのことは，個人戦術力の養成では，動作そのものを志向してその習得や修正を目指すことと，対峙する選手と対話することを志向して動作に関しては前意識的に出来るようにすることの2つが求められており，意識して習得・修正した動作をゲームで前意識的に発揮し，前意識的に発揮した動作を省察し，練習で意識的に修正するといった繰り返しが効果的であることを示唆していると考えられる．

#### **b. 個人戦術に関する実践知の活用**

本論では，第4章において，2名のゴールキーパーはいずれもシューターよりも後に動いてシュートを捕るために，ミート動作前の準備局面においては正確に位置をとることを志向し，ミート動作を行う主要局面においては瞬発的にミート動作を行うことを志向して

いることを明らかにした。また、3名のシューターはいずれもゴールキーパーより後に動いてシュートを決めるために、スイング動作前の準備局面においてはゴールキーパーの正しい位置どりを困難にさせることを志向し、スイングおよびリリース動作を行う主要局面においては自らの動作スピードを速めることよりも、相手の判断を迷わせたり、誤らせることで、相対的に自らのリリース動作の決断時機を遅らせることを志向していることを明らかにした。しかし、2名のゴールキーパーの獲得した個人戦術に関する実践知はそれぞれ異なり、同様の傾向は3名のシューター間でも認められた。つまり、卓越した選手たちは、共通の志向を持ちながらも、それぞれに固有の実践知を持っていたのである。このことは、対象者の動きのコツから浮き彫りになってくるプレーに対する考え方や志向が、対象者と同じ身体的、体力的、技術的条件をもたない選手にとっても有用な知見になることを示している。

金子（2007, p.19）は、動感意識が効果的に伝承されるためには、間動感性の存在が確認される必要があることを示唆している。また、身体知の獲得には、反復数の増加ではなく、動感運動の状況からキャッチする視覚的、聴覚的情報から、その類似の意味構造を読み取り、そこに共通する原理を見つけることが決定的な重要さを持っている（金子, 2005b, pp.50-51）と指摘している。これらのことは、卓越した選手の実践知をコーチング実践に応用する際には、単に、彼らの語りの内容をなぞるようにトレーニングを積む／積ませるだけでは、個人戦術力の向上は期待できないことを意味している。

卓越した選手の個人戦術に関する実践知は、当該種目の個人戦術を標準化するものではない。コーチング実践において個人戦術力の向上を目指す際には、指導者や選手は、個人戦術に関する実践知の個別事例を読み解きながら、各事例に共通する志向を見つけることがまず重要であり、このことによって、卓越した選手の個人戦術に関する実践知は他の選手や他の状況にも通じる実用性を持つようになるであろう。

## 2. 今後の課題

本論では、個人戦術に関する実践知の構造を明らかにし、個人戦術力の向上に寄与できる知見を導くことを目的として、まず、球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討し、次に、個人戦術に関する実践知を提示する研究方法を開発し、最後に、

卓越したハンドボール選手を対象とした研究を通して、球技の個人戦術に関する実践知の構造とその獲得過程について論及した。今後、卓越したハンドボール選手だけでなく、他の球技種目の選手における個人戦術に関する実践知について検討したり、さまざまな習熟レベルの選手における個人戦術に関する実践知について検討することで、個人戦術に関する実践知をより体系的・包括的にとらえることが可能になると考えられる。また、このことは、とかく分化・専門化しがちなコーチング学研究およびコーチング実践において、種目間の境界線を好ましい意味で曖昧にし、コーチング学の統合およびコーチング実践の総合の基礎を築くために有用な示唆を与えると考えられる。

一流競技選手の実践知は、運動形成の最高レベルである「自在位相」(金子, 2005a, p.67)における実践知を理解するために役立った。しかし、それは、運動形成段階にある選手やその指導者、すなわち育成段階および導入段階にある選手や指導者にとっては、レベルが高すぎて「参考にならないコツ」になったり、習熟を妨げる「早すぎるコツ」になってしまう危険性をはらんでいる。そこで、一流競技選手における技術・戦術的な個体的発生を当該スポーツ種目における成功例ととらえ、動きのコツの獲得過程を、新たな動きの獲得に試行錯誤していた「原志向および探索位相」(金子, 2005a, p.65)、偶然にその動きができた「偶発位相」(金子, 2005a, pp.65-66)、いつでもその動きができるように繰り返し練習した「形態化位相」(金子, 2005a, pp.66-67)に着目して例証的に明らかにすることは、それぞれの習熟段階に応じた効果的な指導法を探る基礎的知見を得るために有用であろう。

本論では、国際レベルで活躍した1名のハンドボール選手を対象に、動きのコツの獲得過程に関する語りを質的に分析し、その手がかりを得た。今後、複数の事例を対象に、個人戦術に関する実践知の獲得過程について検討し、動きのコツの発生および発達の共通点および相違点について明らかにすることで、技術・戦術学習の導入段階にあるジュニアユース期、育成段階にあるジュニア期、完成段階にあるシニア期のそれぞれの習熟・年齢段階における効果的な指導に適用できる構造を描き出せるようになると考えられる。

## 注

### 注 1) 球技

球技を、2つのチームまたは個人が1つのボールを媒介として、一定のルールにしたがい直接的に競うゲーム (Stiehler et al., 1988, S.14-15) ととらえる。

### 注 2) ゲーム状況

ボールゲームにおけるゲーム状況は、ゲーム経過および現在の相手、味方、ボールに関する時間的・空間的状况によって複合的に特徴づけられる (Döbler, 1989, S.173)。

### 注 3) 逆スピンシュート

ボールを持っている腕を下から前に持っていく途中で、前腕を一気に回内させてボールに回転をかけてリリースし、ゴールキーパーの届かない地点にバウンドさせ、バウンド後にボールがゴールに向かうようにスピンさせるシュート。ゴールに対してほとんど角度がないサイドポジションからでもゴールをねらうことができる。

### 注 4) フェイント

対峙する相手に意図しているプレーを見破られないようにし、時間的、空間的に相手よりも優位に立つことをねらいとした戦術行為 (Döbler, 1989, S.191)。

### 注 5) 情況

一般に、状況と情況は区別されない (北原・鳥飼, 1995)。すなわち、状況は、さまざまに変化する物事のその時どきの様相ととらえられる。これに対して、現象学では、状況は、即自 (所与) が対峙に対してある特定の意味を持ったものとして現れる時に成立するものと定義されている (木田ほか, 2004)。本論では、原則的に「状況」を用いるが、参考および引用文献の原典が「情況」という用語を用いている場合には、「情況」を用いる。

### 注 6) フェイク

フェイントを構成する要素の一つであり、相手を惑わしたり、間違った行為を相手に予測させたりする見せかけの動作 (Döbler, 1989, S.77-78)。フェイクの成否はフェイントの成果に影響することになる。

### 注 7) 看護学

ベナー (2004, p.179) は、看護のエキスパートに要求される実践的思考は、行動しながら考えること (thinking-in-action)、動きながら思考すること (reasoning in transition)

であり、原則に基づいて予測でき、標準化できる状況における意思決定と区別している。

注 8) 教育学

佐藤（1996）は、反省的实践家をモデルとする教師の専門的力量は、「教育の問題状況に主体的に関与して、子どもと生きた関係を取り結び、省察と熟考によって問題を表象し解決策を選択し判断する実践的な見識」であり、それは「複合的で高度な知見を駆使して展開される」と述べている。

注 9) 暗黙知

語ることはできないが知っている知、普段は意識や言葉の下に隠れているが日常で働いている知ととらえる。ポラニー（1980, p.19）は、人間の知識について再考し、「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」（ポラニー, 1980, p.15）、「言葉を用いたとしても、我々には語ることはできないなにもものかがあとにのこされてしまう」（ポラニー, 1980, p.17）と述べている。

## 文献

- 阿江通良（1999） 動きのコツをさぐる．体育の科学，49：868-869.
- 阿江通良 編（2002） 平成13年度スポーツ医・科学研究報告 No.VII ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第2報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.160-170.
- 會田 宏（1992） ボールゲームにおける技術の特性および技術トレーニングのあり方：球技運動学的視点からの一考察．スポーツ運動学研究，5：17-25.
- 會田 宏（1994） ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究．スポーツ運動学研究，7：25-32.
- 會田 宏（1999） 球技の監督にとって戦術とは？．バイオメカニクス研究，3：68-73.
- 會田 宏（2002） ハンドボール・堀田敬章氏の面接調査結果．阿江通良 編 平成13年度スポーツ医・科学研究報告 No.VII ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第2報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.141-146.
- 會田 宏（2003） ハンドボール・橋本行弘氏の面接調査結果．阿江通良 編 平成14年度スポーツ医・科学研究報告 No.III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第3報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.139-145.
- 會田 宏（2004a） ハンドボール・王濤氏の面接調査結果．阿江通良 編 平成15年度スポーツ医・科学研究報告 No.III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第4報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.100-104.
- 會田 宏（2004b） ハンドボール・西山清氏の面接調査結果．阿江通良 編 平成15年度スポーツ医・科学研究報告 No.III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第4報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.105-109.
- 會田 宏（2004c） ハンドボール・玉村健次氏の面接調査結果．阿江通良 編 平成15年度スポーツ医・科学研究報告 No.III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究－第4報－．財団法人日本体育協会：東京，pp.110-115.
- 會田 宏（2006a） 球技の戦術．（社）日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典．平凡社：東京，pp.178-179.
- 會田 宏（2006b） 個人戦術．（社）日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典．平凡社：東京，p.179.
- 會田 宏（2008） ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的

- 研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに，体育学研究，53：61-74.
- 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤 学 編（2005） 教育研究のメソドロジー．東京大学出版会：東京.
- 青山清英・越川一紀・青木和浩・森長正樹・吉田孝久・尾縣 貢（2009） 国内一流走幅跳選手におけるパフォーマンスに影響を与える質的要因と量的要因の関係に関する事例的研究．体育学研究，54：197-212.
- 朝岡正雄（1990） 運動学用語解説．金子明友・朝岡正雄 編著 運動学講義．大修館書店：東京，p.275.
- 足利義男・石川俊紀・火箱保之・増田 洋・川井 浩（1989） 選択反応時間のトレーニング効果について．京都大学医療技術短期大学部紀要，9：28-36.
- ベナー：早野真佐子 訳（2004） エキスパートナースとの対話ーベナー看護論・ナラティブス・看護倫理．照林社：東京.
- ベナー・フーパー＝キリアキディス・スタナード：井上智子 監訳（2005） 看護ケアの臨床知ー行動しつつ考えること．医学書院：東京，p.28.
- Beyer, E. (1987) Wörterbuch der Sportwissenschaft. Verlag Karl Hofmann: Schorndorf, S.224.
- Brace, D. K. (1966) Basketball skills tests for Girls. AAHPER.
- Costantini, D. (1995) Den Angriff angreifen－Prinzipien der aktiven Abwehr. handballtraining, 7/8：37-42.
- Dale, G. A. (1996) Existential phenomenology: Emphasizing the experience of the athlete in sport psychology research. The Sport Psychologist, 10：307-321.
- デーブラー：谷釜了正 訳（1985） 球技運動学．不昧堂出版：東京.
- Döbler, H. (1989) Grunbegriffe der Sportspiele. Sportverlag：Berlin.
- Ehret, A. und Späte, D. (1994) Leitlinien der neuen DHB-Rahmentrainingskonzeption für Kinder und Jugendliche. handballtraining, 3/4：3-11.
- Feddern, P. (1995) Wie ist das französische Abwehr-Bollwerk zu knacken? . handballtraining, 7/8：43-52.
- フリック：小田博志ほか 訳（2002） 質的研究入門ー〈人間の科学〉のための方法論．春秋社：東京.
- 古川康一・植野 研・尾崎知伸・神里志穂子・川本竜史・渋谷恒司・白鳥成彦・諏訪正樹・



- 曾我真人・瀧 寛和・藤波 努・堀 聡・本村陽一・森田想平（2005） 身体知研究の潮流－身体知の解明に向け－. 人工知能学会論文誌, 20 : 117-128.
- Gibson, J. J. (1966) The senses considered as perceptual systems. Houghton Mifflin : Boston.
- 濱田幸二（2009） バレーボールのチームづくりに関する研究－コーチのスターティングメンバー構想について－. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 42-48.
- 浜田寿美男（2007） 虚偽自白の心理学とその射程. 認知心理学研究, 4 : 133-139.
- 浜田寿美男（2010） 現場の心理学はどこまで普遍性をもちうるのか：渦中の視点, 観客の視点, 神の視点. 日本質的心理学会第7回大会 大会プログラム抄録集 : 21-23.
- ヘベル・リップpens : 朝岡正雄 訳（2001） 専門家の知－その構造と改善について－. スポーツ運動学研究, 14 : 59-68. <Hebbel-Seeger, A. und Lippens, V. (1995) Professionelles Wissen. Überlegungen zu Struktur und Verbesserung. Psychologie und Sport, 2 : 106-114. >
- 平岡秀雄（1980） ハンドボールの防禦における対応動作研究：動作先取について. 東海大学紀要 体育学部, 10 : 95-103.
- 藤林文博（1997） オレ・オルソン監督によるハンドボールのチーム作りに関する研究. スポーツ運動学研究, 10 : 87-93.
- Hycner, R. H. (1985) Some guidelines for the phenomenological analysis of interview data. Human Studies, 8 : 297-303.
- 池田謙一（1986） 緊急時の情報処理. 東京大学出版会 : 東京, pp.58-64.
- 井上尚武・杉山豊人（2009） サッカーにおけるチームづくりとゲームパフォーマンスに関する研究. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 162-168.
- 金子明友（1984） 運動技術論. 岸野雄三ほか 編 現代保健体育学体系 9 序説運動学 第13 版. 大修館書店 : 東京, p.100.
- 金子明友（1985） 運動技術の今日的問題性. 体育科教育, 33 (11) : 20-22.
- 金子明友（2002） わざの伝承. 明和出版 : 東京.
- 金子明友（2005a） 身体知の形成（上）. 明和出版 : 東京.
- 金子明友（2005b） 身体知の形成（下）. 明和出版 : 東京.
- 金子明友（2007） 身体知の構造. 明和出版 : 東京.
- 金子一秀（1993a） 戦術. 朝岡正雄 監訳 日独英仏対照スポーツ科学事典. 大修館書店 : 東京, pp.329-330.
- 金子一秀（1993b） 達成能力. 朝岡正雄 監訳 日独英仏対照スポーツ科学事典. 大修館

- 書店：東京，p.371.
- 笠井恵堆・多和健雄・江田昌佑・松永尚久（1970） 球技の対応動作に関する実験的研究：打球に対する内野手のスタート動作について．体育学研究，14：233-237.
- 加藤貴昭（2009） スキル獲得．古川康一 編 知の科学 スキルサイエンス入門－身体知の解明へのアプローチ．オーム社：東京.
- 加藤敏弘（1993） 人間の運動と身体．茨城大学健康スポーツ教育研究会 編 健康スポーツの科学．大修館書店：東京，pp.74-75.
- ケルン：朝岡正雄ほか 監訳（1998） スポーツの戦術入門．大修館書店：東京.
- 木田 元・野家啓一・村田純一・鷺田清一 編（2004） 現象学事典．弘文堂：東京，p.226.
- 木村 敏（1988） あいだ．弘文堂：東京.
- 衣笠 隆・藤田紀盛・野間明紀（1986） 事前の筋活動が反応時間に及ぼす影響について－選択反応と反応の大きさによる場合－．筑波大学体育科学系紀要，9：309-314.
- 北原保雄・鳥飼浩二（1995） 同音語同訓語使い分け辞典．東京堂出版：東京，p.192.
- 小林康夫（1994） 学問の行為論．小林康夫・船曳建夫 編 知の技法．東京大学出版会：東京.
- Krüger, A. und Niedlich, D.（1985） Hundert Ballspiel-Fertigkeitstests. Verlag Karl Hofmann : Schorndorf.
- Kuhn, W.（1978） Zur Leistungserfassung im Sportspiel－Entwicklung einer Fußballspezifischen Testbatterie－. Verlag Karl Hofmann : Schorndorf, S.11-12.
- 鯨岡 峻（1999） 関係発達論の構築．ミネルヴァ書房：京都.
- 鯨岡 峻（2005） エピソード記述入門．東京大学出版会：東京.
- Lutter, H.（1982） Messung und Bewertung der Sportliche Leistung. Röthig, P. und Größing, S. (Hrsg.) Bewegungslehre. Limpert Verlag : Wiebelsheim , S.99-101.
- マイネル：金子明友 訳（1983） マイネル・スポーツ運動学，第 3 版．大修館書店：東京.
- 松田岩男（1970） 運動技術の構造とスキルテスト．体育科教育，18（2）：15-17.
- メルロ＝ポンティ：竹内芳郎ほか 訳（1974） 知覚の現象学 2. みすず書房：東京，p.219.
- 道上静香・阿江通良（1998） 世界一流女子テニスプレーヤーのフォアハンド・ストロークのキネマティクスの分析－クローズドスタンスとオープンスタンスの比較－．バイオメカニクス研究，2：242-251.

- 道上静香・阿江通良（2002） 世界一流女子テニス選手のフォアハンド・グラウンド・ストロークのキネマティクスの分析ークロス打ちとストレート打ちの比較ー. バイオメカニクス研究, 6 : 259-269.
- 三木四郎（2005） 新しい体育授業の運動学. 明和出版：東京.
- 箕輪憲吾（2007） バレーボールのチームづくりに関する事例研究ー短期大学女子チームの失敗例についてー. スポーツ運動学研究, 20 : 83-95.
- 三浦 健・濱賢次郎・元 炳善（2009） バスケットボールにおける対戦チームのキープレイヤーへの対応についてーディフェンス面での実践事例と反省点ー. スポーツパフォーマンス研究, 1 : 266-274.
- 水上 一・河村レイ子・大西武三（1999） 大学女子ハンドボールチームでの年間を通してのチームづくりに関する事例研究. スポーツ運動学研究, 12 : 59-78.
- 村上陽一郎（1981） 技術を考えるための予備的考察ー古代ギリシア社会を手がかりとしてー. 村上陽一郎 編 知の革命史7 技術思想の変遷. 朝倉書店：東京.
- 村木征人（1991） スポーツ科学における事例研究の意義と役割ーコーチング理論と実際の乖離撞着を避けるためにー. スポーツ運動学研究, 4 : 129-136.
- 村山孝之・田中美史・関矢寛史（2009） 「あがり」の発現機序の質的研究. 体育学研究, 54 : 263-277.
- 無藤 隆（2004） 研究における質対量. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.2-7.
- 長野 大・水上 一・河村レイ子・會田 宏（2010） 最終依存率と最終成功率から選手を評価する試み. (財) 日本ハンドボール協会 ハンドボール研究, 12 : 126-130.
- 長岡由起子（2007） スポーツにおける事例の独自性ー事象を異なる水準で捉えることの意義ー. スポーツ心理学研究, 34 : 11-21.
- 中川 昭（1982） ボールゲームにおけるゲーム状況の認知に関するフィールド実験ーラグビーの静的ゲーム状況についてー. 体育学研究, 27 : 17-26.
- 中川 昭（1984） ボールゲームにおける状況判断研究のための基本概念の検討. 体育学研究, 28 : 287-297.
- 中川 昭（1986） ボールゲームにおける状況判断の指導に関する理論的提言. スポーツ教育学研究, 6 : 39-45.
- 中川 昭（1991） ボールゲームにおける状況判断能力と状況認知能力の関係. スポーツ

運動学研究, 4 : 23-32.

中川 昭 (2000) 状況判断能力を養う. 杉原 隆・船越正康・工藤孝幾・中込四郎 編著 スポーツ心理学の世界. 福村出版 : 東京, pp.52-66.

中川 昭 (2006) 反応時間. (社) 日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典. 平凡社 : 東京, p.391.

中込四郎 (2003) 面接調査の方法について. 阿江通良 編 平成 14 年度スポーツ医・科学研究報告 No.III ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究—第 3 報—. 財団法人日本体育協会 : 東京, pp.3-4.

中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か. 岩波書店 : 東京.

波平恵美子・道信良子 (2005) 質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして. 医学書院 : 東京, p.1.

Nicholls, A., Holt, N. L., and Pollman, R. (2005) A phenomenological analysis of coping effectiveness in golf. *The Sport Psychologist*, 19 : 111-130.

西村ユミ (2001) 語りかける身体—看護ケアの現象学. ゆみる出版 : 東京.

野口裕二 (2005) ナラティヴの臨床社会学. 勁草書房 : 東京, pp.21-22.

小田博志 (1999) ドイツ語圏における質的健康研究の現状. 日本保健医療行動科学会年報, 14 : 223-239.

小木曾一之 (2006) 反応時間. (社) 日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典. 平凡社 : 東京, p.673.

大西武三 (1973) ハンドボールの巧みさについて. 体育の科学, 23 : 308-312.

大西武三・水上 一・河村レイ子 (1983) ハンドボール. ぎょうせい : 東京.

大西武三・水上 一・河村レイ子 (1989) ボールゲームの対応動作に関する研究 : ハンドボールを例として. 筑波大学体育科学系運動学研究分野運動学研究, 5 : 73-79.

鬼澤陽子・高橋健夫・岡出美則・吉永武史 (2004) バスケットボールの攻撃の映像を用いた戦術的状況判断テスト作成の試み. 体育科教育学研究, 20 (2) : 1-11.

大築立志 (2006) 巧みな動作. (社) 日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典. 平凡社 : 東京, pp.640-641.

ポラニー : 佐藤敬三 訳 (1980) 暗黙知の次元. 紀伊國屋書店 : 東京.

ライル : 坂本百大・宮下治子・服部裕幸 訳 (1987) 心の概念. みすず書房 : 東京, pp.27-33.

Roth, K. (1989) *Taktik im Sportspiel*. Verlag Karl Hofmann : Schorndorf, S.6-8.

- 西條剛央 (2007) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編. 新曜社: 東京.
- 西條剛央 (2008) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM アドバンス編. 新曜社: 東京.
- 斎藤清二・岸本寛史 (2003) ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. 金剛出版: 東京.
- 桜井 厚・小林多寿子 編著 (2005) ライフストーリー・インタビュー. せりか書房: 東京.
- 佐藤 学 (1996) 教育方法学. 岩波書店: 東京, pp.137-138.
- 佐藤 徹 (1990) 技術の運動学的認識. 金子明友・朝岡正雄 編著 運動学講義. 大修館書店: 東京, pp.67-75.
- 佐藤 靖 (1988) ハンドボール競技における運動研究の方法論的枠組みの検討 (1) - 対応力をめぐって -. スポーツ運動学研究, 1 : 11-26.
- Schmidt, R. A. and Lee, T. D. (2005) Motor control and learning: a behavioral emphasis. Human Kinetics: Illinois.
- 関矢寛史 (2000) 予測のメカニズムー情報処理アプローチと生態学的アプローチー. 体育の科学, 50 : 942-951.
- 柴田庄一・遠山仁美 (2003) 技能の習得過程と身体知の獲得-主体的関与の意義と「わざ言語」の機能-. 言語文化論集, 24 (2) : 77-93.
- 清水 諭 (2007) アスリートの身体感覚へのアプローチ. 体育科教育, 55 (1) : 42-45.
- ショーン: 佐藤 学・秋田喜代美 訳 (2001) 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える. ゆみる出版: 東京, pp.214-215.
- Späte, D. (1988) Die neue Komponente im internationalen Handball - die asiatische Spielauffassung. Handballtraining, 11 : 4-13.
- Späte, D. und Wilke, G. (1989) Antizipatives Abwehrspiel (2.Auflage). Philippka-Verlag : Münster, S.9-23.
- Späte, D. (1992) Analyse des Olympischen Handball-Turniers 1992 (1.Teil) : Kreativ, variantenreich, spielbestimmend! Die Spielweise von Jackson Richardson als Vorne Mitte in der 3:2:1-Abwehr Frankreichs. handballtraining, 9 : 3-17.
- Stiehler, G., Konzag, I., und Döbler, H. (1988) Sportspiele. Sportverlag : Berlin.
- 菅原 禮 編著 (1984) スポーツ技術の社会学. 不昧堂出版: 東京.
- 杉村和美 (2004) 事例研究. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編

- 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.169-174.
- 諏訪正樹 (2004) 「こと」の創造：行為・知覚・自己構築・メタ記述のカップリング. 認知科学, 11：26-36.
- 諏訪正樹 (2009) 身体的メタ認知：身体知獲得の認知的的方法論. 古川康一 編 知の科学 スキルサイエンス入門－身体知の解明へのアプローチ. オーム社：東京, p.159.
- 竹田青嗣 (1989) 現象学入門. 日本放送出版協会：東京, p.224.
- 瀧井敏郎 (1988) 学習の適時性に合ったサッカーの内容. 学校体育, 41 (12)：23-28.
- 瀧井敏郎 (1990) 戦術の運動学的認識. 金子明友・朝岡正雄 編著 運動学講義. 大修館書店：東京, p.78.
- Thiel, A., Hecker, S., und Späte, D. (1991) Halten wie wir (2.Auflage). Philippka-Verlag :Münster, S.78.
- 徳田治子 (2004) ライフストーリー・インタビュー. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.148-154.
- 植野 研 (2009) 身体スキルとは. 古川康一 編 知の科学 スキルサイエンス入門－身体知の解明へのアプローチ. オーム社：東京, p.1.
- 和田 尚・阿江通良・遠藤俊郎・田中幹保 (2003) バレーボールのスパイク動作における体幹のひねりに関するバイオメカニクスの研究. バレーボール研究, 5：1-5.
- ヴァイツゼッカー：木村 敏・浜中淑彦 訳 (1975) ゲシュタルトクライス. みすず書房：東京.
- 王 水泉 (2010) 教育における身体知の研究：金子明友の身体知の構造分析論と運動学習・運動教育の問題. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, 59：59-67.
- 渡辺忠夫 (1990) 運動の定着と適応. 金子明友・朝岡正雄 編著 運動学講義. 大修館書店：東京, p.147.
- 渡邊芳之 (2004) 質的研究における信頼性・妥当性のあり方. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.59-64.
- Weineck, J. (1990) Optimales Training (7.Auflage). perimed-Fachbuch-Verlag :Erlangen, S.289-307.
- Yamada, E., Aida, H., and Nakagawa, A. (2011) Notational analysis of shooting play in the

middle area by world-class players and Japanese elite players in women's handball. International Journal of Sport and Health Science, 9 : 15-25.

やまだようこ (2000) 人生を物語る. ミネルヴァ書房 : 京都.

やまだようこ (2004) 質的研究の核心とは. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社 : 東京, pp.8-13.

山崎 治・三輪和久 (2001) 外化による問題解決過程の変容. 認知科学, 8 : 103-116.

吉田敏明 (1993) チームづくりに関する事例研究－大学女子バレーボールチームの場合－. スポーツ運動学研究, 6 : 11-22.

吉田敏明 (1996) バレーボールにおけるサーブレシーブフォーメーションの変更に関する研究－5人W型及び4人N型から5人逆W型への移行－. スポーツ運動学研究, 9 : 29-41.

吉井秀邦 (2010) サッカーにおけるチーム作りに関する一考察－躍進するエクアドルサッカーの原点を探る－. 順天堂スポーツ健康科学研究, 1 : 426-439.

吉井四郎 (1985) バasketボールのコーチング 基礎技術編 第11版. 大修館書店 : 東京.

湯浅泰雄 (1990) 身体論－東洋的身体論と現代－. 講談社 : 東京, pp.273-276.

## 謝辞

本論文は、1992年から2011年までの20年間にわたって、筑波大学および武庫川女子大学において行った研究の成果をまとめたものです。筑波大学体育系教授 朝岡正雄先生には、博士論文執筆の機会を与えていただくとともに、主査としてあたたかい激励とご指導をいただきました。また、筑波大学体育系教授 中川 昭先生、同准教授 中山雅雄先生、同准教授 木塚朝博先生には、副査として論文の完成度を高める貴重なご助言をいただきました。ここに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

私は筑波大学・筑波大学大学院時代より、幸いにも、多くの先生からご指導をいただてきました。元筑波大学体育科学系教授 大西武三先生、元筑波大学体育科学系教授 水上一先生、筑波大学体育系教授 河村レイ子先生には、ハンドボールをプレー・指導する楽しさ、科学する面白さを教えていただきました。元筑波大学体育科学系教授 高松 薫先生には、研究の心構え、論文執筆の方法を懇切丁寧に教えていただきました。武庫川女子大学健康・スポーツ学部教授 檜塚正一先生には、大学教員、指導者としてのあるべき姿勢を教えていただきました。ここに深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

筑波大学体育系教授 阿江通良先生には、一流競技選手の動きのコツに関する調査に取り組む機会を与えていただきました。また、日本を代表する一流競技選手の方々には、調査用紙への回答、面接調査への対応に多大な時間と労力を費やしていただきました。ここに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

本論文の作成に際しては、2001～2004年度日本体育協会スポーツ医・科学研究費（スポーツ振興くじ（toto）助成）、2006～2007年度科学研究費補助金（基盤研究 C 課題番号 18500500）、2010～2011年度科学研究費補助金（基盤研究 C 課題番号 22500562）をいただきました。ここに深く感謝いたします。

最後になりましたが、これまで永年にわたり研究活動を陰ながら支えてくれた家族に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

2012年3月

會 田 宏